

---

---

**Oracle(R) Hyperion Enterprise Performance  
Management System**

リリース 11.1.1.3

---

ライフサイクル管理ガイド

**ORACLE®**  
ENTERPRISE PERFORMANCE  
MANAGEMENT SYSTEM

EPM System ライフサイクル管理ガイド, 11.1.1.3

Copyright © 2008, 2009, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM Information Development Team

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アSEMBル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントが、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供される場合は、次の Notice が適用されません。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS: Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、このソフトウェアを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアおよびドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても、一切の責任を負いかねます。

---

# 目次

---

<b>第 1 章 ライフサイクル管理について</b> .....	11
ライフサイクル管理と移行 .....	11
ライフサイクル管理の機能 .....	12
ライフサイクル管理のコンポーネント .....	12
ライフサイクル管理をサポートする EPM System 製品とコンポーネント .....	13
移行のシナリオ .....	14
ファイル・システムからファイル・システムへの移行 .....	14
アプリケーションからアプリケーションへの直接的な移行 .....	15
ライフサイクル管理の用途 .....	16
<b>第 2 章 ライフサイクル管理の開始</b> .....	17
ライフサイクル管理のクイック・スタート .....	17
ライフサイクル管理の要件 .....	18
ライフサイクル管理のインストール .....	20
セキュリティ .....	20
複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート .....	20
<b>第 3 章 Shared Services Console</b> .....	23
ライフサイクル管理および Shared Services Console の統合 .....	23
Shared Services Console の起動 .....	23
Shared Services Console の概要 .....	24
Shared Services Console でのナビゲート .....	25
<b>第 4 章 アプリケーション・グループおよびアプリケーションでの作業</b> .....	27
概要 .....	27
アプリケーション・グループの使用 .....	27
アプリケーション・グループの作成 .....	28
アプリケーション・グループ・プロパティの変更 .....	28
アプリケーション・グループの削除 .....	29
アプリケーションの管理 .....	29
アプリケーションの移動 .....	30
複数のアプリケーションの削除 .....	30

アプリケーションの削除 .....	31
<b>第 5 章 ライフサイクル管理および Shared Services Console での作業</b> .....	<b>33</b>
ライフサイクル管理の移行プロセス .....	33
Shared Services Console の要件 .....	33
アーチファクトの表示 .....	34
アーチファクトの検索 .....	35
アーチファクトの移行 .....	36
ファイル・システムへの移行 .....	36
ファイル・システムからの移行 .....	38
アプリケーションから他のアプリケーションへの直接的な移行 .....	39
移行定義の保存 .....	41
移行定義の編集または実行 .....	41
編集する個々のアーチファクトのエクスポートとインポート .....	42
編集する個々のアーチファクトのエクスポートとインポート .....	42
個々のアーチファクトの編集 .....	43
個々のアーチファクトのインポート .....	43
ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行 .....	44
Shared Services レジストリ・データの編集 .....	45
Shared Services レジストリ・データの表示 .....	46
Shared Services レジストリ・データのエクスポート .....	47
Shared Services レジストリ・データの編集 .....	47
Shared Services レジストリ・データのインポート .....	47
ライフサイクル管理のレポート .....	48
移行ステータス・レポート .....	48
アーチファクト・レポートの生成 .....	50
Shared Services Console の移行プロパティ・ファイル .....	51
<b>第 6 章 ライフサイクル管理ユーティリティの使用法</b> .....	<b>55</b>
ライフサイクル管理ユーティリティの機能と要件 .....	55
機能 .....	55
ライフサイクル管理ユーティリティの要件 .....	55
ライフサイクル管理ユーティリティのインストール .....	56
システムの要件 .....	56
ユーティリティのインストール .....	56
ライフサイクル管理ユーティリティの使用法 .....	56
移行定義の作成 .....	57
移行定義ファイルの XML スキーマ .....	57
ライフサイクル管理ユーティリティの移行プロパティ・ファイル .....	63
ユーティリティの実行 .....	65

<b>第7章 ライフサイクル管理のトラブルシューティング</b> .....	69
ライフサイクル管理のトラブルシューティングについて .....	69
SSL アプリケーションがフリーズする、またはエラーが表示される .....	69
Shared Services URL でサーバーの完全修飾名を使用する .....	69
ライフサイクル管理の移行ウィザードが移行処理中にフリーズする .....	70
ライフサイクル管理のエクスポート・ファイルのパスワードにはカッコ({})を 含まれない .....	70
エラー・メッセージでインポート・ファイル・フォーマットがサポートされ ていない .....	70
ライフサイクル管理診断 .....	71
<b>付録 A. 配置メタデータとライフサイクル管理</b> .....	73
配置メタデータのアーチファクトについて .....	73
配置メタデータの役割の要件 .....	73
配置メタデータの移行の必要条件 .....	74
配置メタデータのアーチファクト・リスト .....	74
登録アーチファクト・リストについて .....	74
登録アーチファクト .....	75
Shared Services レジストリのアーチファクト .....	75
配置メタデータの移行オプション .....	75
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	76
<b>付録 B. Shared Services とライフサイクル管理</b> .....	77
Shared Services のアーチファクトについて .....	77
Shared Services の役割の要件 .....	77
Shared Services の移行の前提条件 .....	78
Shared Services のアーチファクト・リスト .....	78
アーチファクト・リストについて .....	79
ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のアーチファクト .....	79
タスク・フローのアーチファクト .....	80
Shared Services アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関 係 .....	81
Shared Services ネイティブ・ディレクトリの移行オプション .....	81
ネイティブ・ディレクトリの移行エクスポート・オプション .....	81
ネイティブ・ディレクトリの移行インポート・オプション .....	82
ネイティブ・ディレクトリの CSV ファイル .....	82
Shared Services タスク・フロー移行のエクスポート・オプションとインポート・ オプション .....	88
サンプルの移行定義ファイル .....	89
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	91

<b>付録 C. Essbase とライフサイクル管理</b> .....	93
Essbase アーチファクトについて .....	93
Essbase の役割の要件 .....	93
Essbase の移行の前提条件 .....	94
Essbase のアーチファクト・リスト .....	94
アーチファクト・リストについて .....	95
Essbase Server アーチファクト .....	95
Essbase アプリケーション・アーチファクト .....	96
Essbase データベース・アーチファクト .....	96
移行に関する考慮事項 .....	98
Essbase アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関係 .....	99
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	99
移行のエクスポート・オプション .....	99
移行のインポート・オプション .....	99
サンプルの移行定義ファイル .....	100
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	102
<b>付録 D. Reporting and Analysis とライフサイクル管理</b> .....	103
Reporting and Analysis のアーチファクトについて .....	103
Reporting and Analysis の役割の要件 .....	103
Reporting and Analysis の移行の必要条件 .....	104
宛先アプリケーションにおける Production Reporting ジョブ・サービス・プロパティの構成 .....	105
宛先アプリケーションでの Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのデータ・ソースの作成 .....	105
宛先アプリケーションでの Financial Reporting データ・ソースの作成 ...	105
Financial Reporting プロパティ・ファイルの Shared Services コンピュータへのコピー(ライフサイクル管理ユーティリティ 9.3.x の場合) .....	106
Reporting and Analysis のアーチファクト・リスト .....	106
アーチファクト・リストについて .....	107
物理リソースのアーチファクト .....	107
セキュリティのアーチファクト .....	108
スケジュール・オブジェクトのアーチファクト .....	108
製品プリファレンスのアーチファクト .....	109
リポジトリ・オブジェクトのアーチファクト .....	109
管理オプションのアーチファクト .....	112
ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis アーチファクトの編集 .....	113
Reporting and Analysis のアーチファクト・タイプ .....	114
Reporting and Analysis アプリケーションの移行および製品間のアーチファクトの依存関係 .....	115

移行におけるエクスポートとインポートのオプション	115
移行のエクスポート・オプション	115
移行のインポート・オプション	115
移行後のタスク	116
サンプルの移行定義ファイル	116
トラブルシューティング	118
ライフサイクル管理のログ・ファイル	119
一般的な問題と解決	119
<b>付録 E. Financial Management とライフサイクル管理</b>	<b>121</b>
Financial Management アーチファクトについて	121
Financial Management の役割の要件	121
Financial Management 移行の前提条件	122
Financial Management クラシック・アプリケーションの移行	122
Financial Management Performance Management Architect のアプリケーションの移行	123
Financial Management のアーチファクト・リスト	123
アーチファクト・リストについて	124
セキュリティのアーチファクト	124
次元アーチファクト	124
フェーズ送信アーチファクト	126
ルールのアーチファクト	127
ドキュメント・アーチファクト	127
フォーム・アーチファクト	128
会社間アーチファクト	128
仕訳アーチファクト	129
メンバー・リストのアーチファクト	130
Financial Management の移行に関する考慮事項	130
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	131
移行のエクスポート・オプション	131
移行のインポート・オプション	131
サンプルの移行定義ファイル	131
トラブルシューティング	133
HFMLCService Web サービスの接続と構成の設定	134
ライフサイクル管理サーバー通信のタイムアウト設定	134
アーチファクト数の設定	135
Financial Management と Shared Services のログイン	135
Financial Management アーチファクトを移行できない	136
Financial Management アーチファクトを Shared Services Console で表示できない	137

<b>付録 F. Planning とライフサイクル管理</b> .....	139
Planning アーチファクトについて .....	139
Planning の役割の要件 .....	139
Planning の移行の前提条件 .....	140
Planning のアーチファクト・リスト .....	141
アーチファクト・リストについて .....	141
構成アーチファクト .....	142
リレーショナル・データのアーチファクト .....	143
グローバル・アーチファクト .....	144
プランのタイプのアーチファクト .....	148
セキュリティのアーチファクト .....	150
移行に関する考慮事項 .....	150
ベスト・プラクティス .....	151
Planning アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関係 .....	152
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	153
サンプルの移行定義ファイル .....	153
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	157
<b>付録 G. Performance Management Architect とライフサイクル管理</b> .....	159
Performance Management Architect のアーチファクトについて .....	159
Performance Management Architect の役割の要件 .....	159
Performance Management Architect の移行の必要条件 .....	160
Performance Management Architect のアーチファクト・リスト .....	160
アーチファクト・リストについて .....	160
アプリケーション・メタデータのアーチファクト .....	161
共有次元のアーチファクト .....	166
次元アクセスのアーチファクト .....	167
データ同期のアーチファクト .....	167
Performance Management Architect の移行に関する考慮事項 .....	168
Performance Management Architect アプリケーションの移行および製品間のアーチファクトの依存関係 .....	169
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	170
移行のエクスポート・オプション .....	170
移行のインポート・オプション .....	170
サンプルの移行定義ファイル .....	173
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	179
<b>付録 H. Calculation Manager とライフサイクル管理</b> .....	181
Calculation Manager のアーチファクトについて .....	181
Calculation Manager の役割の要件 .....	181



Calculation Manager の移行の必要条件	181
Calculation Manager のアーチファクト・リスト	182
アーチファクト・リストについて	182
ルール of アーチファクト	183
ルール・セット of アーチファクト	183
テンプレートのアーチファクト	183
Calculation Manager アプリケーションの移行および製品間のアーチファクトの依存関係	184
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	184
移行のエクスポート・オプション	184
移行のインポート・オプション	184
サンプルの移行定義ファイル	185
ライフサイクル管理のログ・ファイル	187
<b>付録 I. Performance Scorecard とライフサイクル管理</b>	<b>189</b>
Performance Scorecard のアーチファクトについて	189
Performance Scorecard の役割の要件	189
Performance Scorecard の移行の前提条件	190
Performance Scorecard のアーチファクト・リスト	190
アーチファクト・リストについて	190
管理オプション of アーチファクト	191
オブジェクト of アーチファクト	191
Performance Scorecard アプリケーションの移行と製品間のアーチファクトの依存関係	192
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	192
移行のエクスポート・オプション	192
移行のインポート・オプション	192
サンプルの移行定義ファイル	193
ライフサイクル管理のログ・ファイル	194
<b>付録 J. Profitability and Cost Management とライフサイクル管理</b>	<b>195</b>
Profitability and Cost Management アーチファクトについて	195
Profitability and Cost Management の役割の要件	195
Profitability and Cost Management の移行の要件	196
Profitability and Cost Management アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関係	196
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	197
移行のエクスポート・オプション	197
移行のインポート・オプション	197
サンプルの移行定義ファイル	197
ライフサイクル管理のログ・ファイル	199

用語集 .....	201
索引 .....	229

# 1

## ライフサイクル管理について

### この章の内容

ライフサイクル管理と移行.....	11
ライフサイクル管理をサポートする EPM System 製品とコンポーネント.....	13
移行のシナリオ.....	14
ライフサイクル管理の用途.....	16

## ライフサイクル管理と移行

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理では、製品環境およびオペレーティング・システム間で、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 製品のアプリケーション、リポジトリまたは個別のアーチファクトを移行するための一貫性のある方法を提供します。

**注：** 移行はアップグレードとは異なります。アップグレードでは、以前のソフトウェア・リリースを現在のリリースに置換するか、製品を他の製品に置換します。移行では、アプリケーション・インスタンスのすべてまたは一部を、ある稼働環境から他の稼働環境にコピーします。たとえば、開発環境からテスト環境、またはテスト環境から本番環境にアプリケーションをコピーする場合があります。

アーチファクトは、個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテムです。たとえば、スクリプト、Web およびデータ・フォーム、ルール・ファイル、ドキュメント、財務レポートなどです。アプリケーションおよびリポジトリのアーチファクトは、製品ごとのカテゴリ別に整理されます。

ライフサイクル管理のインターフェースは、Oracle Hyperion(R) Shared Services Console と統合されています。

通常、ライフサイクル管理のインターフェースは、ライフサイクル管理をサポートしているすべての EPM System 製品と一貫しています。ただし、EPM System 製品では、ライフサイクル管理のインターフェースに、様々なアーチファクト・リストとエクスポートおよびインポート・オプションが表示されます。製品別のアーチファクト・リストとエクスポートおよびインポートのオプションについては、このガイドの巻末付録を参照してください。

ここには次のトピックがあります。

- [12 ページの「ライフサイクル管理の機能」](#)
- [12 ページの「ライフサイクル管理のコンポーネント」](#)

## ライフサイクル管理の機能

ライフサイクル管理では次の機能が提供されます:

- アプリケーションおよびディレクトリの表示
- アーチファクトの検索
- アプリケーションから他のアプリケーションへの直接的な移行
- ファイル・システムからファイル・システムへの移行
- 移行定義ファイルの保存とロード
- 選択済アーチファクトの表示
- 移行の監査
- 移行のステータスの表示
- ファイル・システム上でアーチファクトを個別にインポートまたはエクスポートすることによる迅速な変更

## ライフサイクル管理のコンポーネント

ライフサイクル管理は次のコンポーネントで構成されています:

- LCM 管理者の役割: ライフサイクル管理タスクを実行する Oracle Hyperion(R) Shared Services のユーザー役割です。LCM 管理者は、ライフサイクル管理を使用して Foundation アプリケーション・グループ内の Shared Services のアーチファクトを表示したり、製品環境およびオペレーティング・システム内のアプリケーション、リポジトリまたは個別のアーチファクトを移行したりできます。この役割をプロビジョニングされたユーザーは、アーチファクトを同じ Shared Services インスタンスで登録されている EPM System 製品に展開しロードできます。

**注:** EPM System 製品の中には、ライフサイクル管理タスクを実行するのに、LCM 管理者の役割のほかに追加の製品の役割をプロビジョニングされたライフサイクル管理ユーザーを必要とするものがあります。追加の役割については、このガイドの巻末付録を参照してください。

- 移行定義ファイル: 移行に関するすべての情報(ソース、宛先、移行するアーチファクト、エクスポートおよびインポートのオプション)が含まれています。ユーザーは移行定義を、移行ウィザードを使用して自動作成したり、付属のサンプル・ファイルを使用して手動作成したりできます。移行定義ファイルは、Shared Services Console またはライフサイクル管理ユーティリティのいずれかで移行を実行する場合に使用できます。
- Shared Services Console: ユーザーがプロビジョニングやライフサイクル管理などの管理タスクを実行できるようにする Shared Services のユーザー・インタフェースです。
- 移行ウィザード: 移行定義の作成、実行および保存を支援する Shared Services Console の機能の一部です。
- ライフサイクル管理ユーティリティ: アーチファクトをソースから宛先に移行する代替手段を提供するコマンドライン・ユーティリティ。ライフサイクル

管理ユーティリティは、Windows タスク スケジューラや Oracle Enterprise Manager などのサードパーティのスケジューリング・サービスで使用できません。

- 移行プロパティ・ファイル: 移行に関するグローバル・パラメータが含まれています。たとえば、ファイル・システムやログ・ファイルの場所、バッチ処理による移行のサイズのグループ化、概算レポートの使用可能/使用不可などです。
- 移行ステータス・レポート: 移行ステータスおよび移行の日時を示します。
- ライフサイクル管理のログ・ファイル: ライフサイクル管理による移行におけるすべてのアクティビティを取得します。
- ライフサイクル管理のアプリケーション・プログラミング・インタフェース (API): ユーザーがライフサイクル管理の移行定義ファイルを実行できるようにします。

## ライフサイクル管理をサポートする EPM System 製品とコンポーネント

次の EPM System 製品およびコンポーネントがライフサイクル管理をサポートしています:

- Shared Services
- Oracle Essbase
- Oracle Hyperion Reporting and Analysis (Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition、Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting、Oracle Hyperion(R) SQR(R) Production Reporting、Oracle Hyperion(R) Web Analysis)
- Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition
- Oracle Hyperion Planning, Fusion Edition
- Oracle Hyperion EPM Architect, Fusion Edition
- Hyperion Calculation Manager
- Oracle Hyperion Performance Scorecard, Fusion Edition
- Oracle Hyperion Profitability and Cost Management, Fusion Edition

表 1 EPM System の製品コード

製品コード	製品名
HUB	Shared Services
HREG	Oracle Hyperion Shared Services レジストリ
ESBAPP	Essbase
HAVA	Reporting and Analysis (Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting、Web Analysis)
HFM	Financial Management

製品コード	製品名
HP	Planning
BPMA	Performance Management Architect および Calculation Manager
HPS	Performance Scorecard
HPM	Profitability and Cost Management

このガイドの巻末付録には、製品ごとの情報が記載されています。

## 移行のシナリオ

1つのアプリケーションから他のアプリケーション、またはファイル・システム同士でアーチファクトを直接移行できます。

**注：** 一部の EPM System 製品では、ライフサイクル管理を使用したアプリケーション間の直接移行をサポートしていません。このガイドの終わりにある付録を参照してください。

Shared Services Console またはライフサイクル管理ユーティリティを使用してアプリケーション・アーチファクトを移行できます。

ここには次のトピックがあります。

- [14 ページの「ファイル・システムからファイル・システムへの移行」](#)
- [15 ページの「アプリケーションからアプリケーションへの直接的な移行」](#)

## ファイル・システムからファイル・システムへの移行

このシナリオは、Shared Services Web アプリケーション・サーバー・コンピュータ上のファイル・システムの任意の場所から別の場所にアーチファクトを移行する場合に使用します。デフォルトのファイル・システムの場所は、HYPERION\_HOME/common/import\_export/username@ProviderName/です。

**注：** ライフサイクル管理ユーティリティには、サーバーではなくローカルのファイル・システムの場所にアーチファクトを移行するオプションもあります。[67 ページの「\[-local\]: ローカル・ファイル・システム場所に移行する」](#)を参照してください。

最終的なアプリケーションの場所がソース・アプリケーションと同じネットワークにない場合、ファイル・システムにコピーされるアーチファクトは、ファイル転送プロトコル(FTP)、DVD または他の転送メソッドを使用して、孤立した宛先システムに移動する必要があります。

**注：** 転送のシナリオでは、ファイルは、ファイル・システムから移行を実行する予定のユーザーの、宛先ファイル・システム上のユーザー・ディレクトリにコピーするようにしてください。別のユーザーのディレクトリにコピーすると、移行を実行するユーザーが Shared Services Console の「ファイル・システム」アプリケーション・グループにファイルを表示できなくなります。

このシナリオにおけるプロセスのフロー:

1. LCM 管理者の役割を持つユーザーがソースを指定し、Shared Services Console またはライフサイクル管理ユーティリティで「ファイル・システム」宛先オプションを選択します。
2. **オプション:** ユーザーが移行定義を XML ファイルに保存すると、後で移行するときに使用できます。
3. 移行が実行されると、アーチファクトがファイル・システムの場所に保存されます。
4. **オプション:** ユーザーはファイル・システム上のアーチファクトに変更を加えることができます。
5. **オプション:** ユーザーは DVD、FTP またはその他の転送メソッドを使用して、アーチファクトをファイル・システムの任意の場所から別の場所に転送できます。
6. 宛先サーバーで、LCM 管理者は Shared Services Console またはライフサイクル管理ユーティリティを使用して、「ファイル・システム」をソースとして指定し、「アプリケーション」を宛先オプションに指定します。
7. **オプション:** ユーザーが移行定義を XML ファイルに保存すると、後で移行するときに使用できます。
8. アーチファクトがファイル・システムから宛先アプリケーションにインポートされます。

## アプリケーションからアプリケーションへの直接的な移行

このシナリオは、ソース・アプリケーションと宛先アプリケーションが Shared Services の同じインスタンスで登録されている場合に使用します。

**注：** ソース・アプリケーションと宛先アプリケーションは同じ名前にする必要があります。

このシナリオにおけるプロセスのフロー:

1. LCM 管理者の役割を持つユーザーがソースを定義し、「アプリケーション」オプションを Shared Services Console またはライフサイクル管理ユーティリティで指定します。
2. **オプション:** ユーザーが移行定義を XML ファイルに保存すると、後で移行するときに使用できます。

3. 移行が実行されると、アーチファクトがソース・アプリケーションまたはソース・サーバーから宛先アプリケーションまたは宛先サーバーにコピーされます。

## ライフサイクル管理の用途

ライフサイクル管理は次の用途に適しています:

- 製品間でアーチファクトの依存関係があるアプリケーションの移行
- セキュリティの移行
- タスクフローの移行
- セキュア・ソケット・レイヤー(SSL)接続を使用可能または使用不可にするため、および他の構成変更を手動で行うための Shared Services レジストリ・データの編集
- バックアップとリカバリ

**注:** ライフサイクル管理は、論理的なバックアップとリカバリのソリューションとしてのみ使用できます。データのバックアップとリカバリのソリューションとしては推奨されません。多くの製品では、独自のバックアップとリカバリのソリューションが提供されています。これらのソリューションについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』に記載されています。

- バルク・セキュリティの更新
- 編集目的でのアーチファクトのインポートとエクスポート
- アーチファクトの単独編集
- ライフサイクル管理ユーティリティを使用したバージョン・コントロール・システムへのエクスポート



# 2

## ライフサイクル管理の開始

### この章の内容

ライフサイクル管理のクイック・スタート .....	17
ライフサイクル管理の要件.....	18
ライフサイクル管理のインストール.....	20
セキュリティ.....	20
複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート .....	20

## ライフサイクル管理のクイック・スタート

ライフサイクル管理の移行は、この高度なプロセスに従います。各部分のプロセスの説明は、次の表で説明されているガイドまたは項で説明されています。

**注意** ライフサイクル管理のインポートを実行する前に、宛先環境をバックアップしておくことをお勧めします。ライフサイクル管理を使用したエクスポートおよびインポートでは、元に戻せません。

表 2 ライフサイクル管理のプロセス

タスク	追加情報
1. Shared Services および EPM System 製品をインストールして構成します。	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』
2. LCM 管理者の役割をライフサイクル管理のユーザーに割り当てます。 <b>注：</b> Essbase、Reporting and Analysis、Financial Management、Planning、Performance Scorecard および Profitability and Cost Management では、ライフサイクル管理のタスクを実行するために、ライフサイクル管理のユーザーを別の製品の役割にプロビジョニングする必要があります。その他の役割については、このガイドの巻末付録を参照してください。	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』
3. 次の Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーチファクトを移行します。 <ul style="list-style-type: none"><li>● 役割</li><li>● グループ</li><li>● 委任リスト</li><li>● ユーザー</li></ul>	44 ページの「ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行」

タスク	追加情報
● 割り当てられた役割(移行するアプリケーションに対してのみ)	
4. 移行するアプリケーションのすべてのタスク・フロー・アーチファクトを移行します。	付録 B 「Shared Services とライフサイクル管理」
5. 製品固有の移行の前提条件を完了します(たとえば、Financial Management または Planning クラシック・アプリケーションの場合は、宛先環境にシェル・アプリケーションを作成するなど)。	このガイドの巻末にある付録の各製品の「移行の前提条件」を参照してください。
6. 宛先環境をバックアップします。	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』
7. Shared Services Console またはライフサイクル管理ユーティリティで、製品固有のアーチファクトとその依存アーチファクトを選択します。	このガイドの巻末にある付録の各製品のアーチファクト・リストを参照してください。
8. 移行のシナリオを選択します(たとえば、ファイル・システムへの移行やファイル・システムからの移行など)。	14 ページの「移行のシナリオ」
9. 移行の定義を続行します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Shared Services Console の場合は、<a href="#">第 5 章「ライフサイクル管理および Shared Services Console での作業」</a>を参照してください。</li> <li>● ライフサイクル管理ユーティリティの場合は、<a href="#">第 6 章「ライフサイクル管理ユーティリティの使用法」</a>を参照してください。</li> </ul>
10. 今後使用するために、移行定義ファイルを保存します。	41 ページの「移行定義の保存」
11. 移行を実行します。	41 ページの「移行定義の編集または実行」
12. 移行ステータス・レポートを表示して、すべて正常に移行されたことを確認します。	48 ページの「移行ステータスの表示」

## ライフサイクル管理の要件

- Shared Services および EPM System 製品をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理を操作するユーザーに、LCM 管理者役割が割り当てられていることを確認してください。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- 必要に応じて他の製品固有の役割を割り当てます。このガイドの終わりにある付録を参照してください。

- 各自の要件に最適な移行のシナリオを判別します。14 ページの「移行のシナリオ」を参照してください。
- ソースと宛先のアプリケーションは、Shared Services の 1 つのインスタンスに登録する必要があります。

**注：** EPM System では別々の Shared Services インスタンスで分けられた環境でのアプリケーションのライフサイクル管理をサポートしています。

- エクスポート中は Shared Services のソース・アプリケーションが実行している必要があります。インポート中は Shared Services の宛先アプリケーションが実行している必要があります。
- アプリケーション間の移行では、ソース・アプリケーションと宛先アプリケーションは同じ名前にする必要があります。
- ファイル・システムから、またはファイル・システムに移行する場合、ファイル・システムは Shared Services Console またはライフサイクル管理ユーティリティからアクセスできる必要があります。
- ファイル・システムの移行のデフォルトの宛先が Shared Services Web アプリケーション・サーバー・コンピュータにある場合は、Shared Services コンピュータ上に領域が確保されていることを確認してください。

**注：** Shared Services コンピュータのデフォルトのファイル・システムの宛先は、HYPERION\_HOME/common/import\_export/username@ProviderName/です。ファイル・システムの場所は、Shared Services アプリケーション・サーバー・ディレクトリにある migration.properties に定義されています。これは共有ディスクを使用するためにもカスタマイズできます。51 ページの「Shared Services Console の移行プロパティ・ファイル」を参照してください。

- 一部の製品では宛先の場所にシェル・アプリケーションをあらかじめ作成しておく必要があります。
- 移行を実行する際、ソース・アーチファクトのタイムスタンプが宛先アーチファクトのタイムスタンプより古い場合、アーチファクトは移行されません。このような条件でアーチファクトを移行するには、ソース・アーチファクトを更新して宛先のアーチファクトより新しいタイムスタンプが設定されるようにする必要があります。こうすることで、アーチファクトは移行されます。
- 移行を実行するには、アプリケーションがアプリケーション・グループに割り当てられているか、デフォルト・アプリケーション・グループに属している必要があります。同じ名前の 2 つのアプリケーションが存在する場合は、デフォルト・アプリケーション・グループに属するアプリケーションを移行できません。

**注：** 名前が同じアプリケーションを複数保持できるのは、デフォルト・アプリケーション・グループのみです。ただし、別のアプリケーション・グループに割り当てられないかぎり、アーチファクトの移行は行われません。

- ソースと宛先では同じユーザー・ディレクトリを使用する必要があります。

# ライフサイクル管理のインストール

ライフサイクル管理は Shared Services と一緒にインストールされます。Shared Services をインストールしてアプリケーション・サーバーに配置する方法については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

ライフサイクル管理のコンポーネントは、HYPERION\_HOME/common/utilities/LCM/9.5.0.0 (LCM\_HOME として参照)にインストールされます。

## セキュリティ

ライフサイクル管理を使用するには、プロビジョニングを介して、ユーザーおよびグループに対し、セキュリティを設定する必要があります。ライフサイクル管理を実行するユーザーには LCM 管理者の役割を割り当てる必要があります。LCM 管理者は Shared Services に登録されたすべてのアプリケーションに対し、移行を実行できます。つまり LCM 管理者は同じ Shared Services インスタンスを使用して、すべてのアプリケーションを抽出およびロードできます。

**注：** Essbase、Reporting and Analysis、Financial Management、Planning、Performance Scorecard および Profitability and Cost Management では、ライフサイクル管理ユーザーがライフサイクル管理タスクを実行するためには(LCM 管理者役割に加え)追加の製品の役割をプロビジョニングする必要があります。追加の役割については、このガイドの付録を参照してください。

LCM 管理者役割の割当てについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## 複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート

ライフサイクル管理を使用して複数の EPM System 製品からアーチファクトをインポートする場合、インポートが成功するように、特定の順序でインポートすることをお勧めします。

**注：** 複数の製品からアーチファクトをエクスポートする場合、順序は重要ではありません。順序が重要なのはインポートの場合のみです。

アーチファクトをインポートする場合は、次の順序に従ってください：

1. Performance Management Architect
2. Shared Services
3. Reporting and Analysis
4. Essbase

5. Planning
6. Financial Management
7. Performance Scorecard
8. Profitability and Cost Management

**注：** Calculation Manager アーチファクトは Performance Management Architect の一部としてインポートされます。



# 3

## Shared Services Console

### この章の内容

ライフサイクル管理および Shared Services Console の統合 .....	23
Shared Services Console の起動 .....	23
Shared Services Console の概要 .....	24
Shared Services Console でのナビゲート .....	25

## ライフサイクル管理および Shared Services Console の統合

ライフサイクル管理は Shared Services Console と統合され、アプリケーション・グループとアプリケーションの下にアーチファクトがリストされています。たとえば、Shared Services Console には Development というアプリケーション・グループが表示されます。Development アプリケーション・グループの下には、HFM Management Reporting アプリケーションが表示されます。HFM Management Reporting アプリケーションの下には、次元モデルまたは非次元モデルが表示されます(Accounts、Entities、Security、Member Lists など)。

この統合では、管理者は Shared Services Console フレームワーク内で、次のライフサイクル管理タスクを実行できます:

- アーチファクトの表示
- アーチファクトの検索
- 1つの環境から別の環境に、アプリケーション/リポジトリの一部または全体を移行します
- 選択済アーチファクトのみを表示
- ファイル・システム上で簡単な変更を行うために、個別アーチファクトをインポートおよびエクスポートします
- 移行の定義ファイルをファイル・システムに保存します
- 移行ステータス・レポートの表示

## Shared Services Console の起動

Shared Services Console を起動するには、次の手順に従います:

- ブラウザを使用して、Shared Services Console にアクセスします。

- Windows ではスタートを選択し、すべてのプログラム、Oracle EPM System、Foundation Services の順に選択し、Shared Services Console を選択します。
- EPM System の製品インタフェースの使用

▶ URL から Shared Services Console を起動するには、次の手順に従います:

**1 ブラウザを使用して、次の URL にアクセスします:**

`http://server_name:port_number/interop`

この URL で、server\_name は Shared Services をホストするアプリケーション・サーバーが実行されているコンピュータの完全修飾名を示し、port\_number は Shared Services が使用するサーバー・ポートを示します。たとえば、`http://user.myserver.example.com:7777/interop` のようになります。

**注:** ポップアップ・ブロックが原因で Shared Services Console が開かない場合があります。

**2 ログオン画面でユーザー名とパスワードを入力してください。**

最初は、Shared Services Console へアクセスできる唯一のユーザーは admin (admin のデフォルト・パスワードは password) です。

**3 ログオンをクリックします。**

**注:** 有効な SAP ユーザーがログオン中に、SAP アカウントがロックされると、CSSAuthenticationException エラー・メッセージが表示される場合があります。SAP 管理者に問い合わせ、アカウントのロック解除を依頼してください。

Microsoft Internet Explorer の使用中に Shared Services Console で Java 仮想マシン (JVM) エラーが表示される場合は、Internet Explorer のインストール済環境で、Microsoft XML パーサー (MSXML) バージョン 4 が含まれていることを確認してください。MSXML は Internet Explorer 6.0 にバンドルされています。

MSXML のバージョンが正しいことを確認するには、次のファイルが存在するかどうかを調べます。

`c:\winnt\system32\msxml4.dll`

このファイルがない場合は、Internet Explorer 6.0 以降をインストールしてください。

## Shared Services Console の概要

Shared Services Console は、ビュー・ペインとタスク・タブで構成されています。初めにログインすると、Shared Services Console にはビュー・ペインと「参照」タブが表示されます。

ビュー・ペインは、ユーザー・ディレクトリ、ユーザー、グループ、役割、アプリケーション・グループおよびアプリケーションなどのオブジェクトを選択でき



るナビゲーション・フレームです。通常は、ビュー・ペインで現在選択されている項目の詳細が「参照」タブに表示されます。その他のタスク・タブは、実行するタスクの必要に応じて開きます。たとえば、「レポート」タブはレポートを生成するとき、「構成」タブはユーザー・ディレクトリを構成するときに開きます。

現在の構成に応じて、Shared Services Console のビュー・ペインには既存のオブジェクトが一覧表示されます。これらのオブジェクトを展開すると、詳細を表示できます。たとえば、「ユーザー・ディレクトリ」オブジェクトを展開すると、構成済のすべてのユーザー・ディレクトリが一覧表示されます。構成済のユーザー・ディレクトリでユーザーとグループを検索することもできます。

オブジェクトを右クリックすると表示されるショートカット・メニューは、ビュー・ペイン上のオブジェクトに関連付けられています。

**注：** [Oracle Technology Network](#) では、現在のリリースの最新の製品ドキュメントを提供しています。

## Shared Services Console でのナビゲート

ビュー・ペイン内のオブジェクトでアクションを実行するときは、オブジェクトを右クリックすることでショートカット・メニューにアクセスできます。これらのメニューのオプションは、何を選択したかによって動的に変化します。ショートカット・メニューに表示されたコマンドは、メニュー・バー内のメニューでも使用可能です。使用可能なメニュー・オプションを表すボタンがツールバーに表示されます。

**注：** ネイティブ・ディレクトリは Shared Services Console から管理されるため、ネイティブ・ディレクトリのショートカット・メニューで使用可能なメニュー・オプションの中には、他のユーザー・ディレクトリには使用できないものがあります。



# 4

## アプリケーション・グループ およびアプリケーションでの 作業

### この章の内容

概要 .....	27
アプリケーション・グループの使用 .....	27
アプリケーションの管理 .....	29

### 概要

アプリケーション・グループおよびアプリケーションの2つは、Shared Services の重要な概念です。アプリケーションは、Shared Services に登録されている EPM System 製品の1つのインスタンスへの参照です。登録のプロセスにより、Shared Services は EPM System アプリケーションが存在することを認識します。すべてのプロビジョニングおよびライフサイクル管理のアクティビティは、アプリケーション・グループに属するアプリケーションに対して実行されます。

この章には、アプリケーション・グループとアプリケーションの作成と管理に関する情報が記載されています。

### アプリケーション・グループの使用

アプリケーション・グループは EPM System アプリケーションのコンテナです。たとえば、アプリケーション・グループには、Planning アプリケーションと1つ以上の Reporting and Analysis アプリケーションが含まれるとします。アプリケーションが属することのできるアプリケーション・グループの数は1つですが、アプリケーション・グループには複数のアプリケーションを含められます。

Shared Services で登録されたアプリケーションで、アプリケーション・グループにまだ属していないものは、ビュー・ペインのデフォルト・アプリケーション・グループ・ノードの下に表示されます。アプリケーション・グループに割り当てられているアプリケーションは Shared Services Console のアプリケーション・グループ・ノードの下にリストされます。

アプリケーション・グループの管理タスクを詳しく解説するトピック:

- [28 ページの「アプリケーション・グループの作成」](#)
- [28 ページの「アプリケーション・グループ・プロパティの変更」](#)
- [29 ページの「アプリケーション・グループの削除」](#)

**注：** アプリケーション・グループを作成したり管理したりするには、Shared Services の管理者またはマネージャである必要があります。Shared Services の管理者はすべての登録済アプリケーションを使用できますが、プロジェクト・マネージャは担当するアプリケーションでのみ作業できます。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## アプリケーション・グループの作成

アプリケーション・グループの作成中、新規アプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てることもできます。

- ▶ アプリケーション・グループを作成するには、次の手順に従います：
  - 1 **Shared Services Console** を起動します。23 ページの「**Shared Services Console の起動**」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインでアプリケーション・グループを右クリックし、新規を選択します。新規アプリケーション・グループ画面が表示されます。
  - 3 名前テキスト・ボックスでアプリケーション・グループ名を入力し、説明テキスト・ボックスにはオプションの説明を入力します。
  - 4 このアプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てるには、次の手順に従います：
    1. アプリケーション・グループのアプリケーションのリストで Default Application Group か、アプリケーション・グループに割り当てようとしているアプリケーションが含まれるアプリケーション・グループを選択します。
    2. リストの更新をクリックします。使用可能なアプリケーションリストにアプリケーション・グループに割り当てることのできるアプリケーションが表示されます。
    3. 使用可能なアプリケーションでアプリケーション・グループに割り当てるアプリケーションを選択し、追加をクリックします。  
選択したアプリケーションは選択したアプリケーションリストに表示されます。
    4. 割り当てられたアプリケーションを除去するには、割り当てられたアプリケーションから除去するアプリケーションを選択し削除をクリックします。現在のセッションで割り当てたアプリケーションをすべて除去するには、リセットをクリックします。
  - 5 終了をクリックします。
  - 6 追加作成をクリックし、別のアプリケーション・グループを作成するか、OK をクリックしてステータス画面を閉じます。

## アプリケーション・グループ・プロパティの変更

プロパティおよびアプリケーションの割当てなどアプリケーション・グループの設定はすべて変更できます。

**注：** また、別のアプリケーション・グループからアプリケーションを移動することで、アプリケーション・グループにアプリケーションを追加することもできます。30 ページの「アプリケーションの移動」を参照してください。

- ▶ アプリケーション・グループを変更するには、次の手順に従います：
- 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインでアプリケーション・グループを選択します。
  - 3 参照タブでアプリケーション・グループを右クリックし、開くを選択します。
  - 4 必要に応じてアプリケーション・グループ・プロパティを変更します。アプリケーションの割当てと除去の詳細は、28 ページの手順 4 を参照してください。
  - 5 保存をクリックします。

## アプリケーション・グループの削除

アプリケーション・グループを除去することにより、アプリケーション・グループに属すアプリケーションの関連付けを除去したり、アプリケーションからプロビジョニングの割当てや、アプリケーションを削除したりできます。次のアプリケーション・グループは削除できません。

- デフォルト・アプリケーション・グループ
- Foundation
- File System

- ▶ アプリケーション・グループを削除するには、次の手順に従います：
- 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインでアプリケーション・グループを右クリックし、削除を選択します。
  - 3 OK をクリックします。

## アプリケーションの管理

Shared Services Console は登録されている EPM System アプリケーションを追跡しません。登録は Shared Services ではなく、個別の EPM System アプリケーションで実行されます。

一部のアプリケーションを登録することで、アプリケーション・グループが作成され、アプリケーションが割り当てられます。登録によりアプリケーション・グループが作成されない場合は、登録されたアプリケーションが Shared Services Console のビュー・ペインにあるデフォルト・アプリケーション・グループ・ノードの下にリストされます。これらのアプリケーションをプロビジョニングできます。デフォルト・アプリケーション・グループから別のアプリケーション・グループにアプリケーションを移動すると、Shared Services にプロビジョニング情報が保

存されます。アプリケーションがアプリケーション・グループに割り当てられていなくても、アプリケーションをデフォルト・アプリケーション・グループに移行できます。

**注：** 名前が同じアプリケーションを複数保持できるのは、デフォルト・アプリケーション・グループのみです。ただし、別のアプリケーション・グループに割り当てられないかぎり、アーチファクトの移行は行われません。

アプリケーション管理タスクについてのトピック

- [30 ページの「アプリケーションの移動」](#)
- [30 ページの「複数のアプリケーションの削除」](#)
- [31 ページの「アプリケーションの削除」](#)

## アプリケーションの移動

アプリケーション・グループからアプリケーションを移動すると、アプリケーションとアプリケーション・グループとの関連付けが除去されます。

**注：** Foundation アプリケーション・グループのアプリケーションは移動できません。

▶ アプリケーションを移動するには、次の手順に従います：

- 1 **Shared Services Console** を起動します。[23 ページの「Shared Services Console の起動」](#) を参照してください。
- 2 アプリケーション・グループでアプリケーションを右クリックし、移動先を選択します。
- 3 移動先タブでアプリケーションの宛先アプリケーション・グループを選択します。
- 4 保存をクリックします。

## 複数のアプリケーションの削除

Shared Services の管理者がアプリケーションを削除すると、プロビジョニング情報も削除されます。

▶ アプリケーションを削除するには、次の手順に従います：

- 1 **Shared Services Console** を起動します。[23 ページの「Shared Services Console の起動」](#) を参照してください。
- 2 ビュー・ペインで、アプリケーション・グループを右クリックし、削除を選択します。

「アプリケーションの削除」画面が開き、削除可能なアプリケーションが一覧表示されます。

- 3 削除するアプリケーションを選択します。アプリケーション・グループ内のすべてのアプリケーションを削除するには、そのアプリケーション・グループを選択します。

**注：** この画面でアプリケーション・グループを削除できません。29 ページの「[アプリケーション・グループの削除](#)」を参照してください。

- 4 削除をクリックします。
- 5 確認のダイアログ・ボックスで OK をクリックします。

## アプリケーションの削除

Shared Services の管理者はアプリケーション・グループからアプリケーションを削除できます。アプリケーション・グループからアプリケーションを削除する場合、そのアプリケーションのプロビジョニング情報はすべて除去されます。

- ▶ アプリケーションを削除するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインでアプリケーションを右クリックし、削除を選択します。
  - 3 OK をクリックします。





# 5

## ライフサイクル管理および Shared Services Consoleでの作 業

### この章の内容

ライフサイクル管理の移行プロセス.....	33
Shared Services Console の要件 .....	33
アーチファクトの表示.....	34
アーチファクトの検索.....	35
アーチファクトの移行.....	36
移行定義の保存 .....	41
移行定義の編集または実行.....	41
編集する個々のアーチファクトのエクスポートとインポート .....	42
ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行.....	44
Shared Services レジストリ・データの編集.....	45
ライフサイクル管理のレポート .....	48
Shared Services Console の移行プロパティ・ファイル.....	51

## ライフサイクル管理の移行プロセス

移行を行うには、次の手順に従います:

1. 宛先環境をバックアップします。
2. Shared Services Console を起動します。
3. 移行するソース・アーチファクトを表示して選択します。
4. 移行ウィザードを起動して移行を定義するか、保存した移行を選択します。
  - ソース・オプションを定義します。
  - 宛先と宛先のオプションを定義します。
5. 移行定義ファイルを保存します。
6. 移行を実行します。
7. 移行ステータス・レポートを起動して表示します。

## Shared Services Console の要件

18 ページの「ライフサイクル管理の要件」を参照してください。

## アーチファクトの表示

Shared Services Console のライフサイクル管理インタフェースにより、アーチファクトの表示、検索、移行、ロード、エクスポートおよびインポートが可能です。アーチファクトは各種カテゴリにソートされているため、整然と表示されます。

表形式のライフサイクル管理インタフェースにより、複数のアプリケーションを表示できます。

**注：** アーチファクトは製品ごとに異なります。製品のアーチファクトおよびカテゴリの詳細は、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

▶ Shared Services Console でアーチファクトを表示するには、次の手順に従います：

- 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインでアプリケーション・グループノードを展開し、アプリケーション・グループを表示します。
- 3 アプリケーションを表示するために、アプリケーション・グループを展開します。

**注：** Foundation アプリケーション・グループには、Shared Services、Performance Management Architect などの Foundation アプリケーションが含まれます。ファイル・システムアプリケーション・グループはデフォルトの Shared Services ファイル・システムの場所(ファイルがロードおよび抽出される場所)を読み取ります。デフォルトの Shared Services ファイル・システムの場所を変更するには、migration.properties を編集します。51 ページの「[Shared Services Console の移行プロパティ・ファイル](#)」を参照してください。

- 4 アプリケーションをクリックして(またはアプリケーションを右クリックし、エクスプローラを選択して)、アーチファクトのリストを表示します。

アーチファクト・リストタブにはアーチファクト・リストが表示されます。

アーチファクト・リストの上に、次のビュー・オプションが表示されます。

- アーチファクト・リスト: アプリケーションとリポジトリのアーチファクトを表示

**注：** 各アプリケーション・グループに新しいタブが表示されます。移行が完了すると、タブは閉じます。

- 選択済アーチファクト: タブであらかじめ選択済のアーチファクトを表示

**注：** ライフサイクル管理インタフェースでは、アプリケーションとアプリケーション・グループ間で移動した際に選択したアーチファクトを記憶しています。この機能は複数の製品間でアプリケーションの移行を定義するときに役立ちます。

- アーチファクトの検索: 検索オプションを表示します。35 ページの「[アーチファクトの検索](#)」を参照してください。

# アーチファクトの検索

アーチファクト・リストの上にあるアーチファクトの検索オプションを使用して、アーチファクトの検索オプションを表示できます。

- ▶ Shared Services Console でアーチファクトを検索するには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 アーチファクトを表示します。34 ページの「[アーチファクトの表示](#)」を参照してください。
  - 3 アーチファクトの検索(アーチファクト・リストの上)をクリックします。
  - 4 次の検索オプションを指定します。
    - アーチファクト名-アーチファクトの名前。アスタリスク(\*)をパターン検索でワイルドカードとして使用するか、フィルタの条件に一致するアーチファクトを検索します。たとえば、A\*と指定すると、A(検索は大文字と小文字を区別しないため、小文字の a も含む)で始まるすべてのアーチファクトが戻ります。\*A ではA(または小文字の a)で終わるすべてのアーチファクトが戻ります。
    - 変更日-次のオプションから選択します。
      - 今日-今日変更されたアーチファクトが表示されます。
      - 昨日-昨日変更されたアーチファクトが表示されます。
      - 過去7日間-最近7日間に変更されたアーチファクトが表示されます。
      - 過去1か月間-最近1か月間に変更されたアーチファクトが表示されます。
      - 日付範囲-指定した日付範囲内(開始日および終了日)に変更されたアーチファクトが表示されます。指定された開始日と終了日は含みます。

**注:** 変更日をサポートしないアーチファクトは常に表示されます。変更日または時間をサポートしないアーチファクトのリストは、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

    - 開始日-日付範囲の開始の日。たとえば、01/01/2008。
    - 終了日-日付範囲の終了の日。たとえば、01/31/2008。
    - 変更者-ユーザーの名前。アスタリスク(\*)をパターン検索でワイルドカードとして使用するか、フィルタの条件に一致するアーチファクトを検索します。検索は大文字と小文字を区別しません。

**注:** 検索条件が指定されないと、アプリケーションのすべてのアーチファクトが表示されます。
  - 5 検索をクリックします。

## アーチファクトの移行

ファイル・システムへ、またはファイル・システムからの移行、あるいは1つのアプリケーションから他のアプリケーションに直接移行できます。開始する前に、要件に最適の移行シナリオを判別する必要があります。14 ページの「[移行のシナリオ](#)」を参照してください。

移行ウィザードでは、ソースと宛先が同じ Shared Services インスタンスに登録されている場合にアーチファクトを移行します。また、移行ウィザードは、ソースと宛先が異なる Shared Services インスタンスに登録されている場合、共有ファイル・システムとともにアーチファクトを移行します。

ソースと宛先が同じ Shared Services インスタンスに登録されておらず、同じネットワーク内にもない場合は、中間のファイル・システムにアーチファクトをエクスポートし、FTP、DVD、または他の転送メソッドを使用して、中間のファイル・システムを宛先システムに転送できます。

**注：** 転送のシナリオでは、ファイルは、ファイル・システムから移行を実行する予定のユーザーの、宛先ファイル・システム上のユーザー・ディレクトリにコピーするようにしてください。別のユーザーのディレクトリにコピーすると、移行を実行するユーザーが Shared Services Console の「ファイル・システム」アプリケーション・グループにファイルを表示できなくなります。

移行の定義時には複数のタスクを指定して、複数のアプリケーションを同時に移行できます。

ここには次のトピックがあります。

- [36 ページの「ファイル・システムへの移行」](#)
- [38 ページの「ファイル・システムからの移行」](#)
- [39 ページの「アプリケーションから他のアプリケーションへの直接的な移行」](#)

## ファイル・システムへの移行

ファイル・システムの場所は、Shared Services の Web アプリケーション・サーバー・コンピュータです。Shared Services コンピュータのデフォルトの宛先は `HYPERION_HOME/common/import_export/username@ProviderName/` になります。ファイル・システムの場所に移行(コピーされた)アプリケーションまたはアーチファクトは、ビュー・ペインの File System アプリケーション・グループの下に表示されます。アーチファクトがファイル・システムに移行されると、ネイティブ製品でアーチファクトが更新された最後の変更日時が保持されます。

移行のシナリオについては、14 ページの「[移行のシナリオ](#)」を参照してください。

**注：** Windows 2003 の場合、Shared Services が Windows のサービスの 1 つとして開始され、ファイル・システム・パスはマップされたドライブに定義される

ことから、Shared Services Console を使用してファイル・システムのコンテンツを表示できません。ファイル・システム・パスがネットワーク・アクセスの可能な場所である場合は、Shared Services が Windows サービスとして実行していないことを確認してください。

▶ Shared Services Console を使用してファイル・システムにアーチファクトとアプリケーションを移行するには、次の手順に従います:

- 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
- 2 アーチファクトを表示します。34 ページの「アーチファクトの表示」を参照してください。
- 3 移行するアプリケーションまたはアーチファクトを選択します。
- 4 **オプション:** 選択済アーチファクト(アーチファクト・リストの上)をクリックして、選択されたアーチファクトのリストをフィルタし、選択されたアーチファクトのみが表示されるようにします。
- 5 移行の定義をクリックして、移行ウィザードを表示します。
- 6 ソースページでは移行のソース・アプリケーションを選択して、次へをクリックします。

次のことに注意してください。

- ソースページは複数のアプリケーション(または複数のソース)からアーチファクトを選択した場合にのみ表示されます。1つの製品からのみアーチファクトを選択した場合、移行ウィザードはこのページをスキップし、ソース・オプションページに直接ジャンプします。
  - ソースページに表示されたすべてのソースは移行定義に含まれるため、各ソースの移行オプションを指定する必要があります。
  - 移行定義からソースを除外するには、ソースを選択しソースの削除をクリックします。
  - それぞれに移行オプションを指定した後、移行を同時に実行できます。移行ウィザードで移行の定義が終わると、ソースページのソースの横に緑色のチェック・マークが表示されます。
- 7 ソース・オプションページでは、ソースについての情報を入力し、次へをクリックします。

**注:** ソース・オプションは製品ごとに異なります。製品別のオプションのリストは、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

- 8 宛先ページでは、宛先の場所を表示するためにノードを展開し、File System オプションを指定して、次へをクリックします。

**注:** ファイル・システムにすでに存在するディレクトリ名を指定し、そのディレクトリが同じアプリケーションによって使用されている場合、ディレクトリ内の既存の情報は上書きされます。ディレクトリが別のアプリケーションで使用されている場合は、移行の定義を先に進めることはできません。

- 9 宛先オプションページで、宛先オプションを表示し、次へをクリックします。

**注：**宛先オプションは製品ごとに異なります。製品別のオプションのリストは、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

- 10 移行の要約ページでは、指定したソース・オプションと宛先オプションを確認します。変更するには、戻るをクリックします。
  - 11 今後実行する移行のために移行定義を保存し、移行をただちに実行できるようにします。
    - 移行定義を保存するには、41 ページの「[移行定義の保存](#)」を参照してください。
    - 移行をただちに実行するには、次の手順に従います:
      1. 移行の実行をクリックします。
      2. 移行ステータス・レポートの起動をクリックして、移行ステータスを表示するか、OK をクリックします。
- 48 ページの「[移行ステータスの表示](#)」を参照してください。

## ファイル・システムからの移行

ファイル・システムの場所は、Shared Services の Web アプリケーション・サーバー・コンピュータです。Shared Services コンピュータのデフォルトの宛先は `HYPERION_HOME/common/import_export/username@ProviderName/` になります。ファイル・システムの場所に移行(コピーされた)アプリケーションまたはアーチファクトは、ビュー・ペインの File System アプリケーション・グループの下に表示されます。アーチファクトがファイル・システムに移行されると、ネイティブ製品でアーチファクトが更新された最後の変更日時が保持されます。

**注：** ファイルをファイル・システムの場所に(移行ではなく)コピーする場合、ファイル・システムから移行を実行するユーザーの宛先ファイル・システムのユーザー・ディレクトリにファイルをコピーするようにしてください。ファイルが異なるユーザーのディレクトリにコピーされた場合、移行を実行するユーザーが Shared Services Console の File System アプリケーション・グループを参照できなくなります。つまり、File System アーチファクトを表示するには、これらのアーチファクトが Shared Services にログインしたユーザー(admin@NativeDirectory など)のユーザー・ディレクトリに存在している必要があります。

移行のシナリオについては、14 ページの「[移行のシナリオ](#)」を参照してください。

- ▶ Shared Services Console を使用してファイル・システムからアーチファクトとアプリケーションを移行するには、次の手順に従います:
  - 1 宛先環境をバックアップします。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。
  - 2 Shared Services Console を起動します。23 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

- 3 アーチファクトを表示します。34 ページの「[アーチファクトの表示](#)」を参照してください。
- 4 ビュー・ペインで File System アプリケーション・グループまで移動し、移行するアプリケーションまたはアーチファクトを選択します。
- 5 移行の定義をクリックして、移行ウィザードを表示します。
- 6 ソースページでは移行のソース・アプリケーションを選択して、次へをクリックします。
- 7 ソース・オプションページでは、ソースについての情報を入力し、次へをクリックします。

**注：** ソース・オプションは製品ごとに異なります。製品別のオプションのリストは、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

- 8 宛先ページで、アプリケーションを指定し、次へをクリックします。

**注：** 一部の製品では製品にアプリケーションが存在しているか、シェル・アプリケーションが作成されるまで、宛先アプリケーションを選択できません。ご使用の製品がこのケースにあてはまるかどうかを判別するには、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

- 9 宛先オプションページで、宛先オプションを表示し、次へをクリックします。

**注：** 宛先オプションは製品ごとに異なります。製品別のオプションのリストは、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

- 10 移行の要約ページでは、指定したソース・オプションと宛先オプションを確認します。変更するには、戻るをクリックします。
- 11 今後実行する移行のために移行定義を保存し、移行をただちに実行できるようにします。
  - 移行定義を保存するには、41 ページの「[移行定義の保存](#)」を参照してください。
  - 移行をただちに実行するには、次の手順に従います：
    1. 移行の実行をクリックします。
    2. 移行ステータス・レポートの起動をクリックして、移行ステータスを表示するか、OK をクリックします。

48 ページの「[移行ステータスの表示](#)」を参照してください。

## アプリケーションから他のアプリケーションへの直接的な移行

アプリケーション間の直接移行は、同じ Shared Services インスタンスに登録されている「類似した」アプリケーションに限定されます。たとえば、Essbase と Essbase、Planning と Planning、Financial Management と Financial Management などです。ユーザーは Financial Management と Planning 間で移行できません。



一部の EPM System 製品ではライフサイクル管理を使用したアプリケーション間の直接移行がサポートされていません。ご使用の製品でアプリケーション間の移行がサポートされているか判断するには、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

**注：** 一部の製品では製品にアプリケーションが存在しているか、シェル・アプリケーションが作成されるまで、宛先アプリケーションを選択できません。ご使用の製品がこのケースにあてはまるかどうかを判断するには、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

▶ Shared Services Console を使用してアプリケーション間で直接アーチファクトとアプリケーションを移行するには、次の手順に従います：

- 1 宛先環境をバックアップします。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。
- 2 Shared Services Console を起動します。23 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
- 3 アーチファクトを表示します。34 ページの「アーチファクトの表示」を参照してください。
- 4 移行するアプリケーションまたはアーチファクトを選択します。
- 5 **オプション:** 選択済アーチファクト(アーチファクト・リストの上)をクリックして、選択されたアーチファクトのリストをフィルタし、選択されたアーチファクトのみが表示されるようにします。
- 6 移行の定義をクリックして、移行ウィザードを表示します。
- 7 ソースページでは移行のソース・アプリケーションを選択して、次へをクリックします。

次のことに注意してください。

- ソースページは複数のアプリケーション(または複数のソース)からアーチファクトを選択した場合にのみ表示されます。1つの製品からのみアーチファクトを選択した場合、移行ウィザードはこのページをスキップし、ソース・オプションページに直接ジャンプします。
  - ソースページに表示されたすべてのソースは移行定義に含まれるため、各ソースの移行オプションを指定する必要があります。
  - 移行定義からソースを除外するには、ソースを選択しソースの削除をクリックします。
  - それぞれに移行オプションを指定した後、移行を同時に実行できます。移行ウィザードで移行の定義が終わると、ソースページのソースの横に緑色のチェック・マークが表示されます。
- 8 ソース・オプションページでは、ソースについての情報を入力し、次へをクリックします。

**注：** ソース・オプションは製品ごとに異なります。製品別のオプションのリストは、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

- 9 宛先ページでアプリケーションを宛先に指定し、次へをクリックします。



- 宛先オプションページで、宛先オプションを表示し、次へをクリックします。

**注：** 宛先オプションは製品ごとに異なります。製品別のオプションのリストは、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

- 移行の要約ページでは、指定したソース・オプションと宛先オプションを確認します。変更するには、戻るをクリックします。
- 今後実行する移行のために移行定義を保存し、移行をただちに実行できるようにします。
  - 移行定義を保存するには、[41 ページの「移行定義の保存」](#)を参照してください。
  - 移行をただちに実行するには、次の手順に従います：
    - 移行の実行をクリックします。
    - 移行ステータス・レポートの起動をクリックして、移行ステータスを表示するか、OK をクリックします。

[48 ページの「移行ステータスの表示」](#)を参照してください。

## 移行定義の保存

移行定義を作成して保存すると、移行はXML ファイルとして保存されます。この機能を利用して移行を定義し、移行を後で再利用したり、ユーザー・インタフェースを使用して Shared Services Console またはライフサイクル管理ユーティリティのいずれかで移行を繰り返したりできます。

XML 移行定義ファイルおよびライフサイクル管理ユーティリティを使用して、自動移行を実行できます。さらにサードパーティ製のスケジューラを使用することで、移行をスケジュールすることもできます。

- ▶ Shared Services Console を使用して移行定義を作成するには、次の手順に従います：
- Shared Services Console を起動します。[23 ページの「Shared Services Console の起動」](#)を参照してください。
  - 移行するアーチファクトまたはアプリケーションを定義します。[36 ページの「アーチファクトの移行」](#)を参照してください。
  - 移行定義の保存をクリックします。
  - ファイルのダウンロードで保存をクリックし、保存の宛先を指定します。
  - 保存をクリックします。

## 移行定義の編集または実行

保存した移行定義を編集または実行できます。

---

**注意** 移行の実行前に宛先の環境をバックアップすることをお勧めします。ライフサイクル管理を使用したエクスポートおよびインポートは元に戻せません。

---

- ▶ Shared Services Console を使用して移行定義を実行するには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 移行を定義するか保存した移行を選択します。
    - 新しい移行を定義するには 36 ページの「[アーチファクトの移行](#)」を参照してください。
    - 保存した移行を選択するには、管理メニューから移行の編集/実行を選択します。  
移行の編集/実行ページが表示されます。
  - 3 保存された移行に移動して、それを開きます。
  - 4 終了をクリックします。  
移行ウィザードが表示されます。
  - 5 移行オプションを選択します。36 ページの「[アーチファクトの移行](#)」を参照してください。

## 編集する個々のアーチファクトのエクスポートとインポート

Shared Services Console では、移行ウィザードで移行を定義しなくても、個々のアーチファクトをファイル・システムにエクスポートし、これを編集した後でインポートできます。

**注：** アーチファクトにはファイル・システムで編集できないものもあります。  
43 ページの「[個々のアーチファクトの編集](#)」を参照してください。

アーチファクトは、エクスポートしたのと同じアプリケーションにインポートし直す必要があります。

ここには次のトピックがあります。

- 42 ページの「[編集する個々のアーチファクトのエクスポートとインポート](#)」
- 43 ページの「[個々のアーチファクトの編集](#)」
- 43 ページの「[個々のアーチファクトのインポート](#)」

## 編集する個々のアーチファクトのエクスポートとインポート

- ▶ Shared Services Console を使用して個々のアーチファクトをエクスポートするには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

- 2 ビュー・ペインでアプリケーション・グループノードを展開し、アプリケーション・グループを表示します。
- 3 アプリケーションを表示するために、アプリケーション・グループを展開します。
- 4 アプリケーションをクリックして(またはアプリケーションを右クリックし、エクスプローラを選択して)、アーチファクトのリストを表示します。
- 5 エクスポートするアーチファクトを右クリックし、編集用にエクスポートを選択します。
- 6 ファイルのダウンロードで保存をクリックします。
- 7 ローカル・ファイル・システムの保存場所を入力し、保存をクリックします。

**注：** Reporting and Analysis に限り、アーチファクトがローカル・ファイル・システムの ZIP ファイルに保存されます。編集するには、アーチファクトを解凍する必要があります。その他の製品では、アーチファクトは ZIP ファイルではなく、ファイル・システムに直接保存されます。

## 個々のアーチファクトの編集

アーチファクトは個々のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテム(たとえば、スクリプト、Web フォーム、データ・フォーム、ルール・ファイル、ドキュメント、財務レポートなど)であるため、その編集メソッドはアーチファクトのタイプにより異なります。一部のアーチファクトはテキスト・エディタで編集可能ですが、中には編集時に製品が必要なものもあります。たとえば、Calculation Manager のアーチファクトは XML ベースであるため、テキスト・エディタで編集できます。

アーチファクトがファイル・システム上で編集可能かどうかを判別するには、本ガイドの最後に掲載された付録のアーチファクト・リストを確認してください。

---

**注意** 編集用にエクスポートしたファイルは名前変更しないでください。インポートが失敗します。

---

## 個々のアーチファクトのインポート

アーチファクトはエクスポート元の同一アプリケーションにインポートする必要があります。また、アーチファクトのエクスポート中に使用された同じファイル名を使用する必要があります。

- ▶ Shared Services Console を使用して個別アーチファクトをインポートするには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインでアプリケーション・グループノードを展開し、アプリケーション・グループを表示します。
  - 3 アプリケーションを表示するために、アプリケーション・グループを展開します。

- 4 アプリケーションをクリックして(またはアプリケーションを右クリックし、エクスプローラを選択して)、アーチファクトのリストを表示します。
- 5 アプリケーション内の任意のアーチファクトを右クリックし、編集後にインポートを選択します。
- 6 アーチファクトのロードで、アーチファクトを保存するローカルのファイル・システムの場所を入力し、終了をクリックします。

## ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行

移行ウィザードは、アプリケーションのアーチファクトと同様に、ネイティブ・ディレクトリのアーチファクト(ユーザー、グループ、役割、委任リスト、および割り当てられた役割)を移行します。移行ウィザードを使用すると、移行するネイティブ・ディレクトリを定義できます。

ネイティブ・ディレクトリの移行の使用例は次のとおりです。

- アプリケーションを移行する前に、移行するアプリケーションのネイティブ・ディレクトリのアーチファクトを移行します。このガイドの巻末にある付録を参照してください。
- アップグレードの場合、既存の OpenLDAP データを Oracle Internet Directory (OID)に移行します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』の「既存の OpenLDAP の OID への移行」を参照してください。

Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーチファクトは、Foundation アプリケーション・グループの下の Shared Services ノードにリストされています。

**注：** 製品アプリケーションのセキュリティ・アーチファクト(たとえば、Financial Management セキュリティ・クラシックや Essbase フィルタなど)は、製品アプリケーション・グループの下に個別にリストされています。製品別のアプリケーションのセキュリティ・アーチファクト・リストについては、このガイドの巻末にある付録を参照してください。

- ▶ Shared Services Console を使用して Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のアーチファクトを移行するには、次の手順に従います:
  - 1 宛先環境をバックアップします。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。
  - 2 Shared Services Console を起動します。23 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 3 ビュー・ペインのアプリケーション・グループノードで、Foundation アプリケーション・グループを展開します。
  - 4 Shared Services をクリックします(または、Shared Services を右クリックして、エクスプローラを選択します)。

**注：** アーチファクト・リスト、選択されたアーチファクト、アーチファクトの検索のいずれかの表示オプションを選択します。これらの表示オプションの詳細は、[34 ページの「アーチファクトの表示」](#)を参照してください。

- 5 ネイティブ・ディレクトリを展開して、次のネイティブ・ディレクトリのアーチファクトを選択します。
  - 役割
  - グループ
  - 委任リスト
  - ユーザー
- 6 割り当てられた役割を展開して、移行するアプリケーションに割り当てられた役割のみ選択します。
- 7 移行の定義をクリックします。
- 8 移行を定義します。[36 ページの「アーチファクトの移行」](#)を参照してください。

ネイティブ・ディレクトリのエクスポート・オプションとインポート・オプションの詳細は、[付録 B「Shared Services とライフサイクル管理」](#)を参照してください。

## Shared Services レジストリ・データの編集

Shared Services レジストリとは Shared Services 用に構成するデータベースの一部です(Shared Services のデータベースとテーブルスペースを共有しています)。

**注：** 前のリリースでは、Shared Services レジストリは EPM System レジストリとも呼ばれていました。

Shared Services レジストリは EPM System 製品の初回構成時に作成され、インストールする主な EPM System 製品の次の情報を保管および再使用することで、構成を簡略化します。

- インストール・ディレクトリ、データベース設定、配置設定などの初期構成値
- 複数の統合された EPM System 製品と各種コンポーネントを統合するために使用するコンピュータ名、ポート、サーバー、URL
- 依存するサービス・データ

Shared Services の場合、Shared Services レジストリは、デフォルトの OpenLDAP ネイティブ・ディレクトリ(ただし、Oracle インターネット・ディレクトリまたは企業の社外ユーザー・ディレクトリは除く)、Shared Services Web アプリケーション参照、およびデータベース構成情報を保管します。

ライフサイクル管理に備わったユーザー・インタフェースにより、ユーザーはレジストリのコンテンツを表示し、レジストリ・データを編集や再インポートが可能なファイル・システムにエクスポートできます。

---

**注意** Shared Services レジストリ・アーチファクトは指定された環境にかぎり、ライフサイクル管理の一部として構成情報の編集などに使用可能です。Shared Services レジストリ・データを1つの環境から別の環境に移行するためにライフサイクル管理を使用しないでください。

---

移行ウィザードはエクスポートする Shared Services レジストリ・アーチファクトの定義に役立ちます。また、Shared Services Console を使用して、個別のレジストリ・アーチファクトをファイル・システムにエクスポートし、編集できるため、移行ウィザードで移行を定義せずに編集し終えた段階で、それらをインポートできます。

Foundation アプリケーション・グループの Deployment Metadata ノードの下で、Shared Services Console に属す Shared Services レジストリ・アーチファクトをすべて表示できます。

- ノード(レジストリの分類ごと)はすべてライフサイクル管理のディレクトリです。
- ノードの属性はすべてライフサイクル管理のアーチファクトです。
- ファイル(XML ファイルなど)の属性には、対応するファイル・タイプのアーチファクトが存在します。
- ノード(コンポーネントまたは製品)の名前付き値ペアの属性はいずれも、1つのアーチファクトにグループ分けされます。このアーチファクトはこうした属性のすべてを含むファイルで、ライフサイクル管理のエクスポートが実施されるときにコピーされます。

Shared Services レジストリ・アーチファクトおよび Shared Services レジストリの移行オプションのリストについては、[付録 A 「配置メタデータとライフサイクル管理」](#) を参照してください。

ここには次のトピックがあります。

- [46 ページの「Shared Services レジストリ・データの表示」](#)
- [47 ページの「Shared Services レジストリ・データのエクスポート」](#)
- [47 ページの「Shared Services レジストリ・データの編集」](#)
- [47 ページの「Shared Services レジストリ・データのインポート」](#)

## Shared Services レジストリ・データの表示

- ▶ Shared Services Console を使用して、Shared Services レジストリ・データを表示するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。[23 ページの「Shared Services Console の起動」](#) を参照してください。
  - 2 ビュー・ペインのアプリケーション・グループノードで、Foundation アプリケーション・グループを展開します。
  - 3 配置メタデータをクリックします(または配置メタデータを右クリックして、エクスプローラを選択します)。

- 4 Shared Services レジストリを選択します。

## Shared Services レジストリ・データのエクスポート

---

**注意** Shared Services レジストリ・アーチファクトは指定された環境にかぎり、ライフサイクル管理の一部として構成情報の編集などに使用可能です。Shared Services レジストリ・データを1つの環境から別の環境に移行するためにライフサイクル管理を使用しないでください。

---

- ▶ Shared Services Console を使用して Shared Services レジストリをエクスポートするには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 Shared Services レジストリ・データを表示します。46 ページの「[Shared Services レジストリ・データの表示](#)」を参照してください。
  - 3 個別レジストリ・アーチファクトをファイル・システムにエクスポートするには、エクスポートするアーチファクトを右クリックし、編集用にエクスポートを選択し、ファイル・システムでの保存場所を入力します。42 ページの「[編集する個々のアーチファクトのエクスポートとインポート](#)」を参照してください。
  - 4 サーバー・ファイル・システムに複数のレジストリ・アーチファクトをエクスポートするには、エクスポートするコンテンツを選択し、移行の定義をクリックし、移行を定義します。36 ページの「[ファイル・システムへの移行](#)」を参照してください。

## Shared Services レジストリ・データの編集

- ▶ ファイル・システムで Shared Services レジストリ・データを編集するには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services レジストリ・データがコピーされている、またはエクスポートされているファイル・システムの場所に移動します。
  - 2 データを編集します。
  - 3 変更を保存します。

## Shared Services レジストリ・データのインポート

- ▶ Shared Services Console を使用して、Shared Services レジストリ・データをインポートするには、次の手順に従います:
  - 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
  - 2 Shared Services レジストリ・データを表示します。46 ページの「[Shared Services レジストリ・データの表示](#)」を参照してください。



- 3 ファイル・システムから個別のレジストリ・アーチファクトをインポートするには、インポートするアーチファクトを右クリックし、編集後にインポートをクリックして、アーチファクトを保存するファイル・システムの場所を入力します。続いて、終了をクリックします。[43 ページの「個々のアーチファクトのインポート」](#)を参照してください。
- 4 移行ウィザードを使用してレジストリ・アーチファクトをインポートするには、ファイル・システム・アプリケーション・グループに移動し、Shared Services レジストリ・アーチファクトを選択して、移行の定義をクリックし、移行を定義します。[38 ページの「ファイル・システムからの移行」](#)を参照してください。

## ライフサイクル管理のレポート

Shared Services では、次のライフサイクル管理レポートが提供されています:

- 移行ステータス・レポート
- アーチファクト監査レポート

**注:** Shared Services でも、プロビジョニング・レポート、セキュリティ・レポート、および構成レポートが生成されます。これらのレポートについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』に説明されています。

ここには次のトピックがあります。

- [48 ページの「移行ステータスの表示」](#)
- [50 ページの「アーチファクト・レポートの生成」](#)

### 移行ステータス・レポート

ここには次のトピックがあります。

- [48 ページの「移行ステータスの表示」](#)
- [49 ページの「移行データの削除」](#)

### 移行ステータスの表示

LCM 管理者は、移行ステータス・レポートを表示してすべての移行のステータスを確認できます。

- 処理中: 移行の処理中です。
- 完了: すべてのアーチファクトが正常に移行されました。
- 失敗: 一部のアーチファクトが移行されませんでした。リンクをクリックして、移行の詳細を表示してください。

**注:** 処理中または完了の移行では、詳細情報は表示されません。



- ▶ Shared Services Console を使用して移行ステータス・レポートを表示するには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 管理から、移行ステータス・レポートを選択します。  
各移行に関する次の情報を表示できます。
    - ユーザー
    - 開始時間
    - 完了時間
    - 継続時間
    - ステータス-処理中、完了、または失敗
  - 3 移行に失敗したら、ステータス列の失敗をクリックして、次の移行の詳細を表示できます。
    - ソースと宛先のアプリケーション
    - アーチファクトのパス
    - アーチファクト名
    - エラー・メッセージ
  - 4 移行ステータス・レポートを再生成するには、リフレッシュをクリックします。
  - 5 移行ステータス・レポートを閉じるには、取消しをクリックします。

## 移行データの削除

この機能により、指定した移行データを削除できます。削除できるのは完了した移行と失敗した移行のみです。進行中の移行は削除できません。

- ▶ Shared Services Console を使用して移行データを削除するには、次の手順に従います:
- 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 管理から移行ステータス・レポートの削除を選択します。
  - 3 削除ダイアログ・ボックスで次の値のいずれかを指定します。
    - -1-すべての移行データを削除
    - 0 - 前日までに行われたすべての移行のデータを削除
    - n - 本日から数えて指定日数より前の移行データをすべて削除。たとえば、2 と入力すると、本日から数えて 2 日より前の移行データがすべて削除されます(n の値は、正の数である必要があり、999 より大きい値は指定できません)。
  - 4 指定した移行データを削除するには、削除をクリックします。
  - 5 データを一切削除せずに削除ダイアログ・ボックスを閉じるには取消しをクリックします。

## アーチファクト・レポートの生成

アプリケーション監査レポートはライフサイクル管理機能を使用してインポートまたはエクスポートされたアーチファクトの情報を表示します。Shared Services の管理者のみが、監査レポートを生成および表示できます。LCM 管理者は監査タスクを実行できません。

**注：** 監査を構成してからでないと、監査レポートを生成できません。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

監査を使用可能にすると、アプリケーション・レベルまたはアプリケーション・グループ・レベルで監査レポートを生成できるようになります。ライフサイクル管理で実行されたすべてのアクションはアーチファクト・レポートにロギングされます。アーチファクト・レポートは移行されたアーチファクトで、いつ移行されたか、誰に移行されたかを追跡します。レポートは外部ファイルにエクスポートできます。

- ▶ Shared Services Console を使用してアーチファクト・レポートを生成するには、次の手順に従います：
- 1 Shared Services Console を起動します。23 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
  - 2 管理で監査レポートを選択してから、アーチファクト・レポートを選択します。  
アプリケーション監査レポートが表示されます。
  - 3 レポート・パラメータの入力：
    - 実行者-レポートを生成するユーザーを選択するか、すべてのユーザーを選択します。
    - 実行された期間-レポートを実行する期間を選択します。次のオプションから選択してください。
      - 5 日-過去 5 日間のイベントを表示します。
      - 10 日-過去 10 日間のイベントを表示します。
      - 15 日-過去 15 日間のイベントを表示します。
      - 20 日-過去 20 日間のイベントを表示します。
      - 25 日-過去 25 日間のイベントを表示します。
      - 30 日-過去 30 日間のイベントを表示します。
      - 日付範囲-指定した日付範囲内のイベントを表示します。指定された開始および終了日付は含まれます。
  - 4 レポートを表示するには、レポートの表示をクリックします。
  - 5 レポートを CSV ファイル・フォーマットで表示または保存するには、エクスポートをクリックします。
  - 6 レポートを閉じるには閉じるをクリックします。

# Shared Services Console の移行プロパティ・ファイル

Shared Services Console では移行プロパティ・ファイルを使用して、Shared Services Console の移行の際にグローバル・パラメータを設定します。

**注：** ライフサイクル管理ユーティリティの移行には、別の移行プロパティ・ファイルが用意されています。63 ページの「ライフサイクル管理ユーティリティの移行プロパティ・ファイル」を参照してください。

Shared Services Console の migration.properties ファイルは、Shared Services アプリケーション・サーバー・ディレクトリ(たとえば、HYPERION\_HOME/deployments/AppServNameAndVersion/SharedServices9/config/)にあります。

▶ 移行プロパティ・ファイルを変更するには、次の手順に従います:

- 1 コマンド・プロンプト・ウィンドウを開きます。
- 2 ディレクトリを migration.properties の場所(たとえば、C:/Hyperion/deployments/AppServNameAndVersion/SharedServices9/config/)に変更します。
- 3 必要に応じて migration.properties を更新します。
- 4 migration.properties を保存して閉じます。
- 5 Shared Services を再起動します。

## Shared Services Console の管理プロパティ・ファイルのサンプル

```
log.directory=../logs
log.config=../conf/log.xml
report.enabled=Y
report.folder_path=../reports
msr.queue.size=200
msr.queue.waittime=60
migration.scheduler.concurrency.count=5
#filesystem.artifact.path=C:/LCM/import_export
double-encoding=true
export.group.count=30
import.group.count=10000
```

表 3 migration.properties の値

プロパティ	説明
log.directory	移行ログ・ファイルが保管されるディレクトリの場所。 デフォルト値: ../logs (LCM_HOME/logs)
log.config	ロギング構成ファイルが保管されるディレクトリの場所。 log.config ファイルでは、エラー・ロギングのレベルや日付のパターンなど、ロギングに必要なすべてのパラメータが指定されます。

プロパティ	説明
	<p>ロギング・エラーで使用されるパラメータは、migration.log ディレクトリにある log.properties を使用して識別されます。</p> <p><b>デフォルト値:</b> ../conf/log.xml (LCM_HOME/conf/log.xml)</p>
report.enabled	<p>ライフサイクル管理ユーティリティで[-estimate] 引数を使用して、提案された移行でのアーチファクトの個数を概算できます。</p> <p>[-estimate] 引数についての詳細は、<a href="#">65 ページの「ユーティリティの実行」</a>を参照してください。</p> <p><b>デフォルト値:</b> Y</p>
report.folder_path	<p>移行ステータスのレポートとアーチファクトの概算レポートが保管されるディレクトリの場所。</p> <p><b>デフォルト値:</b> ../reports (LCM_HOME/reports)</p>
fileSystem.friendlyNames	<p>アーチファクトのファイルが、拡張名 (アーチファクト ID と名前の組合せなど) で保管されるかどうかを示します。</p> <p>値が TRUE に設定されているか、このプロパティが存在しない場合、ファイルのパスは listing.xml のアーチファクト path に呼応します。値を FALSE に設定した場合、listing.xml の pathAlias 値が使用されます。</p> <p>ファイル・システムの中には、ディレクトリ・パスの深さに制限があるものがあります。稀なケースでは 256 文字より多くの深さを許可しないものがある一方で、4000 文字を許可するものもあります。この制限を越えるディレクトリ構造を持つ特定アプリケーションでは、このプロパティを FALSE に設定することで、ライフサイクル管理エンジンがディレクトリおよびアーチファクトの名前に短い名前(UUID)を使用するようにします。推奨値は TRUE です。</p> <p><b>デフォルト値:</b> TRUE</p>
msr.queue.size	<p>移行ステータス・レポートの詳細が更新される前に、移行ステータス・レポートのキューに格納できるレコードの最大数を指定します。たとえば、キュー内のレコード数が 200 を超えると、(次に説明する待機時間の制限に達する前に)レコードは移行ステータス・レポート内で更新されます。</p> <p><b>デフォルト値:</b> 200</p>

プロパティ	説明
msr.queue.waittime	<p>移行ステータス・レポートの詳細で移行ステータス・レポートのキュー内のレコードが更新されるまでの待機時間(秒)を指定します。たとえば、待機時間が 60 を超えると、(前述のサイズ制限に達する前に)レコードは移行ステータス・レポート内で更新されます。</p> <p><b>デフォルト値:</b> 60</p>
migration.scheduler.concurrency.count	<p>同時に実行される移行処理の数を制限します。移行処理の数が多くなりすぎると、Shared Services のパフォーマンスに悪影響を与えるため、処理の数を制限することによりパフォーマンスを最適化します。</p> <p><b>注:</b> Shared Services Console から実行された移行要求のみを制限できます。ライフサイクル管理ユーティリティの移行の数は制限できません。</p> <p><b>デフォルト値:</b> 5</p>
filesystem.artifact.path	<p>エクスポートされたアプリケーションが保管されるディレクトリの場所。このパラメータをカスタマイズするには、この行のコメントを解除し、パスの場所を追加します。</p> <p><b>デフォルト値:</b> このパラメータはコメント化され、ライフサイクル管理エンジンでは Shared Services コンピュータのデフォルト・ファイル・システムの場所が使用されます(HYPERION_HOME/common/import_export/username@ProviderName/など)。</p> <p><b>注:</b> Windows 2003 の場合、Shared Services が Windows のサービスの 1 つとして開始され、ファイル・システム・パスはマップされたドライブに定義されることから、Shared Services Console を使用してファイル・システムのコンテンツを表示できません。ファイル・システム・パスがネットワーク・アクセスの可能な場所である場合は、Shared Services が Windows サービスとして実行していないことを確認してください。</p>
double-encoding	<p>Financial Management アプリケーションの移行で UTF-8 エンコードに加えて Base64 エンコードを使用できます。</p> <p>このプロパティは、混在リリース環境で (Financial Management の前のリリースと、Shared Services のこのリリースを使用する場合など)Financial Management の移行を実行する場合にはサポートされません。混在リリース環境で Financial Management アプリケーションの移行を実行する場合</p>

プロパティ	説明
	<p>は、このプロパティを <code>FALSE</code> に設定します。</p> <p><b>デフォルト値:</b> <code>TRUE</code></p>
<p><code>export.group.count</code></p>	<p>移行のトラブルシューティング・シナリオで使用されるメモリ最適化プロパティです。</p> <p><b>デフォルト値:</b> <code>30</code></p> <p><b>注:</b> Financial Management は、桁区切り数を内部で処理します。したがって、Financial Management にはデフォルト値は適用されません。</p>
<p><code>import.group.count</code></p>	<p>トラブルシューティング・シナリオで使用されるメモリ最適化プロパティです。</p> <p><b>デフォルト値:</b> <code>10000</code></p> <p><b>注:</b> Financial Management は、桁区切り数を内部で処理します。したがって、Financial Management にはデフォルト値は適用されません。</p>

# 6

## ライフサイクル管理ユーティリティの使用法

### この章の内容

ライフサイクル管理ユーティリティの機能と要件.....	55
ライフサイクル管理ユーティリティのインストール.....	56
ライフサイクル管理ユーティリティの使用法.....	56

## ライフサイクル管理ユーティリティの機能と要件

ライフサイクル管理ユーティリティは、製品環境およびオペレーティング・システム間でのアーチファクトの移行をサポートするコマンドライン・ユーティリティです。このユーティリティにより、アプリケーション全体または個別のアーチファクトを、ソースから宛先に移行する代替手段が提供されます。

ここには次のトピックがあります。

- [55 ページの「機能」](#)
- [55 ページの「ライフサイクル管理ユーティリティの要件」](#)

### 機能

- 1つ以上の EPM System アプリケーションまたはアプリケーションのアーチファクトを、ある環境から他の環境に移行する
- ユーザーは Windows タスク スケジューラまたは Oracle Enterprise Manager などのサード・パーティのスケジューリング・サービスを使用して、スケジュールされた移行を実行できる
- ユーティリティへの保護されたアクセスを保証する。  
ライフサイクル管理の操作を行えるのは、LCM 管理者の役割を割り当てられたユーザーのみです。
- 国際データの移行をサポート
- トラブルシューティングを容易にするためのエラーの記録

### ライフサイクル管理ユーティリティの要件

[18 ページの「ライフサイクル管理の要件」](#) を参照してください。

# ライフサイクル管理ユーティリティのインストール

ここには次のトピックがあります。

- 56 ページの「システムの要件」
- 56 ページの「ユーティリティのインストール」

## システムの要件

ライフサイクル管理ユーティリティは、最低要件を満たすコンピュータにインストールできます。そのコンピュータではソースと宛先の Shared Services インスタンスとの通信を確立できる必要があります。このユーティリティは、Shared Services をホストしているサーバー・コンピュータで実行することを推奨します。

表 4 ライフサイクル管理ユーティリティのシステム要件

コンポーネント	要件
プロセッサ	Java 1.4 JVM をサポートし、1 GHz より速い任意のプロセッサ
メモリー	256 MB 以上(512 MB を推奨)
SDK	Java 2 SDK Standard Edition v. 1.4

## ユーティリティのインストール

ライフサイクル管理ユーティリティは Shared Services のインストール時にインストールされます。Shared Services のインストールとアプリケーション・サーバーへの配置については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

ライフサイクル管理ユーティリティのコンポーネントは `HYPERION_HOME/common/utilities/LCM/9.5.0.0` (`LCM_HOME` として参照されます)にインストールされます。

**注：** このディレクトリには、ライフサイクル管理ユーティリティの実行に必要なすべてのファイルが含まれています。このディレクトリをコピーして他のコンピュータに貼り付けると、ライフサイクル管理ユーティリティを他のコンピュータで使用可能です。

## ライフサイクル管理ユーティリティの使用法

移行を開始する前に:

- Shared Services が実行していることを確認します。
- 要件に最適な移行シナリオを判別します。
- 宛先環境をバックアップします。
- 移行定義を作成します。



- **オプション:** 移行に使用するプロパティ・ファイルを変更します。

ここには次のトピックがあります。

- [57 ページの「移行定義の作成」](#)
- [57 ページの「移行定義ファイルの XML スキーマ」](#)
- [63 ページの「ライフサイクル管理ユーティリティの移行プロパティ・ファイル」](#)
- [65 ページの「ユーティリティの実行」](#)

## 移行定義の作成

移行対象のアーチファクトは、移行定義ファイルで定義されている必要があります。EPM System では、移行時に使用される移行定義のひな型となるサンプル・ファイルが用意されています(LCM\_HOME/samples にあります)。移行定義は手動で作成したり、Shared Services Console の移行ウィザードで自動的に作成したりできます。

## 移行定義ファイルの XML スキーマ

移行時に使用される移行定義のひな型となるサンプル・ファイルは LCM\_HOME/doc ディレクトリにあります(例:C:/Hyperion/common/utilities/LCM/9.5.0.0/doc)。

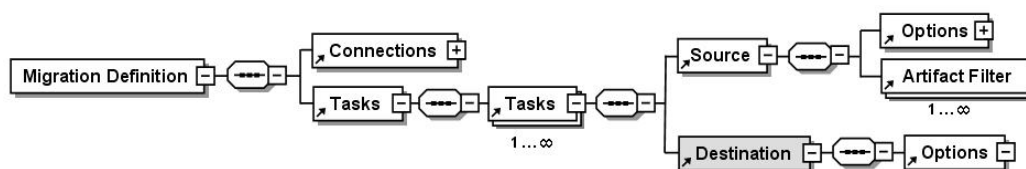
ここには次のトピックがあります。

- [57 ページの「移行定義の XML スキーマ図」](#)
- [57 ページの「移行定義ファイルの要素」](#)

製品ごとの移行定義ファイルのサンプルについては、このガイドの巻末付録を参照してください。

### 移行定義の XML スキーマ図

移行定義の XML スキーマのアウトラインを、次の図に示します。



### 移行定義ファイルの要素

ここでは、移行定義ファイルの XML スキーマで使用される要素および属性について説明します。

- [58 ページの「接続要素」](#)
- [60 ページの「タスク要素」](#)

- 60 ページの「ソース要素」
- 62 ページの「ターゲット要素」

## 接続要素

接続要素では、操作に使用する接続を定義します。接続のタイプは、HSS、FileSystem および Application の 3 つを定義できます。接続要素の属性については表 5 で説明されています。

HSS の接続属性:

- ConnectionInfo name
- type
- description
- user
- password

FileSystem の接続属性:

- ConnectionInfo name
- type
- description
- filePath

Application の接続属性

- ConnectionInfo name
- type
- product
- project
- application
- HSS-Connection
- description

インポート操作では、ソースと宛先が存在する必要があります(Shared Services、アプリケーションまたはファイル・システム)。

表 5 接続属性

属性	説明
ConnectionInfo name	このタスクで使用される接続です。 <b>例</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● MyHSS-Connection1</li> <li>● FileSystem-Connection1</li> <li>● AppConnection1</li> </ul>

属性	説明
	<p><b>注：</b> 命名ルールでは、先行フォーマットを使用する必要があります。接続番号のみを変更できます。たとえば、1 を 2 に変更します。</p>
type	<p>次の 3 つの接続タイプがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● HSS(Shared Services インスタンスの接続用)</li> <li>● FileSystem(ファイル・システムの接続用)</li> <li>● Application(Shared Services で登録されているアプリケーションの接続用)</li> </ul>
description	<p>接続の説明。</p> <p><b>例:</b> My Shared Services Connection</p>
user	<p>MyHSS-Connection タイプでのみ使用されます。これは、Shared Services の LCM 管理者役割を割り当てられたユーザー・アカウントです。</p> <p><b>例:</b> pturner</p> <p><b>注：</b> スケジュール済の移行を実行するためにこのユーティリティを使用している場合は、user および password の値が入力されていることを確認します。これらの値を入力しない場合は、ユーティリティによってこれらの値を入力するためのプロンプトが表示され、ユーティリティそのものは実行されません。</p>
password	<p>MyHSS-Connection タイプでのみ使用されます。これは、プレーン・テキストのユーザー・パスワードです。このパスワードは、はじめて実行した後に暗号化されます。</p> <p><b>例:</b> pturner_pwd</p> <p><b>注：</b> スケジュール済の移行を実行するためにこのユーティリティを使用している場合は、user および password の値が入力されていることを確認します。これらの値を入力しない場合は、ユーティリティによってこれらの値を入力するためのプロンプトが表示され、ユーティリティそのものは実行されません。</p>
filePath	<p>FileSystem-Connection タイプでのみ使用されます。これは、ファイル・システム上に保管されているアーチファクトのディレクトリです。</p> <p><b>例:</b> filePath="/Essbase.Sample.Basic"</p> <p><b>注：</b> ファイル・システムの場所の絶対パスは migration.properties で定義されます。</p>
product	<p>AppConnection タイプでのみ使用されます。これは、Shared Services で登録されているアプリケーションの製品コードです。</p> <p><b>例:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● HUB (Shared Services)</li> <li>● HAVA (Reporting and Analysis)</li> <li>● ESBAPP (Essbase)</li> <li>● HFM (Financial Management)</li> <li>● HP (Planning)</li> <li>● BPMA (Performance Management Architect および Calculation Manager)</li> <li>● HPS (Performance Scorecard)</li> <li>● HPCM (Profitability and Cost Management)</li> </ul>

属性	説明
HSSConnection	AppConnection タイプでのみ使用されます。これは、Shared Services の接続定義です。 移行定義で定義されている HSS タイプにする必要があります。 <b>例:</b> MyHSS-Connection1
project	AppConnection タイプでのみ使用されます。これは、アプリケーションが属している Shared Services アプリケーション・グループ(以前はプロジェクトと呼ばれていました)の名前です。プロジェクト名は Shared Services Console に表示されます。 <b>例:</b> DevBIPlus_Proj
application	AppConnection タイプでのみ使用されます。これは、アプリケーションの登録名です。アプリケーションの名前は Shared Services Console に表示されます。 <b>例:</b> HAVAAPP1

## タスク要素

タスク要素では、操作中に完了するタスクを定義します。移行定義ファイルで定義されるタスクの数は、ソースと宛先、および移行対象のアーチファクトによって異なります。ソースと宛先が1つしかない場合、定義する必要があるタスクは1つのみです。

複数のソースと宛先がある場合は、ソースと宛先の組合せごとに少なくともタスクを1つずつ定義する必要があります。たとえば、ファイル・システムへのアーチファクトの展開をタスク1として定義し、ファイル・システムからアプリケーションへのアーチファクトのロードはタスク2として定義します。

タスク要素の属性については表6で説明されています。

表6 タスク属性

属性	説明
Task seqID	タスクが実行されるシーケンス。 <b>例:</b> 1, 2, 3

## ソース要素

ソース要素では、この操作のソースを定義します。タスクごとにソースと宛先をそれぞれ1つずつ定義する必要があります。

ソース要素の属性については表7で説明されています。

表7 ソース属性

属性	説明
Source connection	このタスクで使用する接続。 接続要素で定義された接続名を使用します。

属性	説明
	<p><b>注：</b> ソース定義で HSS タイプの接続は使用できません。ソース定義では AppConnection タイプか FileSystem-Connection タイプのみを使用できます。</p> <p><b>例:</b> AppConnection1</p>
Options	<p>オプションは製品に固有です。設定可能なインポートとエクスポートのオプションについては、このガイドの巻末付録を参照してください。ソースまたは宛先でオプションを解釈することによって、移行対象のアーチファクトが把握されます。</p> <p>オプションが設定されていない場合は、製品登録ファイル内のデフォルトのオプション・セットが使用されます。</p> <p>options 属性:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● optionInfo name</li> <li>● value</li> </ul>
optionInfo name	<p>オプション名は、Shared Services の登録ファイルで定義されたオプション名を上書きする場合に使用します。</p> <p><b>例:</b> ExportJobOutput</p>
value	<p>Shared Services の登録ファイルで定義されたオプションの値を上書きするのに使用される値。</p> <p><b>例:</b> TRUE</p>
artifact	<p>この操作で使用されるフィルタ。</p> <p>この要素では次の属性が使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Artifact recursive</li> <li>● parentPath</li> <li>● pattern</li> <li>● type</li> <li>● startDate</li> <li>● endDate</li> </ul> <p>次のことに注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Artifact recursive 属性はオプションです。</li> <li>● parentPath 属性および pattern 属性はすべての製品で必要です。</li> <li>● type 属性は Reporting and Analysis でのみ使用可能です(この属性は XML ファイルに直接設定します)。</li> <li>● startDate 属性および endDate 属性は、変更された日付パラメータをサポートするアーチファクトにのみ適用されます(これらの属性は XML ファイルに直接設定します)。</li> </ul>
Artifact recursive	<p>サブディレクトリに保管されているアーチファクトで操作を行う必要があるかどうか。</p> <p><b>例:</b> TRUE</p>
parentPath	<p>操作対象のアーチファクトまたはデータが保管されている最上位のディレクトリ。各製品で使用されるディレクトリ構造については、このガイドの巻末付録を参照してください。</p> <p><b>注意</b> 親のパス・ディレクトリにアンパサンド(&amp;)文字が含まれている場合は、移行定義ファイルでは&amp;amp;に置き換えます(次の例を参照)。</p>

属性	説明
	<p><b>例:</b> /Data Analysis &amp; Report Creation</p> <p><b>注:</b> Artifact recursive="true"である場合は、このディレクトリ内のサブディレクトリに含まれているすべてのアーチファクトがインポートされます。</p>
type	<p>この属性は Reporting and Analysis にのみ適用できます。</p> <p>インポートする Reporting and Analysis アーチファクトのタイプ。Reporting and Analysis のアーチファクトのタイプについては、<a href="#">付録 D 「Reporting and Analysis とライフサイクル管理」</a>を参照してください。</p> <p><b>例:</b> Financial Reports</p> <p><b>注:</b> この値は XML ファイルに直接設定します。Shared Services Console では設定できません。</p>
pattern	<p>アーチファクトの選択基準。</p> <p>インポートするアーチファクトの名前を指定するか、*(アスタリスク)を使用してフィルタ条件に一致するすべてのアーチファクトをインポートすることを指定します。</p> <p><b>例:</b> *</p>
startDate	<p>日付範囲の開始日。日付範囲(開始と終了の日付)を指定して、この範囲内にある最終変更日付を持つアーチファクトをフィルタします。指定された開始と終了の日付も含まれます。</p> <p><b>例:</b> 2006-01-01</p> <p><b>注:</b> この値は XML ファイルに直接設定します。Shared Services Console では設定できません。</p>
endDate	<p>日付範囲の終了日。</p> <p><b>例:</b> 2006-01-31</p> <p><b>注:</b> この値は XML ファイルに直接設定します。Shared Services Console では設定できません。</p>

## ターゲット要素

ターゲット要素では、この操作の宛先を定義します。タスクごとに1つの宛先を定義する必要があります。

ターゲット要素の属性については[表 8](#)で説明されています。

**表 8** ターゲット属性

属性	説明
options	<p>この操作の処理手順:</p> <p>オプションは製品に固有です。設定可能な宛先のオプションについては、このガイドの巻末付録を参照してください。ソースまたは宛先でオプションを解釈することによって、移行対象のアーチファクトが把握されます。</p> <p>オプションが設定されていない場合は、製品登録ファイル内のデフォルトのオプション・セットが使用されます。</p> <p>options 属性:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● optionInfo name</li> </ul>

属性	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li>value</li> </ul>
optionInfo name	<p>オプション名は、Shared Services の登録ファイルで定義されたオプション名を上書きする場合に使用します。</p> <p><b>例:</b> ExportJobOutput</p>
value	<p>Shared Services の登録ファイルで設定されたオプションの値を上書きするのに使用される値。</p> <p><b>例:</b> TRUE</p>

## ライフサイクル管理ユーティリティの移行プロパティ・ファイル

ライフサイクル管理ユーティリティでは、migration.properties を使用して、ライフサイクル管理ユーティリティでの移行に関するグローバル・パラメータを設定します。

**注:** Shared Services Console での移行用には別の移行プロパティ・ファイルがあります。51 ページの「[Shared Services Console の移行プロパティ・ファイル](#)」を参照してください。

ライフサイクル管理ユーティリティの migration.properties ファイルは、LCM\_HOME/conf ディレクトリにあります(例: HYPERION\_HOME/common/utilities/LCM/9.5.0.0/conf)。

▶ プロパティ・ファイルを更新するには、次の手順に従います:

- 1 コマンド・プロンプト・ウィンドウを開きます。
- 2 ディレクトリを migration.properties がある場所に変更します(例: C:/Hyperion/common/utilities/LCM/9.5.0.0/conf)。
- 3 必要に応じて migration.properties を更新します。
- 4 migration.properties を保存して閉じます。

### サンプルの移行プロパティ・ファイル

```
grouping.size=100
grouping.size_unknown_artifact_count=10000
log.directory=../logs
log.config=../conf/log.xml
report.enabled=Y
report.folder_path=../reports
fileSystem.friendlyNames=true
report.folder_path=../reports
msr.queue.size=200
msr.queue.waittime=60
double-encoding=true
```

```
export.group.count=30
import.group.count=10000
```

表 9 migration.properties の値

プロパティ	説明
grouping.size	移行されるバッチの最大サイズ(MB 単位)。 ライフサイクル管理のアーチファクトの中には、移行定義プロセス中にサイズが定義されたものがあります。これらのアーチファクトは、バッチでエクスポートまたはインポートすることで移行時間を短縮できます。 <b>デフォルト値:</b> 100 <b>注:</b> Planning、Performance Scorecard および Shared Services の場合、最大バッチ・サイズは 2048 (MB)です。
grouping.size_unknown_artifact_count	移行対象のバッチに含められる不明なサイズのアーチファクト(リスト内で依存関係別にグループ化できないアーチファクト)の最大数。 ライフサイクル管理のアーチファクトの中には、移行定義時間までにサイズが定義されないものがあります。これらのアーチファクトは、1つのバッチにできる任意のアーチファクト数を定義することでグループ化できます。 <b>デフォルト値:</b> 10000
log.directory	移行ログ・ファイルが保管されるディレクトリの場所。 <b>デフォルト値:</b> ../logs (LCM_HOME/logs)
log.config	ロギング構成ファイルが保管されるディレクトリの場所。 log.config ファイルでは、エラー・ロギングのレベルや日付のパターンなど、ロギングに必要なすべてのパラメータが指定されます。 ロギング・エラーで使用されるパラメータは、migration.log ディレクトリにある log.properties を使用して識別されます。 <b>デフォルト値:</b> ../conf/log.xml (LCM_HOME/conf/log.xml)
report.enabled	[-estimate] 引数を使用して、提案された移行でのアーチファクトの個数を概算できます。 [-estimate] 引数についての詳細は、65 ページの「ユーティリティの実行」を参照してください。 <b>デフォルト値:</b> Y
report.folder_path	移行ステータスのレポートとアーチファクトの概算レポートが保管されるディレクトリの場所。 <b>デフォルト値:</b> ../reports (LCM_HOME/reports)
fileSystem.friendlyNames	アーチファクトのファイルが拡張名(アーチファクト ID と名前の組合せ)で保管されるかどうかを指定します。値が TRUE に設定されるか、このプロパティが欠落している場合、このファイルのパスは listing.xml 内の path に対応します。値が FALSE に設定されると、listing.xml 内の pathAlias 値が使用されます。



プロパティ	説明
	<p>ファイル・システムの中には、ディレクトリ・パスの深さに制限があるものがあります。稀なケースでは 256 文字より多くの深さを許可しないものがある一方で、4000 文字を許可するものもあります。この制限を越えるディレクトリ構造を持つ特定アプリケーションでは、このプロパティを <code>FALSE</code> に設定することで、ライフサイクル管理エンジンがディレクトリおよびアーチファクトの名前に短い名前(UUID)を使用するようにします。推奨値は <code>TRUE</code> です。</p> <p><b>デフォルト値:</b> <code>TRUE</code></p>
<code>msr.queue.size</code>	<p>移行ステータス・レポートの詳細が更新される前に、移行ステータス・レポートのキューに格納できるレコードの最大数を指定します。たとえば、キュー内のレコード数が 200 を超えると、(次に説明する待機時間の制限に達する前に)レコードは移行ステータス・レポート内で更新されます。</p> <p><b>デフォルト値:</b> 200</p>
<code>msr.queue.waittime</code>	<p>移行ステータス・レポートの詳細で移行ステータス・レポートのキュー内のレコードが更新されるまでの待機時間(秒)を指定します。たとえば、待機時間が 60 を超えると、(前述のサイズ制限に達する前に)レコードは移行ステータス・レポート内で更新されます。</p> <p><b>デフォルト値:</b> 60</p>
<code>double-encoding</code>	<p>Financial Management アプリケーションの移行で UTF-8 エンコードに加えて Base64 エンコードを使用できます。</p> <p>このプロパティは、混在リリース環境で(Financial Management の前のリリースと、Shared Services のこのリリースを使用する場合など)Financial Management の移行を実行する場合にはサポートされません。混在リリース環境で Financial Management アプリケーションの移行を実行する場合は、このプロパティを <code>FALSE</code> に設定します。</p> <p><b>デフォルト値:</b> <code>TRUE</code></p>
<code>export.group.count</code>	<p>移行のトラブルシューティング・シナリオで使用されるメモリー最適化プロパティです。</p> <p><b>デフォルト値:</b> 30</p> <p><b>注:</b> Financial Management は、桁区切り数を内部で処理します。したがって、Financial Management にはデフォルト値は適用されません。</p>
<code>import.group.count</code>	<p>移行のトラブルシューティング・シナリオで使用されるメモリー最適化プロパティです。</p> <p><b>デフォルト値:</b> 10000</p> <p><b>注:</b> Financial Management は、桁区切り数を内部で処理します。したがって、Financial Management にはデフォルト値は適用されません。</p>

## ユーティリティの実行

ライフサイクル管理ユーティリティでは次のオプションが使用可能です。

- 移行定義ファイルの名前を使用する
- 表示されている移行のアーチファクト数を概算する
- サーバーのファイル・システムではなくローカルのファイル・システムの場所に移行する

移行プロセス中に発生するエラーは、log.xml(LCM\_HOME/conf ディレクトリ内)および log.directory プロパティ(migration.properties 内)で定義されます。移行プロセス中にエラーが発生した場合は、エラー・ログを監視して問題を把握する必要があります。

▶ ライフサイクル管理ユーティリティを実行するには、次の手順に従います:

- 1 移行する場合は、宛先環境をバックアップしてください。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。
- 2 コマンド・プロンプト・ウィンドウを開きます。
- 3 ディレクトリを Utility.bat (Windows)または Utility.sh (UNIX)の場所に変更します。たとえば、HYPERION\_HOME/common/utilities/lcm/9.5.0.0/bin です。
- 4 コマンド・プロンプトで次のテキストを入力して、ライフサイクル管理ユーティリティを実行します。

```
Utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml
```

c:/lcm/lcmdefinition.xml は、移行定義ファイルがある場所です。

その他のコマンド・ライン引数:

- 66 ページの「[-estimate]: 移行におけるアーチファクト数を概算する」
- 67 ページの「[-local]: ローカル・ファイル・システム場所に移行する」
- 67 ページの「[-hss url]: Shared Services URL を使用する」
- 68 ページの「[-d]: 検証を延期する」
- 68 ページの「[-f]: タスクを完全に実行する」
- 68 ページの「[-b]: ベース・パスを指定する」

## **[-estimate]: 移行におけるアーチファクト数を概算する**

表示されている移行におけるアーチファクトの数を概算するため、ライフサイクル管理では次のオプションの引数が用意されています:

```
Utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml [-estimate]
```

[-estimate]引数が指定されると、移行定義で指定されているソースまたは宛先(あるいはその両方)と通信することによって、移行されるアーチファクトの数が計算されます。レポートには、移行定義で指定されているタスクごとに、アーチファクトの総数、アーチファクトの累計サイズ、および移行されるアーチファクトとディレクトリのリストが含まれます。このレポートの場所は、migration.properties 内の report.folder\_path プロパティ値を更新することでカスタマイズできます。

## [-local]: ローカル・ファイル・システム場所に移行する

アーチファクトをファイル・システムからファイル・システムに移行する場合、デフォルトでは、ライフサイクル管理はアーチファクトを Shared Services Web アプリケーション・サーバーのコンピュータ上に移行します。

**注：** Shared Services コンピュータのデフォルトのファイル・システムの宛先は、`HYPERION_HOME/common/import_export/username@ProviderName/`です。

サーバーのファイル・システムの場所ではなくローカルのファイル・システムに移行するため、ライフサイクル管理では次のオプションの引数が用意されています：

- `Utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml [-local]` または
- `Utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml [-1]`

`[-local]` 引数または `[-1]` 引数のいずれかを指定すると、ライフサイクル管理ユーティリティは、アーチファクトをローカルのファイル・システム場所に移行します。ローカルのファイル・システムの移行宛先は、ライフサイクル管理ユーティリティの場所 `HYPERION_HOME/common /utilities/LCM/bin` などに相対して決定されます。

宛先ディレクトリは、移行定義ファイルの `ConnectionInfo` で定義されます。サンプルのタグ：

```
<ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/Export"/>
```

たとえば、相対パスが `filePath="/Export"/` で `[-local]` 引数または `[-1]` 引数が指定された場合、アーチファクトは `HYPERION_HOME/common/utilities/LCM/9.5.0.0/bin/Export` に移行されます。

## [-hss url]: Shared Services URL を使用する

Shared Services では、Shared Services URL が移行定義ファイルに保管されなくなりました。かわりに、Hyperion ホームを使用して Shared Services レジストリが検索され、このレジストリを使用して Shared Services が検索されます。これにより、Shared Services の場所が変更された場合または移行定義ファイルがある環境から別の環境に移動された場合でも、このユーティリティによって Shared Services を検出できます。

`[-hss url]` 引数は、Hyperion ホームのかわりに Shared Services URL を使用する場合作るために追加されました：

```
Utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml [-hss url]
```

このパラメータが指定されていない場合は、Hyperion ホームが使用されます。

**注：** ライフサイクル管理ユーティリティは、Shared Services URL を含んでいる前のリリースの移行定義ファイルを実行できます。ただし、これらの定義ファ

イルを現在のリリースの Shared Services にロードした後、再び保存すると、Shared Services URL は除去されます。

## **[-d]: 検証を延期する**

ライフサイクル管理ユーティリティでは、デフォルトでタスクの実行前に、タスクで使用される接続を検証します。ただし、タスクの実行時に作成される特定のアプリケーションは、システムで使用できない場合があります。移行定義ファイルの定義に従い、次のように [-d] コマンド・ライン引数を使用して、タスクで使用される接続の検証を、タスクが実行されるまで延期できます:

```
Utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml [-d]
```

[-d] 引数が指定されていない場合、ライフサイクル管理ユーティリティではタスクの実行を開始する前に、接続を検証します。

## **[-f]: タスクを完全に実行する**

ライフサイクル管理ユーティリティでは、デフォルトで、タスクが失敗した後のタスクを実行しません。次のように [-f] 引数を指定すると、前のタスクが失敗しても、すべてのタスクを順番に実行します:

```
Utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml [-f]
```

## **[-b]: ベース・パスを指定する**

[-local] または [-l] オプションとともに使用すると、[-b] コマンド・ライン引数は、ファイル・システム・パスが設定されている場所に相対するベース・パスを使用するようライフサイクル管理ユーティリティに指示します(ファイル・システムは、すべてのエクスポートとインポートが保管される場所です)。

```
Utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml [-b path]
```

指定されたパスが存在しない場合、ライフサイクル管理で作成されます。パスには、現在の作業ディレクトリに対して絶対パスまたは相対パスを指定できます(また、絶対パスに対して「.」および「..」も含められます)。ベース・パスが指定されていない場合は、ライフサイクル管理ユーティリティが実行されているディレクトリが使用されます(このディレクトリは、ライフサイクル管理ユーティリティが存在するディレクトリとは限りません)。

# 7

## ライフサイクル管理のトラブルシューティング

### この章の内容

ライフサイクル管理のトラブルシューティングについて .....	69
SSL アプリケーションがフリーズする、またはエラーが表示される.....	69
Shared Services URL でサーバーの完全修飾名を使用する .....	69
ライフサイクル管理の移行ウィザードが移行処理中にフリーズする.....	70
ライフサイクル管理のエクスポート・ファイルのパスワードにはカッコ( )を含められない .....	70
エラー・メッセージでインポート・ファイル・フォーマットがサポートされていない .....	70
ライフサイクル管理診断.....	71

## ライフサイクル管理のトラブルシューティングについて

この章には、一般的なライフサイクル管理のトラブルシューティング情報が含まれています。製品固有のライフサイクル管理の問題については、このガイドの巻末にある付録を参照してください。Shared Services のインストールおよび構成に関する問題については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

## SSL アプリケーションがフリーズする、またはエラーが表示される

**問題:** SSL が使用可能なアプリケーションの操作で、セッション中にホスト名の不一致エラーが表示されます。または、移行ステータス・レポートで「処理中」のステータスが表示されたままになります。

**解決策:** クライアントに対して表示されるホスト名が証明書内のホスト名(共通名)と一致することを確認します。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System SSL 構成ガイド』を参照してください。

## Shared Services URL でサーバーの完全修飾名を使用する

**問題:** Shared Services Console を起動できません。

**解決策:** Shared Services Console を起動するときに、URL でサーバーの完全修飾名が使用されていることを確認します。

**間違った例:** `http://user:777/interop/index.jsp`

**正しい例:** `http://server_name:port_number/interop/index.jsp`

**例:** `http://user.myserver.example.com:7777/interop/index.jsp`

## ライフサイクル管理の移行ウィザードが移行処理中にフリーズする

**問題:** Shared Services Console で、移行の実行中に移行ウィザードがフリーズする場合があります。

**解決策:** Internet Explorer のセキュリティ設定で「ページの自動読み込み」を使用可能にします。

▶ Internet Explorer のセキュリティ設定の「ページの自動読み込み」を使用可能にするには、次の手順に従います:

- 1 Internet Explorer を起動します。
- 2 ツールメニューから、インターネット オプションを選択します。
- 3 セキュリティタブをクリックします。
- 4 インターネット Web コンテンツ・ゾーンを選択します。
- 5 レベルのカスタマイズをクリックします。
- 6 その他までスクロールします。
- 7 ページの自動読み込みの下の使用可能オプションを選択します。
- 8 OK をクリックし、もう一度 OK をクリックします。

## ライフサイクル管理のエクスポート・ファイルのパスワードにはカッコ({ })を含められない

**問題:** ライフサイクル管理のエクスポート・ファイルのユーザー・パスワードにカッコ({ })を含めると、エクスポートが失敗します。

**解決策:** ユーザー・パスワードにカッコを使用しないでください。

## エラー・メッセージでインポート・ファイル・フォーマットがサポートされていない

**問題:** 「インポート・ファイル・フォーマットがサポートされません」というエラー・メッセージが表示されます。

**解決策:** 現在のリリースでは、移行定義ファイルに csv ファイル・フォーマットを使用します。以前のリリースでは、css と xml の両方のファイル・フォーマットがサポートされていました。「インポート・ファイル・フォーマットがサポートされません」というエラーは、以前のリリースの css または xml 移行定義が使用されたときに発生します。現在のリリースでは csv ファイルのみがサポートされています。

## ライフサイクル管理診断

**問題:** ライフサイクル管理ユーザーは、移行で問題が発生した際にライフサイクル管理アクティビティを分析する必要があります。

**解決策:** 診断ログを表示するには、次の手順に従います:

- Shared Services Console の移行の場合は、hss-log.xml 構成ファイルの Threshold 値を DEBUG に設定します。hss-log.xml ファイルは、LCM\_HOME/conf ディレクトリ (HYPERION\_HOME/common/utilities/LCM/9.5.0.0/conf など) にあります。
- ライフサイクル管理ユーティリティの移行の場合は、log.xml 構成ファイルの Threshold 値を DEBUG に設定します。log.xml ファイルは、LCM\_HOME/conf ディレクトリ (HYPERION\_HOME/common/utilities/LCM/9.5.0.0/conf など) にあります。

ログは、LCM\_HOME/logs/debug\_timestamp ディレクトリ (HYPERION\_HOME/common/utilities/LCM/9.5.0.0/logs/debug\_22\_01\_2009\_15\_55\_14 など) に書き込まれます。





# A

## 配置メタデータとライフサイクル管理

### この付録の内容

配置メタデータのアーチファクトについて .....	73
配置メタデータの役割の要件 .....	73
配置メタデータの移行の必要条件 .....	74
配置メタデータのアーチファクト・リスト .....	74
配置メタデータの移行オプション .....	75
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	76

## 配置メタデータのアーチファクトについて

ライフサイクル管理は、次の配置メタデータのアーチファクト・タイプを移行する場合に使用します:

- 登録: 任意の環境でアプリケーションの構成情報を編集できるようにする登録アーチファクト(たとえば、製品を非 SSL から SSL に更新する場合は、登録インスタンス・ファイルでコールバック URL を編集する必要があります)。
- Shared Services レジストリ: Oracle Hyperion Shared Services レジストリのアーチファクトにより、レジストリのコンテンツを表示したり、レジストリ・データを編集が可能なファイル・システムにエクスポートして再びインポートしたりできます。

**注意** ある環境から他の環境に配置メタデータのアーチファクトを移行するのにライフサイクル管理を使用しないでください。ライフサイクル管理は、配置メタデータのアーチファクトをファイル・システムにエクスポートする場合に使用します。エクスポート後にテキスト・エディタを使用してアーチファクトを編集したら、ライフサイクル管理を使用して編集済のアーチファクトを Shared Services にインポートしなします。

配置メタデータのアーチファクトについては、74 ページの「[配置メタデータのアーチファクト・リスト](#)」を参照してください。

## 配置メタデータの役割の要件

配置メタデータのライフサイクル管理操作を行うユーザーには、LCM 管理者の役割が割り当てられている必要があります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## 配置メタデータの移行の必要条件

ライフサイクル管理を使用して配置メタデータのアーチファクトを移行する前に、次のアクションを実行する必要があります:

- Shared Services および EPM System 製品をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに LCM 管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理ではアプリケーションからアプリケーションへの直接的な移行はサポートしていません。配置メタデータのアーチファクトはファイル・システム間で移行する必要があります。45 ページの「[Shared Services レジストリ・データの編集](#)」を参照してください。

## 配置メタデータのアーチファクト・リスト

配置メタデータのアーチファクトは、Shared Services Console 内の Foundation アプリケーション・グループに一覧表示されます。配置メタデータのアーチファクトを表示できるのは LCM 管理者のみです。

**注:** Shared Services Console に表示される実際のアーチファクトは、実装ごとに異なります。

ここには次のトピックがあります。

- 74 ページの「[登録アーチファクト・リストについて](#)」
- 75 ページの「[登録アーチファクト](#)」
- 75 ページの「[Shared Services レジストリのアーチファクト](#)」

## 登録アーチファクト・リストについて

登録アーチファクト・リストについては、次のことに注意してください。

- アーチファクト: アーチファクト名
- 説明: アーチファクトの説明
- 最終更新時間: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトがインポートされた時間を反映します。アーチファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。

- 最終更新ユーザー: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーチファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- ファイル・システムで編集可能: 「はい」の場合、アーチファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーチファクトは製品内でのみ編集できます。
- 依存: アーチファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Financial Management のイベントを移行する場合は Financial Management カレンダーのアーチファクトも移行する必要があります。

## 登録アーチファクト

「登録」ディレクトリには、製品、アプリケーションおよびアプリケーション・グループのアーチファクトが含まれます。

表 10 登録アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
製品	EPM System では、Planning や Essbase などのアプリケーション・タイプ。	はい	いいえ	はい: XML	なし
アプリケーション	Shared Services で登録されている EPM System 製品のインスタンス。	はい	いいえ	はい: XML	なし

## Shared Services レジストリのアーチファクト

Shared Services レジストリ・ディレクトリには、Shared Services レジストリのプロパティと以前のリリースからの製品レジストリのアーチファクトが含まれます。

## 配置メタデータの移行オプション

配置メタデータの移行オプションはありません。配置メタデータのアーチファクトは、ファイル・システム間で移行する必要があります。

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

配置メタデータのライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。

# B

## Shared Servicesとライフサイクル管理

### この付録の内容

Shared Services のアーチファクトについて .....	77
Shared Services の役割の要件 .....	77
Shared Services の移行の前提条件.....	78
Shared Services のアーチファクト・リスト .....	78
Shared Services アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関係.....	81
Shared Services ネイティブ・ディレクトリの移行オプション.....	81
Shared Services タスク・フロー移行のエクスポート・オプションとインポート・オプション .....	88
サンプルの移行定義ファイル .....	89
ライフサイクル管理のログ・ファイル.....	91

## Shared Services のアーチファクトについて

次のタイプの Shared Services のアーチファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します。

- **ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ):** Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーチファクトを使用して、ユーザー、グループ、委任リスト、カスタム集約の役割、および割り当てられた役割を移行できます。また、Shared Services Console の製品アプリケーション・グループに個別にリストされる製品固有のセキュリティ・アーチファクト(Planning アクセス権や Essbase フィルタなど)はありません。製品別のアプリケーションのセキュリティ・アーチファクト・リストについては、このガイドの付録を参照してください。
- **タスク・フロー:** Shared Services タスク・フローのアーチファクトを使用して、任意の環境から別の環境へタスク・フローの定義を移行したり、ファイル・システムでタスク・フローを編集したりできます。タスク・フローを使用する EPM System 製品は、Financial Management、Performance Management Architect、および Profitability and Cost Management のみです。

Shared Services のアーチファクト・リストについては、78 ページの「[Shared Services のアーチファクト・リスト](#)」を参照してください。

## Shared Services の役割の要件

Shared Services のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、LCM 管理者の役割が割り当てられている必要があります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## Shared Services の移行の前提条件

ライフサイクル管理を使用して Shared Services アーチファクトを移行する前に、次のアクションを行う必要があります：

- Shared Services および EPM System 製品をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに LCM 管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- タスク・フローとこれに関連付けられたユーザー情報をエクスポートするには、タスク・フローのユーザーは少なくとも一度はタスク・フローのインタフェースにログインしている必要があります。
- Shared Services では、ライフサイクル管理を使用したアプリケーション間の直接の移行はサポートされていません。Shared Services のアーチファクトは、ファイル・システムに移行、またはファイル・システムから移行する必要があります。14 ページの「移行のシナリオ」を参照してください。
- Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーチファクトを移行するときは、ソース・アプリケーションと宛先アプリケーションの名前が一致していることを確認してください。ソースと宛先の名前が違う場合は、次のアクションを行います。
  1. ソース・アプリケーションのアーチファクトをファイル・システムに移行します。
  2. ソース・アプリケーションの csv ファイル(sourceapp.csv など)で、ソース・プロジェクト名を宛先プロジェクト名に置換します。
  3. ファイル名を変更して、宛先アプリケーションの名前を使用します (destinationapp.csv)。
  4. 更新した csv ファイルを、ファイル・システムから宛先アプリケーションに移行します。

## Shared Services のアーチファクト・リスト

Shared Services のアーチファクトは、Shared Services Console の Foundation アプリケーション・グループにリストされています。Foundation アプリケーション・グループの Shared Services アーチファクトを表示できるのは、LCM 管理者のみです。

**注：** Shared Services Console に表示される実際のアーチファクトは、実装ごとに異なります。

ここには次のトピックがあります。

- [79 ページの「アーチファクト・リストについて」](#)
- [79 ページの「ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)のアーチファクト」](#)
- [80 ページの「タスク・フローのアーチファクト」](#)

## アーチファクト・リストについて

アーチファクト・リストについて次のことに注意してください。

- **アーチファクト:** アーチファクト名
- **説明:** アーチファクトの説明
- **最終更新時間:** このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトがインポートされた時間を反映します。アーチファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終更新ユーザー:** このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーチファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能:** 「はい」の場合、アーチファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーチファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存:** アーチファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、**Financial Management** のイベントを移行する場合は **Financial Management** カレンダのアーチファクトも移行する必要があります。

## ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のアーチファクト

ネイティブ・ディレクトリは、Shared Services により使用されるデフォルトの LDAP ベースのユーザー・ディレクトリ (OpenLDAP または Oracle Internet Directory) です。デフォルトの Shared Services 構成では、ネイティブ・ディレクトリとして OpenLDAP が使用されます。

ネイティブ・ディレクトリのディレクトリには、ユーザー、グループ、役割、委任リスト、および割り当てられた役割のアーチファクトが含まれています。

表 11 ネイティブ・ディレクトリのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ユーザー	ユーザーを識別するユーザー・ディレクトリ項目です。	はい	いいえ	はい: CSV	なし
グループ	複数のユーザーに同様の	はい	いいえ	はい: CSV	ユーザー

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	アクセス権を割り当てるためのコンテナです。				
役割	システムのアーチファクトおよび機能にアクセス権を与える権限です。	はい	いいえ	はい: CSV	ユーザー、グループ
委任リスト	委任管理者が管理できるユーザーおよびグループを識別するリストです。	はい	いいえ	はい: CSV	ユーザー、グループ
割り当てられた役割(製品およびアプリケーション別)	プロビジョニング・プロセスでユーザーおよびグループに付与された役割です。	はい	いいえ	はい: CSV	ユーザー、グループ

## タスク・フローのアーチファクト

タスク・フロー・ディレクトリには、Shared Services タスク・フローのアーチファクトが含まれています。

表 12 タスク・フローのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
タスク・フロー	ビジネス・プロセスの自動化を指します。手続きのルールに従って、あるタスクフロー参加者から別の参加者にタスクが渡されます。	はい	いいえ	はい: CSV	ネイティブ・ディレクトリ・ユーザー、ネイティブ・ディレクトリ・グループ



# Shared Services アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関係

Shared Services には製品間のアーチファクト依存関係はありませんが、Performance Management Architect を使用可能な製品を移行する予定の場合は、Shared Services アーチファクトを移行する前に Performance Management Architect アーチファクトを移行する必要があります。

また、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーとグループのアーチファクトも、他のネイティブ・ディレクトリ・アーチファクトと Shared Services タスクフロー・アーチファクトを移行する前に移行する必要があります。

大半の EPM System アプリケーションでは、製品固有のアーチファクトとともに、他の製品からアーチファクトを移行する必要があります。他の製品の製品間のアーチファクトの依存関係の詳細は、各製品の付録を参照してください。

**注：** 複数の EPM System 製品のインポート順序は、[20 ページの「複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート」](#)を参照してください。

## Shared Services ネイティブ・ディレクトリの移行オプション

ここには次のトピックがあります。

- [81 ページの「ネイティブ・ディレクトリの移行エクスポート・オプション」](#)
- [82 ページの「ネイティブ・ディレクトリの移行インポート・オプション」](#)
- [82 ページの「ネイティブ・ディレクトリの CSV ファイル」](#)

### ネイティブ・ディレクトリの移行エクスポート・オプション

次に、Shared Services ネイティブ・ディレクトリのエクスポート・オプションを示します。

- **ネイティブ・ユーザーのフィルタ:** ネイティブ・ユーザーまたは\* (アスタリスク)を使用してフィルタし、フィルタ条件を満たすすべてのアーチファクトを移行します。
- **ネイティブ・グループのフィルタ:** ネイティブ・グループまたは\* (アスタリスク)を使用してフィルタし、フィルタ条件を満たすすべてのアーチファクトを移行します。
- **ネイティブ役割のフィルタ:** ネイティブ役割または\* (アスタリスク)を使用してフィルタし、フィルタ条件を満たすすべてのアーチファクトを移行します。

## ネイティブ・ディレクトリの移行インポート・オプション

次に、Shared Services ネイティブ・ディレクトリのインポート・オプションを示します。

- インポート操作: 次の操作から選択します。
  - 作成
  - 更新
  - 作成/更新
  - 削除

**注:** 非アクティブ化されたネイティブ・ディレクトリのユーザーを削除するには、ユーザーを最初にアクティブ化してから削除する必要があります。

- インポートを停止する前の最大エラー数: インポート・プロセスを停止する前に許可するエラー数を指定します。

## ネイティブ・ディレクトリの CSV ファイル

ネイティブ・ディレクトリのインポートのソース・ファイルは、CSV ファイルです。

CSV ファイル・フォーマットは、カンマで区切られたフィールドを含んだ表データ・フォーマットで、二重引用符で囲まれています。ライフサイクル管理は、Excel 対応の CSV ファイルのみサポートしています。Excel で出力する CSV ファイルは、標準の CSV ファイルとは次のように異なります:

- 前後の空白が大きい
- バック・スラッシュは特殊文字ではなく、エスケープしない
- 引用符で囲まれた文字列の中の引用符は、バック・スラッシュではなく二重引用符でエスケープされる

Excel はデータを CSV フォーマットにする前に変換する

Excel は CSV ファイルで次のような変換を行います。

- タブはシングル・スペースに変換される
- 改行は UNIX の改行("\n")として常に示される
- 12 桁以上の桁数は切り捨てられた科学表記で示される

ライフサイクル管理は、CSV ファイルを次のエンティティに分類します:

- ユーザー
- グループ
- 役割
- Group\_children
- Role\_children

- プロビジョニング
- 委任リスト

各セクションは、エンティティとヘッダーの2つの必須の行により識別されます。エンティティ行は、頭に#(シャープ)文字の付いた事前定義エンティティ名により識別されます。ヘッダー行は、エンティティ行に続きます。ヘッダー行は、カンマで区切られたエンティティの事前定義属性のリストです。

ヘッダー行に表示される属性の順序は重要ではありませんが、ヘッダー行に続くデータ行に表示されるデータは、ヘッダー行が属性を表示する順序と同じである必要があります。データが指定されていない場合は、カンマを使用して値が設定されていないことを示します。エンティティ行、ヘッダー行、およびデータ行には、処理に必要な情報が表示されます。

CSV ファイルで作成、更新、および削除の操作を行うために、次の境界が適用されます。

- ユーザー、グループおよび役割が処理されるのは、一度に1行のデータ・ラインである
- グループ・メンバーは、1つのヘッダーと1つの親グループの下では複数のデータ・ラインが処理される
- 役割メンバーは、1つのヘッダーと1つの親役割の下では複数のデータ・ラインが処理される
- ユーザー・プロビジョニングは、1つのヘッダーと1つのグループまたはユーザーの下では複数のデータ・ラインが処理される

エラー処理は、プロセスの境界に基づいて行われます。プロセスの境界では、1つのエラーは1回の失敗としてカウントされます。

## サンプル CSV ファイル

```
#user
id,provider,login_name,first_name,last_name,description,email,internal_id,password
admin,Native Directory,admin,admin,none,Administrative User,,911,{SHA}**=
MyDemoTest,Native Directory,MyDemoTest,admin,none,Administrative User,-,MyDemoTest222,{SHA}**

#group
id,provider,name,description,internal_id
G1,Native Directory,G1,,39e71be:-4859f:11252e:-8000
WORLD,Native Directory,WORLD,All users are members of this group,611

#group_children
id,group_id,group_provider,user_id,user_provider
G1,CONNECT,orcl,,
G1,,,myUser,orcl

#group_children
id,group_id,group_provider,user_id,user_provider
G2,G1,Native Directory,,

#group_children
id,group_id,group_provider,user_id,user_provider
G2Test,,,,

#group_children
id,group_id,group_provider,user_id,user_provider
```

```
G3,G2,Native Directory,,
#role
id,product_type,name,description
Administrator,HUB-9.0.0,Administrator,Administrators have unrestricted
access
#role_children
id,product_type,role_id,member_product_type
Administrator,HUB-9.0.0,Provisioning Manager,HUB-9.0.0
#provisioning
project_name,application_name,role_id,product_type,user_id,user_provider
,group_id,group_provider
HUB,Global Roles,Administrator,HUB-9.0.0,TestUser1,Native Directory,,
#delegated_list
id,name,description,manager_id,manager_provider,user_id,user_provider,gr
oup_id,group_provider
test2,test2,testDescription,admin,Native Directory,admin,Native
Directory,,
test2,test2,testDescription,admin,Native Directory,,,G2,Native Directory
```

次の属性の説明を含む表です。

- [表 13](#)
- [表 14](#)
- [表 15](#)
- [表 16](#)
- [表 17](#)
- [表 18](#)
- [表 19](#)

インポート用の CSV ファイルの次のユーザー定義を使用して、ネイティブ・ディレクトリにログイン名: Test\_1、名前: New1、姓: User1、説明: Test User、電子メール ID: Test1@example.com、内部 ID: 39e706a46ad531be:-48fd959f:112005bb52e:-8001、および暗号化パスワード: mypwd:を持つユーザー Test\_1 を作成できます。

```
id,provider,login_name,first_name,last_name,description,email,internal_i
d,password
Test_1,,Test_1,New1,User1,Test User,Test1@example.com,
39e706a46ad531be:-48fd959f:112005bb52e:-8001,mypwd
```

**注：** CSV ファイルで指定されているプレーン・テキスト・パスワードは、暗号化されています。

**表 13** ユーザー・エンティティの属性

属性	説明と例
id	ユーザーの ID 例: admin
provider	(オプション)ソース・ユーザー・ディレクトリの名前

属性	説明と例
	例: ネイティブ・ディレクトリ
login_name	ユーザーのログイン名 例: admin
first_name	オプション: ユーザーの名前 例: admin
last_name	オプション: ユーザーの姓 例: なし
description	オプション: ユーザーの説明 例: 管理ユーザー
email	オプション: ユーザーの電子メール・アドレス 例: admin@example.com
internal_id	ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーの自動生成された内部 ID 例: 911
password	ユーザーのパスワード 例: password

インポート用の CSV ファイルの次のグループ定義を使用して、ネイティブ・ディレクトリにグループ ID: WORLD、説明: すべてのユーザーを含む、および内部 ID: 611 を持つ WORLD グループを作成できます。

```
id,provider,name,description, internal_id
WORLD, ,WORLD,Contains all users,611,
```

表 14 グループ・エンティティの属性

属性	説明と例
id	グループの識別子 例: testgroup
provider	グループのソース・ユーザー・ディレクトリ 例: LDAP-West
name	グループ名 例: testgroup
description	オプション: グループの説明 例: テスト・グループ
internal_id	ネイティブ・ディレクトリ・グループの自動生成された内部 ID 例: 911

インポート用の CSV ファイルの次の役割定義を使用して、ネイティブ・ディレクトリに製品 hava-11.1.1 (Reporting and Analysis、バージョン 11.1.1)の役割 ID:

Designer\_rep、役割名:Designer\_rep、および説明:レポート・デザイナの集約役割を作成できます。製品のタイプは、集約役割が属する製品を示します。

```
id,product_type,name,description
Designer_rep,hava-11.1.1,Designer_rep,Report Designer
```

**表 15** 役割エンティティの属性

属性	説明と例
id	役割の識別子 <b>例:</b> 基本ユーザー
product_type	役割が属する製品のタイプ(製品コード-製品のバージョンと指定) <b>例:</b> HBR-4.1.1.1
name	役割名 <b>例:</b> 基本ユーザー
description	(オプション)役割の説明 <b>例:</b> ビジネス・ルールとオブジェクトの開始と表示

インポート用の CSV ファイルの次の子グループ定義を使用して、ネイティブ・ディレクトリにグループ ID: childGp1 を持つネストされたグループ childGp1 を作成できます。このグループのユーザー・メンバーは Test1 です。ユーザーとグループは、両方ともネイティブ・ディレクトリで定義されます。

```
id,group_id,group_provider,user_id,user_provider
childGp1,childGp1,Native Directory,Test1,Native Directory
```

**表 16** Group\_Children エンティティの属性

属性	説明
id	ネストされたグループの識別子 <b>例:</b> test-group
group_id	ネストされたグループの名前 <b>例:</b> test-group
group_provider	グループのソース・ユーザー・ディレクトリ <b>例:</b> ネイティブ・ディレクトリ
user_id	このグループに属するユーザーの一意的 ID <b>例:</b> pturner
user_provider	グループに割り当てられたユーザーのソース・ユーザー・ディレクトリ <b>例:</b> LDAP-West

インポート用の CSV ファイルの次の子役割定義を使用して、ネイティブ・ディレクトリにネストされた役割 Designer\_rep を作成できます。この役割は、製品 hava-11.1.1 (Reporting and Analysis、バージョン 11.1.1)に属しており、ユーザー Test1 に割り当てられています。

id,product\_type,role\_id,member\_product\_type  
Test1,hava-11.1.1,Designer\_rep,hub-11.1.1

表 17 Role\_Children エンティティの属性

属性	説明と例
id	役割が割り当てられているユーザーの一意的 ID 例: Test1
product_type	役割が属する製品のタイプ(製品コード-製品のバージョンと指定) 例: hava-11.1.1
role_id	一意的役割 ID 例: Designer_rep
member_product_type	子役割が属する製品のタイプ(製品コード-製品のバージョンと指定) 例: hava-11.1.1

インポート用の CSV ファイルの次のプロビジョニング定義を使用して、ネイティブ・ディレクトリにアプリケーション・グループ test\_proj に割り当てられているアプリケーション名 Global Roles の役割の割当てを作成できます。役割 ID は Administrator で、これは製品タイプ HUB-11.1.1 に属しています。ネイティブ・ディレクトリで定義されているユーザー Test1 とグループ Group1 は、この役割でプロビジョニングされます。

project\_name,application\_name,role\_id,product\_type,user\_id,user\_provider,group\_id,group\_provider  
HUB,Global Roles,Administrator,HUB-11.1.1,Test1,Native Directory,Group1,Native Directory

表 18 プロビジョニング・エンティティの属性

属性	説明と例
app_id	役割が属するアプリケーション 例: WebAnalysis
product_type	役割が属する製品のタイプ(製品コード-製品のバージョンと指定) 例: hava-11.1.1
role_id	一意的役割 ID 例: Provisioning Manager
user_id	この役割にプロビジョニングされたユーザーの一意的 ID 例: pturner
group_id	この役割にプロビジョニングされたグループの一意的 ID 例: testgroup

インポート用の CSV ファイルの次の委任リスト定義を使用して、リスト ID とリスト名: testlist、および説明: my\_list を持つ委任リストを作成できます。ネイティブ・ディレクトリで定義されたユーザー admin と Test1 は、このリストの委

任管理者です。このリストにより、委任管理者はネイティブ・ディレクトリで定義されたグループ testGroup を管理できます。

```
id,name,description,manager_id,manager_provider,user_id,user_provider,group_id,group_provider
testlist,testlist,my_list,admin,NativeDirectory,,testGroup,NativeDirectory
testlist,testlist,my_list,Test1,NativeDirectory,,testGroup,NativeDirectory
```

**表 19** 委任リスト・エンティティの属性

属性	説明と例
id	リスト ID、通常はリスト名と同じ 例: testlist
name	委任リスト名 例: testlist
description	委任リストの説明 例: my_list
manager_id	リストを管理するユーザーまたはグループの一意の ID。各マネージャは、別の定義で識別されている必要があります。 例: admin
manager_provider	マネージャの勘定科目を保管するユーザー・ディレクトリ 例: ネイティブ・ディレクトリ
user_id	リストのユーザー・メンバーの一意の ID。各メンバーは、別の定義で識別されている必要があります。 例: pturner
manager_provider	ユーザー・メンバーの勘定科目を保管するユーザー・ディレクトリ 例: ネイティブ・ディレクトリ
group_id	リストのメンバーであるグループの一意の ID。各メンバーは、別の定義で識別されている必要があります。 例: myGroup
group_provider	グループの勘定科目を保管するユーザー・ディレクトリ 例: ネイティブ・ディレクトリ

## Shared Services タスク・フロー移行のエクスポート・オプションとインポート・オプション

Shared Services には、タスク・フローに固有のエクスポートまたはインポート・オプションはありませんが、すべてのインポートで、宛先アーチファクトは自動的に上書きされます。



タスク・フローを使用する EPM System 製品は、Financial Management、Performance Management Architect および Profitability and Cost Management です。タスク・フローには、タスク・フローと一緒にエクスポートされる関連付けられたアプリケーションとユーザーがあります。タスク・フローに関連付けられたユーザーがタスク・フローに一度もログインしていない場合は、ライフサイクル管理を使用してタスク・フローがエクスポートされるときにこのユーザーはエクスポートされません。また、タスク・フローのユーザーに複数の役割(読取り、管理または書込み)が割り当てられている場合、最も権限の高い役割のみタスク・フローと一緒にエクスポートされます。たとえば、タスク・フローのユーザーに読取り、書込みおよび管理の役割が割り当てられている場合は、管理役割のみがエクスポートされます。管理役割には自動的に書込みと読取りの役割が含まれるためです。

**注：** 何かの理由でアクセス制御のインポートに失敗した場合は、アーチファクトはデフォルト・ユーザー **admin** としてインポートされます。しかし、デフォルトの **admin** ユーザーのパスワードが **password** ではなくなるため、インポートに失敗します。

タスクフローの詳細は、Financial Management、Performance Management Architect および Profitability and Cost Management の各製品ドキュメントを参照してください。

## サンプルの移行定義ファイル

Shared Services の移行定義ファイルに使用される製品コードは、HUB です。Shared Services のすべてのサンプル移行定義ファイルは、LCM\_HOME/samples に格納されています。

### ファイル・システムへのエクスポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://localhost:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/HSS security"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="HUB"
project="Foundation" application="Shared Services" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
description="Source Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection2">
        <Options>
          <optionInfo name="fileformat" value="csv"/>
          <optionInfo name="userFilter" value="*" />
          <optionInfo name="groupFilter" value="*" />
          <optionInfo name="roleFilter" value="*" />
        </Options>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory">
```

```

pattern="Users"/>
    <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory"
pattern="Roles"/>
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Native Directory/Assigned Roles"
pattern="*/>
    <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory" pattern="Groups"/>
    <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory"
pattern="Delegated Lists"/>
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Taskflows" pattern="*/>
    </Source>
    <Target connection="FileSystem-Connection1">
    </Target>
    </Task>
</Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムからのインポート

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
    <Connections>
        <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://localhost:28080/interop" user="" password=""/>
        <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="HUB"
description="Destination Application" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
project="Foundation" application="Shared Services"/>
        <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection2" type="FileSystem"
filePath="file:/C:\Hyperion\common\import_export\admin@Native Directory\HSS
security" HSSConnection="MyHSS-Connection1" description="Source Application"/>
    </Connections>
    <Tasks>
        <Task seqID="1">
            <Source connection="FileSystem-Connection2">
                <Options/>
                <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory"
pattern="Users"/>
                <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory"
pattern="Roles"/>
                <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory"
pattern="Groups"/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Native Directory/Assigned Roles"
pattern="*/>
                <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory" pattern="Delegated
Lists"/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Taskflows" pattern="*/>
            >
            </Source>
            <Target connection="AppConnection1">
                <Options>
                    <optionInfo name="fileformat" value="csv"/>
                    <optionInfo name="operation" value="create"/>
                    <optionInfo name="maxerrors" value="1000"/>
                </Options>
            </Target>
        </Task>

```

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Shared Services のライフサイクル管理のログ・ファイルは、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。

**注：** 移行に失敗した場合、移行ステータス・レポートにライフサイクル管理エンジンのログ・ファイルへのリンクが示されます。製品のライフサイクル管理のログ・ファイルは、その製品とともに配置されます。





# Essbaseとライフサイクル管理

## この付録の内容

Essbase アーチファクトについて .....	93
Essbase の役割の要件 .....	93
Essbase の移行の前提条件 .....	94
Essbase のアーチファクト・リスト .....	94
移行に関する考慮事項 .....	98
Essbase アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関係 .....	99
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	99
サンプルの移行定義ファイル .....	100
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	102

## Essbase アーチファクトについて

次のタイプの Essbase アーチファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します:

- 代替変数
- 規則ファイル
- 計算スクリプト
- レポート・スクリプト
- Excel ファイル
- ロケーション別名
- セキュリティ・フィルタ

Essbase アーチファクトのリストおよび説明については、94 ページの「Essbase のアーチファクト・リスト」を参照してください。

## Essbase の役割の要件

Essbase のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- サーバー・アクセス
- 計算

- データベース・マネージャ

**注：** Essbase のサーバー・レベルでは、サーバー・アクセスの役割が必要になります。アプリケーション・レベルでは、ソース・アプリケーション・アーチファクトをエクスポートするために計算の役割が必要で、宛先のアプリケーションにインポートするためにデータベース・マネージャの役割が必要になります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## Essbase の移行の前提条件

- Shared Services と Essbase をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者、サーバー・アクセス、計算およびデータベース・マネージャの役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- 各自の要件に最適な移行のシナリオを判別します。14 ページの「[移行のシナリオ](#)」を参照してください。
- Essbase クラシック・アプリケーションの場合は、フィルタを移行する前に、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行する必要があります。44 ページの「[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)」を参照してください。Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーチファクトのリストについては、[付録 B 「Shared Services とライフサイクル管理」](#)を参照してください。

**注：** Planning または Essbase のライフサイクル管理を使用するには、Essbase で従来のセキュリティ・モードではなく、Shared Services ネイティブ・ディレクトリを使用する必要があります。

- Essbase Performance Management Architect アプリケーションの場合は、非次元アーチファクトを移行する前に、最初に Performance Management Architect 次元を移行して「インポート後に配置」する必要があります。Performance Management Architect アーチファクトのリストについては、[付録 G 「Performance Management Architect とライフサイクル管理」](#)を参照してください。

## Essbase のアーチファクト・リスト

Essbase アーチファクト・リストは Shared Services Console の Essbase アプリケーション・グループにリストされます。

**注：** Shared Services Console に表示される実際のアーチファクトは、実装ごとに異なります。

ここには次のトピックがあります。

- [95 ページの「アーチファクト・リストについて」](#)
- [95 ページの「Essbase Server アーチファクト」](#)
- [96 ページの「Essbase アプリケーション・アーチファクト」](#)
- [96 ページの「Essbase データベース・アーチファクト」](#)

## アーチファクト・リストについて

アーチファクト・リストについて次のことに注意してください。

- **アーチファクト:** アーチファクト名
- **説明:** アーチファクトの説明
- **最終更新時間:** このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトがインポートされた時間を反映します。アーチファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終更新ユーザー:** このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーチファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能:** 「はい」の場合、アーチファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーチファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存:** アーチファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Financial Management のイベントを移行する場合は Financial Management カレンダーのアーチファクトも移行する必要があります。

## Essbase Server アーチファクト

Essbase Server ディレクトリには、代替変数アーチファクトが含まれています。

**表 20** Essbase Server アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プレースホルダーです。	いいえ	いいえ	いいえ	なし

## Essbase アプリケーション・アーチファクト

各アプリケーション・ディレクトリ(Demo など)には、アプリケーション固有の代替変数アーチファクトが含まれています。

表 21 Essbase アプリケーション・アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プレースホルダーです。	いいえ	いいえ	いいえ	なし

## Essbase データベース・アーチファクト

各 Essbase アプリケーションには、1 つ以上のデータベース・ディレクトリ(Sample.Basic など)があります。これらのディレクトリには、データベース固有のアーチファクトが含まれています。

表 22 Essbase データベース・アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
規則ファイル	Essbase がデータ・ソースを処理するときにデータ値または次元とメンバー上で行う一連の操作です。	はい	いいえ	いいえ	なし
計算スクリプト	データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。	はい	いいえ	はい: テキスト	なし
レポート・スクリプト	1 つ以上の運用レポートを生成する、Essbase レポート・ライ	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	なし



アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	ター・コマンドを格納したテキスト・ファイルです。				
Excel ファイル	Essbase のセルに関連付けられる外部スプレッドシート・ファイルです。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	なし
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プレースホルダーです。	いいえ	いいえ	いいえ	なし
ロケーション別名	データ・ソースを特定する記述子です。ロケーション別名により、サーバー、アプリケーション、データベース、ユーザー名、およびパスワードが指定されます。ロケーション別名は、DBA のデータベース・レベルで Oracle Essbase Administration Services、ESSCMD、または API を使用して設定されます。	いいえ	いいえ	いいえ	なし
セキュリティ・フィルタ	データ値またはセルに対するセキュリティ・アクセスをコントロールする制限です。	いいえ	いいえ	はい: CSV	Shared Services セキュリティ・アーチファクト
テキスト・ファイル	Essbase キューブにデータをロードするためのテキスト・ファイルです。	はい	いいえ	はい: テキスト	なし

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
データベース・アウトライン	キューブのアウトライン・ファイルです。	はい	いいえ	いいえ	なし

## 移行に関する考慮事項

次のことに注意してください。

- MaxL スクリプト\*.mxl、MaxL\*.msh および MDX スクリプト\*.mdx などの特定のテキスト・ファイルは、ライフサイクル管理を使用して移行できません。
- トリガーはライフサイクル管理を使用して移行できません。かわりに MaxL を使用して移行できます。
- パーティション定義はライフサイクル管理を使用して移行できません。かわりに MaxL を使用して移行できます。
- カスタム定義マクロおよび関数はライフサイクル管理を使用して移行できません。かわりに、MaxL を使用して移行できます。
- データ移行は、ライフサイクル管理ではサポートされていません。
- ライフサイクル管理では、移行する際に宛先で新しいデータベースを作成する必要がないかぎり、BSO アーチファクトから ASO アプリケーションへの移行および ASO アプリケーション・アーチファクトから BSO データベースへの移行は抑制されません。アウトラインにはこの制限があります。
- Essbase プラグインでは、サーバー・レベルの代替変数がサポートされています。
- Essbase 用のライフサイクル管理を使用するには、Essbase が Shared Services モードになっている必要があります。

Essbase では、宛先アプリケーションに関して次の点を考慮する必要があります。

- アプリケーションが Administration Services で定義済である必要があります。
- データベースが存在しない場合、自動的に作成されます。
- データ・ソースと宛先の名前が同じである必要があります。
- キューブが存在せず自動的に作成される場合は、上書きフラグが選択されていなくても、アウトラインは強制的に上書きされます。
- 空のアウトラインが存在する場合は、計算スクリプト・ディレクトリの下にあるアーチファクトのリストには、「デフォルトの計算」アーチファクトは表示されません。

# Essbase アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関係

Essbase アプリケーションをある環境から別の環境(開発環境からテスト環境、またはテスト環境から本番環境)に移行する場合、製品間アーチファクトの依存関係があります。Essbase では、Essbase 固有のアーチファクトと共に、他の製品からアーチファクトを移行する必要があります。

- Essbase クラシック製品間アーチファクト
  - Share Services セキュリティ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)
  - オプション: Reporting and Analysis(Financial Reporting、Web Analysis、および Interactive Reporting)
- Essbase Performance Management Architect の製品間アーチファクトには、次があります。
  - Performance Management Architect
  - Share Services セキュリティ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)
  - オプション: Reporting and Analysis(Financial Reporting、Web Analysis、および Interactive Reporting)

**注：** 複数の EPM System 製品のインポート順序は、20 ページの「複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート」を参照してください。

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

ここには次のトピックがあります。

- [99 ページの「移行のエクスポート・オプション」](#)
- [99 ページの「移行のインポート・オプション」](#)

### 移行のエクスポート・オプション

Essbase には、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

### 移行のインポート・オプション

インポート時に、Essbase アーチファクトは、宛先環境で既存のアーチファクトを置換します。アーチファクトをマージするオプションはありません。

次に、Essbase インポート・オプションを示します。

- アーチファクトを上書き:宛先の場所にあるすべてのアーチファクトを上書きします。
- キューブを再構築: 次のオプションから選択します。
  - キューブ・データを保持: キューブのアウトラインを再構築するときにキューブのデータを保持します。
  - キューブ・データを破棄: キューブのアウトラインを再構築するときにキューブのデータを破棄します。
  - 入力データのみ保持: キューブのアウトラインを再構築するときに入力データのみを保持します。
  - レベル 0 のデータのみを保持: キューブのアウトラインを再構築するときにレベル 0 のデータのみを保持します。

## サンプルの移行定義ファイル

Essbase の移行定義ファイルに使用される製品コードは、ESBAPP です。すべてのサンプル移行定義ファイルは、LCM\_HOME/samples に格納されています。

### アプリケーション間の移行

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://localhost:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="ESBAPP"
description="Destination Application" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
project="Analytic Servers:LCMDEV:1" application="Demo"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="ESBAPP"
project="Analytic Servers:LCMDEV:1" application="Sample" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection2">
        <Options/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases" pattern="*" />
      </Source>
      <Target connection="AppConnection1">
        <Options>
          <optionInfo name="overWriteArtifact" value="false"/>
          <optionInfo name="restructureCube" value="Retain cube data"/>
        </Options>
      </Target>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>
```

### ファイル・システムへのエクスポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
```

```

    <Connections>
      <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://localhost:28080/interop" user="" password=""/>
      <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/Essbase.Sample.Basic"/>
      <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="ESBAPP"
project="Analytic Servers:LCMDEV:1" application="Sample" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application"/>
    </Connections>
    <Tasks>
      <Task seqID="1">
        <Source connection="AppConnection2">
          <Options/>
          <Artifact recursive="false" parentPath="/Databases/Basic" pattern="Basic
outline"/>
          <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Calc scripts"
pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Location
Aliases" pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Rule files"
pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Text files"
pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Report
scripts" pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Substitution
Variables" pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Excel files"
pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Security"
pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Substitution Variables"
pattern="*" />
          </Source>
          <Target connection="FileSystem-Connection1">
          </Target>
        </Task>
      </Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムからのインポート

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://localhost:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="ESBAPP"
description="Destination Application" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
project="Analytic Servers:LCMDEV:1" application="Sample"/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection2" type="FileSystem"
filePath="file:/C:\Hyperion\common\import_export\admin@Native Directory
\Sample.Basic" HSSConnection="MyHSS-Connection1" description="Source Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">

```

```

        <Source connection="FileSystem-Connection2">
            <Options/>
            <Artifact recursive="false" parentPath="/Databases/Basic"
pattern="Basic outline"/>
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Calc scripts"
pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Location
Aliases" pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Rule files"
pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Text files"
pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Report
scripts" pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Substitution
Variables" pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Excel files"
pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases/Basic/Security"
pattern="*" />
            <Artifact recursive="true" parentPath="/Substitution Variables" pattern="*" />
        </Source>
        <Target connection="AppConnection1">
            <Options>
                <optionInfo name="overWriteArtifact" value="false"/>
                <optionInfo name="restructureCube" value="Retain cube data"/>
            </Options>
        </Target>
    </Task>
</Tasks>
</Package>

```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Essbase のライフサイクル管理のログ・ファイルは、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。

**注：** 移行に失敗した場合、移行ステータス・レポートにライフサイクル管理エンジンのログ・ファイルへのリンクが示されます。製品のライフサイクル管理のログ・ファイルは、その製品とともに配置されます。



# Reporting and Analysisとライフサイクル管理

## この付録の内容

Reporting and Analysis のアーチファクトについて .....	103
Reporting and Analysis の役割の要件 .....	103
Reporting and Analysis の移行の必要条件.....	104
Reporting and Analysis のアーチファクト・リスト .....	106
ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis アーチファクトの編集 .....	113
Reporting and Analysis のアーチファクト・タイプ .....	114
Reporting and Analysis アプリケーションの移行および製品間のアーチファクトの依存関係 .....	115
移行におけるエクスポートとインポートのオプション.....	115
移行後のタスク .....	116
サンプルの移行定義ファイル .....	116
トラブルシューティング.....	118

## Reporting and Analysis のアーチファクトについて

ライフサイクル管理は、次の Reporting and Analysis モジュールのリポジトリのコンテンツを移行する場合に使用します:

- Financial Reporting
- Interactive Reporting
- Production Reporting
- Web Analysis

Reporting and Analysis のアーチファクトについては、106 ページの「Reporting and Analysis のアーチファクト・リスト」を参照してください。

## Reporting and Analysis の役割の要件

Reporting and Analysis のライフサイクル管理操作を実行するユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- Reporting and Analysis グローバル管理者

**注：** Reporting and Analysis グローバル管理者の役割は、Financial Reporting のアーチファクトをリリース 9.3.x からエクスポートする場合に必要です。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## Reporting and Analysis の移行の必要条件

ライフサイクル管理を使用してアーチファクトを移行する前に、次のアクションを実行する必要があります：

- Shared Services および Reporting and Analysis をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに LCM 管理者および Reporting and Analysis グローバル管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- Reporting and Analysis では、ライフサイクル管理を使用したアプリケーションからアプリケーションへの直接的な移行はサポートしていません。Reporting and Analysis のアーチファクトは、ファイル・システム間で移行する必要があります。14 ページの「移行のシナリオ」を参照してください。
- Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーチファクト(ユーザー、グループ、役割および割り当てられた役割)を移行します。44 ページの「ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行」を参照してください。
- RSC を使用して、宛先ホストの Production Reporting でのジョブ・サービス・プロパティを構成します。105 ページの「宛先アプリケーションにおける Production Reporting ジョブ・サービス・プロパティの構成」を参照してください。
- Interactive Reporting のジョブにデータ・アクセス・サービスのデータ・ソースを作成します。105 ページの「宛先アプリケーションでの Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのデータ・ソースの作成」を参照してください。
- 宛先アプリケーションで Financial Reporting のデータ・ソースを手動作成します。105 ページの「宛先アプリケーションでの Financial Reporting データ・ソースの作成」を参照してください。
- ライフサイクル管理ユーティリティ 9.3.x を使用して Financial Reporting アーチファクトを移行している場合は、プロパティ・ファイルを Shared Services コンピュータに手動でコピーしてください。106 ページの「Financial Reporting プロパティ・ファイルの Shared Services コンピュータへのコピー(ライフサイクル管理ユーティリティ 9.3.x の場合)」を参照してください。



## 宛先アプリケーションにおける Production Reporting ジョブ・サービス・プロパティの構成

Production Reporting のアーチファクトをインポートする前に、RSC を使用して Production Reporting の宛先ホストのジョブ・サービス・プロパティを構成する必要があります。

- ▶ Production Reporting のジョブ・サービス・プロパティを構成するには、次の手順に従います:
  - 1 HYPERION\_HOME/products/Foundation/workspace/bin/ServiceConfig.bat (Windows)または ServiceConfig.sh (UNIX)を起動します。
  - 2 RSC アイコンをクリックし、GSM アプリケーションにログインします。
  - 3 ジョブ・ファクトリサービスを選択し、プロパティを編集します。
  - 4 PR タブを選択し、適切なタイプの SQR サーバーを追加します。

## 宛先アプリケーションでの Interactive Reporting データ・アクセス・サービスのデータ・ソースの作成

Interactive Reporting ジョブの宛先アプリケーションに、データ・アクセス・サービス(DAS)のデータ・ソースを作成します。

- ▶ Interactive Reporting の DAS データ・ソースを作成するには、次の手順に従います:
  - 1 CMC にログインします。
  - 2 編集する DAS サービスのプロパティを選択します。
  - 3 データ・ソースタブを選択します。
  - 4 適切なデータ・ソースを追加します。

**注：** DAS データ・ソースの名前は、ソース・アプリケーションでの名前と一致している必要があります。名前が一致しない場合、DAS サービスは該当するデータ・ソースを検出できません。これは、その名前が Interactive Reporting 接続ファイル(.oce)で使用されているためです。このファイルは、移行時にも変更されません。

## 宛先アプリケーションでの Financial Reporting データ・ソースの作成

Financial Reporting データ・ソースの移行はサポートされていません。データ・ソースは Financial Reporting のレポートに手動で割り当てる必要があります。

▶ Financial Reporting データ・ソースを作成するには、次の手順に従います:

- 1 Oracle Enterprise Performance Management Workspace, Fusion Edition (エクスペローラ)にログインします。
- 2 ツールメニューで、データベース接続マネージャを選択します。
- 3 Financial Reporting の適切な接続を追加します。

## Financial Reporting プロパティ・ファイルの Shared Services コンピュータへのコピー(ライフサイクル管理ユーティリティ 9.3.x の場合)

ライフサイクル管理ユーティリティ 9.3.x を使用して分散環境で Financial Reporting を移行している場合は、移行を実行する前に任意のプロパティ・ファイルを Shared Services をホストしているコンピュータにコピーする必要があります。

次のファイルを Shared Services をホストしているコンピュータ上の %BIPLUS\_HOME%/lib ディレクトリにコピーします。

- Financial Reporting レポート・サーバーをホストしているコンピュータから:  
%BIPLUS\_HOME%/lib/fr\_global.properties。
- Financial Reporting Web アプリケーションをホストしているコンピュータから:  
%BIPLUS\_HOME%/lib/config.properties。

## Reporting and Analysis のアーチファクト・リスト

Reporting and Analysis のアーチファクトは、Shared Services Console 内の BI+アプリケーション・グループに一覧表示されます。

**注:** Shared Services Console に表示される実際のアーチファクトは、実装ごとに異なります。

ここには次のトピックがあります。

- [107 ページの「アーチファクト・リストについて」](#)
- [107 ページの「物理リソースのアーチファクト」](#)
- [108 ページの「セキュリティのアーチファクト」](#)
- [108 ページの「スケジュール・オブジェクトのアーチファクト」](#)
- [109 ページの「製品プリファレンスのアーチファクト」](#)
- [109 ページの「リポジトリ・オブジェクトのアーチファクト」](#)
- [112 ページの「管理オプションのアーチファクト」](#)

## アーチファクト・リストについて

アーチファクト・リストについて次のことに注意してください。

- アーチファクト: アーチファクト名
- 説明: アーチファクトの説明
- 最終更新時間: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトがインポートされた時間を反映します。アーチファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- 最終更新ユーザー: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーチファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- ファイル・システムで編集可能: 「はい」の場合、アーチファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーチファクトは製品内でのみ編集できます。

**注:** Reporting and Analysis のアーチファクトを編集する場合の考慮事項があります。113 ページの「[ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis アーチファクトの編集](#)」を参照してください。

- 依存: アーチファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、反復タイム・イベントのアーチファクトを移行する場合は、カスタム・カレンダーのアーチファクトも移行する必要があります。

## 物理リソースのアーチファクト

「物理リソース」ディレクトリには、プリンタや出力ディレクトリなどのシステムによって管理されるオブジェクトを表すアーチファクトが含まれています。

表 23 物理リソースのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
定義済のプリンタ	ジョブが実行中の場合に印刷サーバーで使用可能なプリンタ。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし
出力ディレクトリ	エクスポート・ファイルまたは Interactive Reporting のドキュメントを保存するディレクトリ。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし

## セキュリティのアーチファクト

「セキュリティ」ディレクトリには、ユーザー・プリファレンスのアーチファクトが含まれています。

表 24 セキュリティのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ユーザー・プリファレンス	デフォルトの起動オプション。	いいえ	いいえ	はい: XML	関連するリポジトリ・オブジェクト

## スケジュール・オブジェクトのアーチファクト

スケジュール・オブジェクト・ディレクトリには、イベント、カレンダー、ジョブ・スケジュールおよびジョブ・パラメータなどのスケジュール済のオブジェクトを表すアーチファクトが含まれています。

表 25 スケジュール・オブジェクトのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
外部でトリガーされるイベント	ジョブを実行するトリガーです。	はい	はい	はい: XML	なし
反復タイム・イベント	ジョブを実行するトリガーです。	はい	はい	はい: XML	カスタム・カレンダー、外部でトリガーされるイベント
カレンダー	ユーザー定義の期間、およびその関係です。暦年または会計年度は、Q1、Q2、Q3、およびQ4 から構成されます。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし
ジョブのスケジュール	実行するジョブとジョブを実行する時間やジョブ・パラメータ・リストを指定します。	はい	はい	はい: XML	イベント、ジョブ・パラメータ、ジョブ
ジョブ・パラメータ	ジョブ・パラメータには「個人」と「パブリック」の2つがあります。個人	いいえ	はい	はい: XML	ジョブ、物理リソース

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	はその所有者のみがアクセスでき、パブリックはジョブ・パラメータの ACL にアクセス権があるすべてのユーザーがアクセスできます。				

## 製品プリファレンスのアーチファクト

製品プリファレンスのディレクトリには、お気に入り、個人用ページ、サブスクリプションなどの製品プリファレンスを表すアーチファクトが含まれています。

表 26 製品プリファレンスのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
お気に入り	ユーザーが頻繁に使用するドキュメントを特別なメニューに追加できる機能。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし
個人用ページ	リポジトリ情報を参照するための個人用ウィンドウです。表示する情報、およびレイアウトと色を選択します。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし
サブスクリプション	新しいコンテンツに登録できるようにするコントロール。	いいえ	はい	はい: XML	関連するリポジトリ・オブジェクト

## リポジトリ・オブジェクトのアーチファクト

「リポジトリ・オブジェクト」ディレクトリには、フォルダ、サードパーティのコンテンツ、Web Analysis のドキュメント、Financial Reporting のレポート、ブック、バッチ、テキスト、グリッド、イメージ、行と列のテンプレート、Interactive Reporting のドキュメント、Production Reporting のジョブなどの、リポジトリ・オブジェクトを表すアーチファクトが含まれています。

表 27 リポジトリ・オブジェクトのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?*	依存
フォルダ	他のファイルを含んで階層を形成するファイルです。	はい	はい	はい: XML (メタデータのみ)	なし
サード・パーティのコンテンツ	Microsoft Word や Excel などの補助的な製品からインポートされたコンテンツ。	はい	はい	はい: XML <sup>†</sup>	なし
Web Analysis のドキュメント	データ・オブジェクト内のデータ・ソースから戻されたデータの値を表示するドキュメント。複数のデータ・オブジェクトを複数の表示タイプで1つのドキュメントに表示できます。	はい	はい	はい: XML (メタデータのみ)	データベース接続
Financial Reporting のレポート	テキスト・ボックス、イメージ、グリッドおよびチャートなどの動作や外観が事前定義された Financial Reporting ドキュメント。	はい	はい	はい: XML (メタデータのみ)	イメージ
Financial Reporting のブック	同じ種類の Financial Reporting ドキュメントのグループを保持するコンテナ。ブックでは、次元セクションや次元変更を指定できます。	はい	はい	はい: XML (メタデータのみ)	イメージ、関連する Financial Reporting のリポジトリ・オブジェクト
Financial Reporting のバッチ	転送または印刷を目的とした1つのグループにまとめられたファイルの累積。	はい	はい	はい: XML (メタデータのみ)	レポート、関連する Financial Reporting のリポジトリ・オブジェクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能? <sup>a</sup>	依存
Financial Reporting のテキスト	Financial Reporting レポートに関連付けることができるテキスト・オブジェクト。	はい	はい	はい: XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reporting のグリッド	行、列およびページ軸内にデータを抽出するレポート・オブジェクト。	はい	はい	はい: XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reporting のイメージ	グラフィックまたはイメージ・ファイルを含むレポート・オブジェクト。	はい	はい	はい: XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reporting の行と列のテンプレート	グリッド内の行や列に基づいたテンプレート。	はい	はい	はい: XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reporting のデータベース接続 <sup>b</sup>	データ・ソースへの接続に使用する定義とプロパティを保管し、データベース参照を移動可能にして広く使用できるようにするファイルです。	はい	はい	はい: XML (メタデータのみ)	なし
Interactive Reporting のドキュメント	データベースから情報を取得し、情報を分析し、レポートを構築するために作成および使用するファイル。	はい	はい	いいえ <sup>d</sup>	OCE ファイル
Production Reporting のジョブ	出力を生成するために起動できる特別なプロパティを持つドキュメント。	はい	はい	はい: XML	データソース、必要なファイル (データ・ファイル、イメージなど)

<sup>a</sup>大半のリポジトリ・オブジェクト・アーチファクトの場合、ファイル・システム上で編集できるのは、アーチファクト・メタデータのみです(それぞれのオブジェクト・メタデータを含む XML ファイル)。詳細は、113 ページの「[ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis アーチファクトの編集](#)」を参照してください。

†サードパーティ製オブジェクトは、適切なエディタで編集する必要があります。たとえば、.doc ファイルのコンテンツは、Microsoft Word で編集できます(ファイル名を変更してから編集し、名前を元に戻します)。

\*現在のリリースでは Financial Reporting のデータベース接続の移行はサポートされていません。

‡Interactive Reporting ドキュメントのバイナリは、Interactive Reporting クライアントで編集できます(ファイル名を .bgy に変更してから編集し、名前を元に戻す必要があります)が、この方法は使用しないでください。ファイルがそのメタデータと不整合を起こす可能性があるためです。Interactive Reporting ドキュメントの編集は、製品内のみで行うことをお勧めします。

## 管理オプションのアーチファクト

管理オプションのディレクトリには、Production Reporting のデータソースおよび汎用ジョブ構成などの管理上のオプションを表すアーチファクトが含まれています。

**注：** コンピュータに固有のアーチファクトは移行できません。これらのアーチファクトは移行を開始する前に、宛先環境で手動定義する必要があります。

表 28 製品プリファレンスのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Production Reporting データソース	Reporting and Analysis 内の Production Reporting ジョブで使用されるデータソースの定義。データベース接続タイプ (ODBC など)、データベース接続名 (ODBC データソースの名前など) およびオプションの環境変数などとして定義されます。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし
汎用ジョブの構成*	サード・パーティのアプリケーションなど、汎用の Reporting and Analysis ジョブを実行する場合に使用する汎用アプリケーションの定義。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし

\*共通の定義は移行できますが、実行可能ファイルは移行できません。実行可能ファイルは、汎用ジョブを移行した後に汎用ジョブの構成ごとに手動で定義する必要があります。



# ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis アーチファクトの編集

ファイル・システム上で編集するために Reporting and Analysis のアーチファクトをエクスポートする場合、アーチファクトは次のようにエクスポートされます。

- 一般的なオブジェクト(ドキュメント、PDF ファイルなど)、BQY ファイルとジョブ、OCE ファイル、SQR ジョブと汎用ジョブ

編集目的のこれらのファイルは、zip 形式のアーカイブ・ファイルのセットとしてエクスポートされます。zip アーカイブには、オブジェクトのメタデータを含む1つのXMLファイルと、FS リポジトリからの1つ以上のバイナリ・ファイルが含まれます。

これらのファイルを編集するには、次の手順に従います:

1. アーチファクトをエクスポートします。42 ページの「[編集する個々のアーチファクトのエクスポートとインポート](#)」を参照してください。
  2. コンテンツを unzip します。
  3. バイナリ・ファイルの名前を書き留めてから名前を変更することで、オペレーティング・システムで適切なアプリケーションを使用してファイルを展開できるようにします(たとえば、拡張子.BQY を追加します)。
  4. アーチファクトを編集します。
  5. バイナリ・ファイルの名前を手順3で書き留めた元の名前に変更します。
  6. 置換オプションを使用して、編集済のファイルをアーカイブに追加します。
  7. アーカイブを元のアプリケーションにインポートします。43 ページの「[個々のアーチファクトのインポート](#)」を参照してください。
- Financial Reporting のオブジェクト

Financial Reporting のオブジェクトは、これまでに示したオブジェクトと同様にエクスポートされます。編集目的で Financial Reporting オブジェクトをエクスポートすることで生成された zip アーカイブには、メタデータを含む1つのXMLファイルと Reporting and Analysis 内の Financial Reporting を内部的に表すファイルのセットが含まれます。バイナリ表記は平易ではなくユーザーには扱にくいいため、編集できるのはオブジェクトのメタデータのみです。

- Web Analysis のオブジェクト

これらのオブジェクトは、zip 形式で圧縮された XML ファイルとして表示され、Web Analysis アーチファクトのメタデータと実際のコンテンツが含まれます。これらは編集できますが、ファイル・システム上のオブジェクトを操作するツールは提供されていません。また、ファイルが編集され、アプリケーションに戻された後の整合性の維持は保証されていません。

# Reporting and Analysis のアーチファクト・タイプ

ライフサイクル管理ユーティリティでは、アーチファクト・タイプに基づく Reporting and Analysis のアーチファクトの移行をサポートしています。次の表に、Reporting and Analysis の有効なアーチファクト・タイプを示します。

**注：** アーチファクト・タイプのパラメータは、このリリースでは Shared Services Console でも、その他の EPM System 製品でもサポートされていません。アーチファクト・タイプは、ライフサイクル管理ユーティリティでのみの機能です。

**表 29** Reporting and Analysis のアーチファクト・タイプ

アーチファクト	アーチファクト・タイプ
リポジトリのフォルダ(およびそのコンテンツ)	フォルダ RepositoryContent
Web Analysis のドキュメント(レポート)。依存データベース接続を含む	application/hyperion-analyzer-report
Web Analysis のプレゼンテーション。依存ドキュメントとフォルダを含む	application/hyperion-analyzer-presentation
Web Analysis のサードパーティのコンテンツ(ドキュメント、リンク、URL など)	application/hyperion-analyzer-shortcut application/hyperion-analyzer-link
Financial Reporting のレポート	application/hyperion-reports-report application/hyperion-reports-snapshot_report
Financial Reporting のブック(動的およびスナップショット)	application/hyperion-reports-book application/hyperion-reports-snapshot_book
Financial Reporting のバッチ	application/hyperion-reports-batch
Financial Reporting のテキスト・オブジェクト	application/hyperion-reports-text
Financial Reporting のグリッド・オブジェクト	application/hyperion-reports-grid
Financial Reporting のイメージ・オブジェクト	application/hyperion-reports-image
Financial Reporting の行と列のテンプレート	application/hyperion-reports-row_column
Financial Reporting のデータベース接続	application/hyperion-reports-data_source
Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting のドキュメント	application/x-brioquery
Production Reporting のジョブ	application/x-SQR

# Reporting and Analysis アプリケーションの移行および製品間のアーチファクトの依存関係

Reporting and Analysis アプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーチファクトの依存関係が存在します。Reporting and Analysis では、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)のアーチファクトを Reporting and Analysis 固有のアーチファクトとともに移行する必要があります。

**注：** 複数の EPM System 製品のインポート順序は、20 ページの「複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート」を参照してください。

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

ここには次のトピックがあります。

- 115 ページの「移行のエクスポート・オプション」
- 115 ページの「移行のインポート・オプション」

**注：** 以前のリリースでは、Shared Services Console において、Reporting and Analysis 用に「依存アーチファクトを含む」オプションが提供されていました。このオプションは現在は使用不可です。かわりに、必要な依存関係を選択する必要があります(たとえば、以前の移行でインポートされなかった依存オブジェクト)。

### 移行のエクスポート・オプション

Reporting and Analysis のエクスポート・オプション:

- ジョブ出力のエクスポート: このオプションを TRUE に設定すると、ジョブはその出力がエクスポート・フィルタと一致しない場合でも、出力とともにエクスポートされます。デフォルト値は TRUE です。

### 移行のインポート・オプション

インポート時に、Reporting and Analysis アーチファクトは、宛先環境で既存のアーチファクトを置換します。置換は、ソースと宛先(既存)のアーチファクトの最終変更日が異なる場合のみ行われ、それ以外の場合は、インポートと置換は行われません。

Reporting and Analysis のインポート・オプション

- インポートでジョブの出力を除外: このオプションを TRUE に設定すると、インポート・フィルタに一致している場合でもインポートでのすべてのジョブ出力がスキップされます。デフォルト値は FALSE です。

## 移行後のタスク

ライフサイクル管理を使用してアーチファクトを移行した後は、Financial Reporting のオブジェクトごとに Financial Reporting のデータ・ソースの接続を変更する必要があります。

- ▶ Financial Reporting のデータ・ソースの接続を変更するには、次の手順に従います:
  - 1 Oracle Enterprise Performance Management Workspace, Fusion Edition (エクスペローラ)にログインします。
  - 2 ツールメニューから、データベース接続の変更を選択します。
  - 3 適切な Financial Reporting オブジェクトを選択し、OK をクリックします。
  - 4 宛先システムで使用する新しいデータベース接続を選択します。

## サンプルの移行定義ファイル

Reporting and Analysis の移行定義ファイルで使用される製品コードは HAVA です。Reporting and Analysis のサンプルの移行定義ファイルは LCM\_HOME/9.5.0.0/doc にあります。

### ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!-- edited with XMLSPY v5 rel. 4 U (http://www.xmlspy.com) by Dongling Ding
(Hyperion) --><Package name="" description="" xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/
XMLSchema-instance">

  <Credentials user="admin" password="{CSS}MRcYv323uzxGr8rFdvQLcA==" />
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection" type="HSS" description="Hyperion Shared
Service connection" url="http://bi-win2k-6:28080/interop"/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection" type="FileSystem" description="File
System Location" filePath="file:/c:/hss19_beck186/common/utilities/LCM/9.3.1
/eivd/out"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="HAVA"
description="" HSSConnection="MyHSS-Connection" project="Hyperion System 9 BI+"
application="Hyperion
System 9 BI+:bi-win2k-6.hyperion.com:6800::1"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <!-- if multiple tasks, tasks need to be ordered as well-->
    <!-- seqID is optional attribute (default 0); when specified specifies the order
in which artifacts will be exported -->
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection1">
        <!-- the options listed would match some option specified in product
registration -->
        <Options>
          <optionInfo name="exportJobOutput" value="true"/>
        </Options>
      </Source>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>
```

```

<Artifact parentPath="/Repository Objects" type="folder" recursive="true"
pattern="*" startDate="2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>

<Artifact parentPath="/Repository Objects/Sample Content" type=
"application/x-brioquery" recursive="true" pattern="*" startDate=
"2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>
<Artifact parentPath="/Repository Objects/Sample Content" type=
"application/x-SQR" recursive="true" pattern="*" startDate=
"2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>

<Artifact parentPath="/Security" recursive="true" pattern="*" startDate=
"2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>
<Artifact parentPath="/Product Preferences" recursive="true" pattern=
"*" startDate="2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>
<Artifact parentPath="/Schedule Objects" recursive="true" pattern=
"*" startDate="2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>
<Artifact parentPath="/Physical Resources" recursive="true" pattern=
"*" startDate="2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>
</Source>
<Target connection="FileSystem-Connection">
  <Options>
  </Options>
  <Transforms>

  </Transforms>
</Target>
</Task>
</Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムからのインポート

---

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!-- edited with XMLSPY v5 rel. 4 U (http://www.xmlspy.com) by Dongling Ding
(Hyperion) --><Package name="" description="" xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/
XMLSchema-instance">

  <Credentials user="admin" password="{CSS}MRcYv323uzxGr8rFdvQLcA==" />
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection" type="HSS" description="Hyperion Shared
Service connection" url="http://bi-win2k-6:28080/interop"/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection" type="FileSystem" description="File
System Location" filePath="file://c:/hss19_beck186/common/utilities/LCM/9.3.1
/eivd/out"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="HAVA"
description="" HSSConnection="MyHSS-Connection" project="Hyperion System 9 BI+"
application="Hyperion
System 9 BI+:bi-win2k-6.hyperion.com:6800::1"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <!-- if multiple tasks, tasks need to be ordered as well-->
    <!-- seqID is optional attribute (default 0); when specified specifies the order
in
which artifacts will be exported -->

```

```
<Task seqID="1">
  <Source connection="FileSystem-Connection">
    <!-- the options listed would match some option specified in product
    registration -->
    <Options>
    </Options>

    <Artifact parentPath="/Repository Objects" type="folder" recursive="true"
    pattern="*" startDate="2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>

    <Artifact parentPath="/Repository Objects/Sample Content" type=
    "application/x-brioquery" recursive="true" pattern="*" startDate=
    "2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>
    <Artifact parentPath="/Repository Objects/Sample Content" type=
    "application/x-SQR" recursive="true" pattern="*" startDate=
    "2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>

    <Artifact parentPath="/Security" recursive="true" pattern="*" startDate=
    "2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>
    <Artifact parentPath="/Product Preferences" recursive="true" pattern=
    "*" startDate="2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>
    <Artifact parentPath="/Schedule Objects" recursive="true" pattern=
    "*" startDate="2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>
    <Artifact parentPath="/Physical Resources" recursive="true" pattern=
    "*" startDate="2007-03-01" endDate="2007-03-02"/>
  </Source>
  <Target connection="AppConnection1">
    <Options>
      <optionInfo name="excludeJobOutputOnImport" value="true"/>
    </Options>
    <Transforms>

    </Transforms>
  </Target>
</Task>
</Tasks>
</Package>
```

---

## トラブルシューティング

この項には、Reporting and Analysis のライフサイクル管理に関するトラブルシューティングの情報が記載されています。一般的なライフサイクル管理の問題については第7章「[ライフサイクル管理のトラブルシューティング](#)」を、Shared Services のインストールと構成の問題については『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

ここには次のトピックがあります。

- [119 ページの「ライフサイクル管理のログ・ファイル」](#)
- [119 ページの「一般的な問題と解決」](#)

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Reporting and Analysis のライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。

**注：** 移行に失敗した場合、移行ステータス・レポートにライフサイクル管理エンジンのログ・ファイルへのリンクが示されます。製品のライフサイクル管理のログ・ファイルは、その製品とともに配置されます。

## 一般的な問題と解決

表 30 Reporting and Analysis の一般的な問題と解決方法

問題	解決方法
Production Reporting のジョブがインポートされない	Oracle Hyperion(R) SQR(R) Production Reporting のサブサービスが作成されていません。104 ページの「Reporting and Analysis の移行の必要条件」を参照してください。
BQY ファイルが処理されない。BQY ジョブを実行できない	データ・アクセス・サービスのデータ・ソースが作成されていません。104 ページの「Reporting and Analysis の移行の必要条件」を参照してください。
Financial Reporting オブジェクトを展開できない	Financial Reporting のデータ・ソースが宛先アプリケーションに存在しないか、Financial Reporting のデータ・ソースが変更されていません。104 ページの「Reporting and Analysis の移行の必要条件」および 116 ページの「移行後のタスク」を参照してください。
アクセス制御情報がない、所有権情報がない、またはユーザーの個人データがインポートされない	役割の関連付けが欠落しています。Shared Services のネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)アーチファクトが移行されていることを確認してください。104 ページの「Reporting and Analysis の移行の必要条件」を参照してください。







# Financial Managementとライフサイクル管理

## この付録の内容

Financial Management アーチファクトについて.....	121
Financial Management の役割の要件 .....	121
Financial Management 移行の前提条件 .....	122
Financial Management のアーチファクト・リスト .....	123
Financial Management の移行に関する考慮事項.....	130
移行におけるエクスポートとインポートのオプション.....	131
サンプルの移行定義ファイル .....	131
トラブルシューティング.....	133

## Financial Management アーチファクトについて

次のタイプの Financial Management アーチファクトのリポジトリのコンテンツを移行するには、ライフサイクル管理を使用します。

- セキュリティ
- 次元
- フェーズ送信
- ルール
- ドキュメント
- フォーム
- 内部取引
- 仕訳
- メンバー・リスト

Financial Management アーチファクトのリストについては、123 ページの「[Financial Management のアーチファクト・リスト](#)」を参照してください。

## Financial Management の役割の要件

Financial Management のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- アプリケーション管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## Financial Management 移行の前提条件

- Shared Services と Financial Management をインストールして構成し、実行されていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者およびアプリケーション管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- 各自の要件に最適な移行のシナリオを判別します。14 ページの「[移行のシナリオ](#)」を参照してください。
- Financial Management 製品固有のアーチファクトを移行する前に、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ・アーチファクト(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行します。44 ページの「[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)」を参照してください。Shared Services アーチファクトのリストについては、付録 B「[Shared Services とライフサイクル管理](#)」を参照してください。
- 次のセクションの Financial Management アーチファクト移行情報を確認します。
  - 122 ページの「[Financial Management クラシック・アプリケーションの移行](#)」
  - 123 ページの「[Financial Management Performance Management Architect のアプリケーションの移行](#)」
  - 20 ページの「[複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート](#)」

## Financial Management クラシック・アプリケーションの移行

- 移行する前に、アプリケーションをネイティブ Financial Management に作成する必要があります。
- 移行ウィザードを使用して宛先アプリケーションを選択する前に、アプリケーションが存在するか、シェル・アプリケーションを Financial Management に作成する必要があります。
- Financial Management クラシックでは、Financial Management 固有のアーチファクトと共に、他の製品から次のアーチファクトを移行する必要があります。
  - Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)とタスク・フロー
  - Reporting and Analysis(Financial Reporting と Web Analysis)

## Financial Management Performance Management Architect のアプリケーションの移行

- 最初に移行するときは、最初に Performance Management Architect 次元を最初に移行して配置する必要があります。その後、非次元アーチファクトを移行できます。
- Financial Management Performance Management Architect では、Financial Management 固有のアーチファクトと共に、他の製品から次のアーチファクトを移行する必要があります。
  - Performance Management Architect
  - Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)とタスクフロー
  - Calculation Manager
  - Reporting and Analysis(Financial Reporting と Web Analysis)

## Financial Management のアーチファクト・リスト

Financial Management アーチファクトは、Shared Services Console の Financial Management アプリケーション・グループにリストされます。

Performance Management Architect が使用可能になったアプリケーションは、EPMA ノードの下に次元をリストします。その他の非次元アーチファクトはすべて、Financial Management アプリケーション・グループの下にリストされます。

**注：** Shared Services Console に表示される実際のアーチファクトは、実装ごとに異なります。

ここには次のトピックがあります。

- [124 ページの「アーチファクト・リストについて」](#)
- [124 ページの「セキュリティのアーチファクト」](#)
- [124 ページの「次元アーチファクト」](#)
- [126 ページの「フェーズ送信アーチファクト」](#)
- [127 ページの「ルールのアーチファクト」](#)
- [127 ページの「ドキュメント・アーチファクト」](#)
- [128 ページの「フォーム・アーチファクト」](#)
- [128 ページの「会社間アーチファクト」](#)
- [129 ページの「仕訳アーチファクト」](#)
- [130 ページの「メンバー・リストのアーチファクト」](#)

## アーチファクト・リストについて

アーチファクト・リストについて次のことに注意してください。

- アーチファクト: アーチファクト名
- 説明: アーチファクトの説明
- 最終更新時間: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトがインポートされた時間を反映します。アーチファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- 最終更新ユーザー: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーチファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- ファイル・システムで編集可能: 「はい」の場合、アーチファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーチファクトは製品内でのみ編集できます。
- 依存: アーチファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Financial Management のイベントを移行する場合は Financial Management カレンダーのアーチファクトも移行する必要があります。

## セキュリティのアーチファクト

セキュリティ・ディレクトリには、セキュリティ・クラスとセキュリティ・クラスのアクセス・アーチファクトが含まれています。

表 31 セキュリティのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
セキュリティ・クラス	ユーザーのアクセス権を指定する次元メンバーの属性です。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	なし
セキュリティ・クラス・アクセス	セキュリティ・クラスのユーザーに割り当てられた権限です。	いいえ	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス

## 次元アーチファクト

次元ディレクトリには、Scenario、Entity、Account、Period、Year、View、Value、ICP、Custom (最大 4 つまで)、Alias、ConsolMethod、Currency、Appsettings などの次元アーチファクトが含まれています。

表 32 次元アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Scenario	データを分類するための次元です (Actuals、Budget、Forecast1、Forecast2 など)。	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス
エンティティ	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス
Account	高機能の会計を可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は 1 つのみです。	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス
Period	四半期や月などの期間を示す次元です。	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス
Year	データの会計年度や暦年を示す次元です。	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス
View	たとえば、期別、年次累計、および四半期累計などの期間単位などのカレンダーに関する機能の様々なモードを示す次元です。	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス
Value	アプリケーションに保管されている様々なタイプの値を表し、入力通貨、親通貨、調整、および連結の詳細(比例、消去、および貢献の詳細な	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	ど)を含められる次元です。				
ICP	勘定科目に存在するすべての会社間残高を表す次元です。この次元は、Account次元と任意のカスタム次元を組み合わせて使用する予約次元です。	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス
Custom (1 - 4)	ユーザーが作成および定義する次元です。チャンネル、製品、部署、プロジェクト、または地域がカスタム次元になることがあります。	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス
ConsolMethod	メタデータの属性です。	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス
Currency	メタデータの属性です。	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス
Appsettings	メタデータの属性です。	はい	いいえ	はい: XML	セキュリティ・クラス

## フェーズ送信アーチファクト

フェーズ送信ディレクトリには、フェーズ送信アーチファクトが含まれています。

**注：** フェーズ送信アーチファクトを移行するには、ソースと宛先の両方でフェーズ送信を使用可能にしておく必要があります。

表 33 フェーズ送信アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
フェーズ送信	プロセス管理単位のステージを指定します。	はい	いいえ	はい: XML	なし

## ルールのアーチファクト

「ルール」ディレクトリにはルールのアーチファクトが含まれています。

表 34 ルールのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ルール	アプリケーション内のデータの計算を自動化します。	はい	いいえ	はい: XML	次元

## ドキュメント・アーチファクト

ドキュメント・ディレクトリには、フォルダ、タスク・リスト、リンク、カスタム・ドキュメント、データ・エクスプローラ・レポート、および関連コンテンツ・アーチファクトが含まれています。

表 35 ドキュメント・アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
フォルダ	他のファイルを含んで階層を形成するファイルです。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス
タスク・リスト	特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリストです。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス
リンク	リポジトリ・オブジェクトへの参照です。リンクはフォルダ、ファイル、ショートカット、および他のリンクなどの参照に使用できます。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス
カスタム文書	Microsoft Word や Excel ドキュメントなどの、ユーザー定義ドキュメントです。	はい	いいえ	いいえ	セキュリティ・クラス

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
データ・エクスペローラ・レポート	データ・グリッドに含まれている情報を示します。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
関連コンテンツ	レポートなどの別の Oracle 製品のコンテンツへのリンクです。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス

## フォーム・アーチファクト

フォーム・ディレクトリには、Web フォームと Web グリッドのアーチファクトが含まれています。

表 36 フォーム・アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Web フォーム	ユーザーがデータベースにデータを入力できるようにする、Web 上のグリッド表示です。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
Web グリッド	データを入力および表示するためのオブジェクトです。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト

## 会社間アーチファクト

会社間ディレクトリには、会社間取引照合テンプレート、会社間取引理由コード、会社間システム・レポート、会社間取引システム・レポート、勘定科目別に会社間照合、および取引 ID 別に会社間照合などの会社間アーチファクトが含まれています。



表 37 会社間アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
会社間取引照合テンプレート	会社間照合プロセスの一連の事前定義コンポーネントです。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
会社間取引理由コード	会社間取引のステータスの説明です。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	なし
会社間システム・レポート	会社間照合プロセスの情報を表示します。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
会社間取引システム・レポート	会社間取引の情報を表示します。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
勘定科目別に会社間照合	選択した勘定科目別の会社間照合レポートです。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト
取引 ID 別に会社間照合	取引 ID 別の会社間照合レポートです。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト

## 仕訳アーチファクト

仕訳ディレクトリには、仕訳テンプレート、仕訳グループ、および仕訳システム・レポートのアーチファクトが含まれています。

表 38 仕訳アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
仕訳テンプレート	各期間に共通する調整を転記するために使用する仕訳の機能です。たとえば、共通する勘定科目 ID、エンティティ ID、または金額を	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト、仕訳グループ

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	含む標準テンプレートを作成すると、これを多数の通常仕訳の基準として使用できます。				
仕訳グループ	ユーザー定義の要素の1つです。	いいえ	いいえ	はい: テキスト、XML	なし
仕訳システム・レポート	仕訳の情報を表示します。	はい	いいえ	はい: テキスト、XML	セキュリティ・クラス、次元、メンバー・リスト

## メンバー・リストのアーチファクト

メンバー・リスト・ディレクトリには、メンバー・リストのアーチファクトが含まれています。

表 39 メンバー・リストのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
メンバー・リスト	次元のメンバー、関数、他のメンバー・リストを示す名前付きのグループです。システムまたはユーザーにより定義されます。	はい	いいえ	はい: XML	次元

## Financial Management の移行に関する考慮事項

Financial Management の移行に関する考慮事項は、次のとおりです。

- EA テンプレートの移行は、ライフサイクル管理ではサポートされていません。
- お気に入りの移行は、ライフサイクル管理ではサポートされていません。
- データ移行は、ライフサイクル管理ではサポートされていません。
- 「依存アーチファクトを含む」のインポートおよびエクスポート用オプションは使用できなくなりました。必要な依存関係を手動で選択する必要があります。

# 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

ここには次のトピックがあります。

- [131 ページの「移行のエクスポート・オプション」](#)
- [131 ページの「移行のインポート・オプション」](#)

**注：** 従来のリリースでは、Shared Services Console に Financial Management の「依存アーチファクトを含む」オプションが備わっていましたが、このオプションは使用不可になりました。かわりに、必要な依存関係を手動で選択する必要があります。

## 移行のエクスポート・オプション

Financial Management には、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

## 移行のインポート・オプション

インポート時に、次元アーチファクトとフェーズ送信アーチファクトには、宛先環境で既存のアーチファクトを置換またはマージするオプションがあります。その他の Financial Management アーチファクトはいずれも、インポート時に既存のアーチファクトを置換します。

Financial Management のインポート・オプションは次のとおりです：

- 次元のインポート・モード: 次のインポート操作から選択します(次元のみ):
    - 置換: アーチファクトをインポートしたアーチファクトで上書きします。
    - マージ: アーチファクトをインポートしたアーチファクトとマージします。
- 注：** このオプションは、移行で定義されたすべての次元に適用できます。
- フェーズ送信割当てのインポート・モード
    - 置換: アーチファクトをインポートしたアーチファクトで上書きします。
    - マージ: アーチファクトをインポートしたアーチファクトとマージします。

## サンプルの移行定義ファイル

提供されているサンプル定義ファイルは、Financial Management クラシック・アプリケーションの移行用です。Financial Management の移行定義ファイルで使用されている製品コードは HFM で、サンプル・アプリケーションは COMMA です。すべてのサンプル移行定義ファイルは、LCM\_HOME/samples に格納されています。

### アプリケーション間の移行

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>  
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
```

```

<Connections>
  <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
  <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="HFM"
description="Destination Application" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
project="HFM" application="COMMADEV" />
  <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="HFM"
project="HFM" application="COMMADEV" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
description="Source Application" />
</Connections>
<Tasks>
  <Task seqID="1">
    <Source connection="AppConnection2">
      <Options/>
      <Artifact recursive="true" parentPath="/Forms" pattern="*" />
      <Artifact recursive="true" parentPath="/Documents" pattern="*" />
      <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimensions" pattern="*" />
      <Artifact recursive="true" parentPath="/InterCompany" pattern="*" />
      <Artifact recursive="true" parentPath="/Journals" pattern="*" />
      <Artifact recursive="true" parentPath="/Member Lists" pattern="*" />
    </Source>
    <Target connection="AppConnection1">
      <Options>
        <optionInfo name="ImportDimensionMode" value="replace" />
      </Options>
    </Target>
  </Task>
</Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムへのエクスポート

---

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/Comma" />
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="HFM"
project="HFM" application="COMMA" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
description="Source Application" />
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection2">
        <Options/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Forms" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Rules" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Documents" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimensions" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/InterCompany" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Journals" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Member Lists" pattern="*" />
      </Source>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>

```

```
        <Target connection="FileSystem-Connection1">
        </Target>
    </Task>
</Tasks>
</Package>
```

---

## ファイル・システムからのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
    <Connections>
        <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
        <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="HFM"
description="Destination Application" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
project="HFM" application="COMMA"/>
        <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection2" type="FileSystem"
filePath="file:/C:\Hyperion\common\import_export\admin@Native Directory\HFM Comma"
HSSConnection="MyHSS-Connection1" description="Source Application"/>
    </Connections>
    <Tasks>
        <Task seqID="1">
            <Source connection="FileSystem-Connection2">
                <Options/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Forms" pattern="*/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Rules" pattern="*/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Documents" pattern="*/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimensions" pattern="*/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/InterCompany" pattern="*/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Journals" pattern="*/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Member Lists" pattern="*/>
            </Source>
            <Target connection="AppConnection1">
                <Options>
                    <optionInfo name="ImportDimensionMode" value="replace"/>
                </Options>
            </Target>
        </Task>
    </Tasks>
</Package>
```

---

## トラブルシューティング

この項には、Financial Management に関するライフサイクル管理のトラブルシューティング情報が含まれています。ライフサイクル管理の一般的な問題については、[第7章「ライフサイクル管理のトラブルシューティング」](#)を参照してください。Shared Services のインストールおよび構成に関する問題については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

ここには次のトピックがあります。

- [134 ページの「HFMLCService Web サービスの接続と構成の設定」](#)

- 134 ページの「ライフサイクル管理サーバー通信のタイムアウト設定」
- 135 ページの「アーチファクト数の設定」
- 135 ページの「Financial Management と Shared Services のロギング」
- 136 ページの「Financial Management アーチファクトを移行できない」

## HFMLCMService Web サービスの接続と構成の設定

**問題:** LCM Web サービスが正しく実行されており、特定の構成設定が変更されたことを確認する必要があります。

**解決策:** LCM Web サービス(HFMLCMService)は Microsoft IIS Web サーバー内に存在する必要があり、Web.Config 内の executionTimeout プロパティと maxRequestLength プロパティの値が変更されていることを確認する必要があります。

- ▶ HFMLCMService への接続を確認するには、インターネット・ブラウザに次の URL を入力します。

`http://HFMLCM_SERVER/HFMLCMService/LCMWS.asmx`

サービスが正しく実行されている場合は、LCM Web サービス・メソッドの名前を含むページが表示されます。

- ▶ executionTimeout と maxRequestLength の HFMLCMService プロパティを変更するには、次の手順に従います:

- 1 テキスト・エディタで、HYPERION\_HOME/products/FinancialManagement/Web/HFMLCMService の Web.Config を開きます。
- 2 次の行の executionTimeout (秒単位)と maxRequestLength (KB 単位)の値を変更します。

```
<!-- Maximum value allowed is 2GB - Currently set waiting time to
1hours, 1.5GB data transfer-->
    <httpRuntime executionTimeout="3600" maxRequestLength="1572864" />
```

---

**注意** 間違った値で変更すると、HFMLCM Web サービスが失敗する場合があります。

---

- 3 Web.Config を保存して閉じます。
- 4 Microsoft IIS Web サーバーをリセットします(iisreset)。

## ライフサイクル管理サーバー通信のタイムアウト設定

**問題:** ライフサイクル管理サーバー通信のタイムアウトの設定値が小さすぎます。

**解決策:** WSPlugin.properties の HFM.client\_timeout プロパティに高い値(推奨値は 60 以上)が設定されていることを確認してください。このプロパティは、ラ

ライフサイクル管理サーバーが Financial Management のライフサイクル管理 Webservice と通信する時間(秒単位)を制御します。

- ▶ タイムアウト値を設定するには、次の手順に従います:
  - 1 テキスト・エディタで、Shared Services をホストしているコンピュータの `HYPERION_HOME/common/utilities/LCM/9.5.0.0/conf` にある `WSPlugin.properties` を開きます。
  - 2 `HFM.client_timeout` の値を 60 (秒)以上に設定します。
  - 3 `WSPlugin.properties` を保存して閉じます。

## アーチファクト数の設定

**問題:** エクスポート中に `outofmemory` エラーが発生します。

**解決策:** 移行プロパティ・ファイル内の `grouping.size_unknown_artifact_count` プロパティの値を 100 に変更します。このプロパティは、移行するバッチに含まれる、サイズが不明なアーチファクト (リストの依存関係でグループ化できないアーチファクト)の最大数を設定します。

- ▶ アーチファクト数を設定するには、次の手順に従います:
  - 1 テキスト・エディタで、Shared Services をホストしているコンピュータの `HYPERION_HOME/common/utilities/LCM/9.5.0.0/conf` の `migration.properties` を開きます。
  - 2 `grouping.size_unknown_artifact_count` の値を 100 に設定します。
  - 3 移行プロパティ・ファイルを保存して閉じます。

## Financial Management と Shared Services のロギング

**問題:** ロギングと診断が使用可能ではありません。

**解決策:** Financial Management と Shared Services は、すべてのアクティビティを自動的に記録するよう設定して、問題の診断に使用できる監査証跡を提供できます。

---

**注意** ロギングと診断を使用可能にするのは、必要時のみにしてください。これらを使用可能にすると、特に大規模な移行時には、パフォーマンスに影響を及ぼすためです。

---

- ▶ ロギングを有効にしてログを表示するには、次の手順に従います:
  - 1 テキスト・エディタで、`HYPERION_HOME/products/FinancialManagement/Web/HFMLCMSservice/Web.Config` を開きます。
  - 2 `Web.Config` の次のパラメータを設定して、ロギングを使用可能にします。
    - `appSettings`

```
<appSettings>
  <add key="Debug" value="true"></add>
</appSettings>
```

エラーが発生する場合は(再度ロギングを使用可能にしていなくても)、IIS アプリケーションのプール・アカウント(Network Service)に、ログ・ディレクトリへのフル・アクセスが必要です。フル・アクセスがないと、エラーは記録されません。

ログの場所: HYPERION\_HOME/logs/hfm

- LCM\_INPUT\_<任意の8文字>.<任意の3文字>.zip (たとえば、LCM\_INPUT\_4bvpm4g.efs.zip など): Shared Services から Financial Management の場合
  - LCM\_OUTPUT\_<任意の8文字>.<任意の3文字>.zip (たとえば、LCM\_OUTPUT\_jd51rddd.gwe.zip など): Financial Management から Shared Services の場合
- diagnostics

```
<diagnostics>
  <trace enabled="true" input="InputTrace.webinfo"
  output="OutputTrace.webinfo"/>
  <detailedErrors enabled="true"/>
</diagnostics>
```

エラーが発生する場合は(再度ロギングを使用可能にしていなくても)、IIS アプリケーションのプール・アカウント(Network Service)に、ログ・ディレクトリへのフル・アクセスが必要です。フル・アクセスがないと、エラーは記録されません。

ログの場所: HYPERION\_HOME/products/FinancialManagement/Web/HFMLCMSERVICE

- InputTrace.webinfo
- OutputTrace.webinfo

### 3 Web.Config を保存して閉じます。

ライフサイクル管理の Shared Services ログは、HYPERION\_HOME/logs/SharedServices9/SharedServices\_LCM.log に格納されます。

## Financial Management アーチファクトを移行できない

**問題:** Microsoft IIS Web サーバーのアプリケーション・プール ID には適切な権限が必要です。適切な権限がない場合は、移行に失敗し、ライフサイクル管理の移行ステータス・レポートに次のエラー・メッセージが表示されます:

パス 'C:¥Hyperion¥products¥Financial Management¥Web¥HFM¥FileTransfer¥TempSecurityArtifact.sec' へのアクセスが拒否されました。



**注：** エラー・メッセージに表示されるパスは、Financial Management のインストールおよび構成中に指定した Financial Management ファイル転送用のディレクトリ・パスです。

**解決策:** IIS プール ID が、Financial Management のインストールおよび構成中に指定した Financial Management のファイル転送用のディレクトリ・パスに対して、読み取り、書き込みおよび実行の各権限があることを確認します。

▶ Financial Management Web サービスをホストしているコンピュータで、現在構成されている Financial Management のファイル転送用のフォルダ・パスを表示するには、次の手順に従います:

- 1 レジストリ・エディタを開きます(スタート、ファイル名を指定して実行の順にクリックし、`epmsys_registry` と入力して、OK をクリックします)。
- 2 `HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Hyperion Solutions\Hyperion Financial Management\Web` の下にある `FileTransferFolderPath` を表示します。

## Financial Management アーチファクトを Shared Services Console で表示できない

**問題:** Financial Management の IIS ポートが変更され、Shared Services Console でアーチファクトを表示できません。

**解決策:** Financial Management に対して Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータの「Web サーバーの構成」タスクを実行し、レジストリでポートを更新します。





# Planningとライフサイクル管理

## この付録の内容

Planning アーチファクトについて .....	139
Planning の役割の要件 .....	139
Planning の移行の前提条件 .....	140
Planning のアーチファクト・リスト .....	141
移行に関する考慮事項 .....	150
ベスト・プラクティス .....	151
Planning アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関係 .....	152
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	153
サンプルの移行定義ファイル .....	153
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	157

## Planning アーチファクトについて

次のタイプの Planning アーチファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します:

- 構成
- リレーショナル・データ
- グローバル・アーチファクト
- プラン・タイプ
- セキュリティ

Planning のアーチファクト・リストについては、[141 ページ](#)の「[Planning のアーチファクト・リスト](#)」を参照してください。

## Planning の役割の要件

Planning のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- Planning 管理者
- アプリケーション作成者

**注：** ライフサイクル管理のリスト作成、エクスポートおよびインポート操作を実行するには、Planning 管理者の役割が必要です。また、Planning アプリケーションを作成するには、アプリケーション作成者の役割が必要です。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## Planning の移行の前提条件

- Shared Services と Planning をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者、Planning 管理者およびアプリケーション作成者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- タスク・リストの LCM 管理者に読取りアクセス権が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- 各自の要件に最適な移行のシナリオを判別します。14 ページの「移行のシナリオ」を参照してください。
- Planning アプリケーションを移行する前に、Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーチファクト(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行してください。44 ページの「ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行」を参照してください。Shared Services ネイティブ・ディレクトリのアーチファクト・リストについては、付録 B 「Shared Services とライフサイクル管理」を参照してください。

**注：** Planning または Essbase のライフサイクル管理を使用するには、Essbase で従来のセキュリティ・モードではなく、Shared Services ネイティブ・ディレクトリを使用する必要があります。

- Planning クラシック・アプリケーションの移行の場合、移行ウィザードを使用して宛先アプリケーションを選択する前に、アプリケーションが存在するか、シエル・アプリケーションを Planning に作成する必要があります。
- Planning Performance Management Architect アプリケーションの移行の場合、非次元アーチファクトを移行する前に、Performance Management Architect 次元を最初に移行して、「インポートしてから配置」する必要があります。Performance Management Architect アーチファクトのリストについては、付録 G 「Performance Management Architect とライフサイクル管理」を参照してください。
- 次のアプリケーション・レベルのカレンダー・プロパティは、ソースと宛先のアプリケーションで一致する必要があります：
  - 開始年

- 基本期間(12 か月、四半期、カスタムなど)
- 開始月
- 期間次元メンバーは、ソースと宛先のアプリケーションで一致している必要があります。たとえば、ソースの期間次元に Quarter 1 メンバーがある場合、宛先にも Quarter 1 メンバーが存在する必要があります。
- ソースと宛先のプラン・タイプは一致する必要があります(たとえば、ソース・アプリケーションにプラン 1 というプラン・タイプがある場合、宛先アプリケーションにもプラン 1 というプラン・タイプが存在する必要があります)。
- ソースと宛先のプラン・タイプは、同じ順序で割り当てられる必要があります(たとえば、ソース・アプリケーションにプラン 1 とプラン 2 というプラン・タイプがある場合、どちらも宛先アプリケーションでも同じ順序で現れる必要があります)。
- ソースに「単一通貨」アプリケーション・タイプがある場合は、宛先アプリケーションも同じタイプにする必要があります。

## Planning のアーチファクト・リスト

Planning のアーチファクトは、Shared Services Console の Planning アプリケーション・グループにリストされています。

Performance Management Architect を使用可能にしたアプリケーションにより、EPMA ノードの次元がリストされます。その他のすべての非次元アーチファクトは、Planning アプリケーション・グループの下にリストされます。

**注：** Shared Services Console に表示される実際のアーチファクトは、実装ごとに異なります。

ここには次のトピックがあります。

- [141 ページの「アーチファクト・リストについて」](#)
- [142 ページの「構成アーチファクト」](#)
- [143 ページの「リレーショナル・データのアーチファクト」](#)
- [144 ページの「グローバル・アーチファクト」](#)
- [148 ページの「プランのタイプのアーチファクト」](#)
- [150 ページの「セキュリティのアーチファクト」](#)

## アーチファクト・リストについて

アーチファクト・リストについて次のことに注意してください。

- アーチファクト: アーチファクト名
- 説明: アーチファクトの説明

- 最終更新時間: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトがインポートされた時間を反映します。アーチファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- 最終更新ユーザー: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーチファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- ファイル・システムで編集可能: 「はい」の場合、アーチファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーチファクトは製品内でのみ編集できます。
- 依存: アーチファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Financial Management のイベントを移行する場合は Financial Management カレンダーのアーチファクトも移行する必要があります。

## 構成アーチファクト

構成ディレクトリには、ユーザー・プリファレンス、ユーザー変数、および構成プロパティのアーチファクトが含まれています。

表 40 構成アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ユーザー・プリファレンス	ユーザーがアプリケーション、表示、印刷、およびユーザー変数に設定できるプリファレンスです。	いいえ	いいえ	はい: XML	ユーザー変数
ユーザー変数	ユーザーのメンバー選択に基づいて、データ・フォームを動的に配置し、指定されたエンティティのみを表示します。たとえば、Department というユーザー変数を使用すると、特定の部署および従業員を表示できます。	いいえ	いいえ	はい: XML	関連付けられた次元
プロパティ: アプリケーションの設定	ユーザーが、電子メール通知、別名テーブル、および表示オブショ	いいえ	いいえ	はい: XML	なし

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	ンなどのプリファレンスを設定できるようにする機能です。				

## リレーショナル・データのアーチファクト

リレーショナル・データのディレクトリには、プランニング・ユニット、セル・テキスト、テキスト値、勘定科目の注釈、およびサポート詳細のアーチファクトが含まれています。

表 41 リレーショナル・データのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
プランニング・ユニット	シナリオ、バージョン、およびエンティティの交差におけるデータ・スライスです。プラン・データの準備、確認、注釈付け、および承認のための基本単位です。	いいえ	いいえ	はい: XML	Entity、Scenario、および Version の各次元
セル・テキスト	セルに関連付けられたテキストの注釈です。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし
テキスト値	データ型がテキストのセルにデータを保管するテキストです。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし
勘定科目の注釈	プレーン・テキストまたは URL リンクになっている、勘定科目に関連付けられたコメントです。	いいえ	いいえ	はい: XML	Account、Entity、Scenario、および Version の各次元
サポート詳細	セルの値を算出した計算および仮定です。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし

## グローバル・アーチファクト

グローバル・アーチファクトのディレクトリには、代替変数、ビジネス・ルール、Calculation Manager ルールセット、拡散パターン、スマート・リスト、共通次元、為替レート、タスク・リスト、複合フォームおよびカスタム・メニューのアーチファクトが含まれています。

複数のプラン・タイプに関連付けられた標準的な次元が共通次元にリストされません。この項には、関連付けられた属性次元も含まれています。

表 42 グローバル・アーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プレースホルダーです。	いいえ	いいえ	いいえ	なし
ビジネス・ルール: ルール*	必要な一連の結果値を生成するためにアプリケーション内に作成される論理式または式です。	はい	いいえ	はい: XML	なし
ビジネス・ルール: シーケンス*	Oracle Hyperion(R) Business Rules で作成された、順序付けられたビジネス・ルールのグループです。	はい	いいえ	はい: XML	なし
ビジネス・ルール: マクロ*	ビジネス・ルールとシーケンスを記述しているときに他のビジネス・ルールおよびマクロからすばやく参照できる再利用可能なビジネス・ルールの一部です。	はい	いいえ	はい: XML	なし
ビジネス・ルール: グローバル変数*	1 つ以上のビジネス・ルールまたはマクロに使用される変数です。	はい	いいえ	はい: XML	なし



アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ビジネス・ルール: クラスタ*	単一リソースとして動作して、タスクの負荷を共有し、フェイルオーバーのサポートを提供する一連のサーバーまたはデータベースです。システムにおける単一障害点となるサーバーやデータベースを排除します。	はい	いいえ	はい: XML	なし
ビジネス・ルール: プロジェクト*	実装でグループ化された EPM System 製品のインスタンスです。たとえば、Planning プロジェクトには Planning アプリケーション、Essbase キューブ、Financial Reporting サーバー・インスタンスが含まれることがあります。	はい	いいえ	はい: XML	なし
Calculation Manager ルールセット†	同時または連続の計算が可能なルールおよびその他のルール・セットを含むオブジェクト。	はい	はい	はい: XML	なし
拡散パターン	親から子へのデータを分散する方法を判別するカスタム拡散パターンです。パターンは、「一括割当て」および「グリッド分散」メニューから選択できます。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
スマート・リスト <sup>‡</sup>	ユーザーが、データを入力するかわりにセルのデータからアクセスするカスタム・ドロップダウン・リストです。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし
共通次元: 属性 <sup>‡</sup>	次元の一種です。次元のメンバーの属性や特質に基づいて分析できます。共通の標準次元に関連付けられています。	はい	いいえ	はい: XML	なし
共通次元(標準: Account) <sup>‡</sup>	高機能の会計を可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は1つのみです。	はい	いいえ	はい: XML	なし
共通次元(標準: Version) <sup>‡</sup>	データのシナリオのコンテキスト内で使用される、起こりうる結果です。たとえば、Budget - Best Case と Budget - Worst Case では、Budget がシナリオであり、Best Case と Worst Case がバージョンです。	はい	いいえ	はい: XML	なし
共通次元(標準: Currency) <sup>‡</sup>	通貨を示す次元です。	はい	いいえ	はい: XML	なし
共通次元(標準: Entity) <sup>‡</sup>	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。	はい	いいえ	はい: XML	通貨次元は最初にロードされます。

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
共通次元(標準: Year) †	データの会計年度や暦年を示す次元です。	はい	いいえ	はい: XML	なし
共通次元(標準: Scenario) †	データを分類するための次元です (Actuals、Budget、Forecast1、Forecast2 など)。	はい	いいえ	はい: XML	期間および年の次元、為替レート
共通次元(標準: Period) †	四半期や月などの期間を示す次元です。	はい	いいえ	はい: XML	Year
為替レート	ある通貨から別の通貨に変換する際に使用する数値です。たとえば、1米ドルをユーロに変換する場合、為替レートの0.8936に米ドルを乗じます。これにより、1米ドルに相当するユーロは0.8936と算出されます。	はい	いいえ	はい: XML	通貨、期間、および年
タスク・リスト	特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリストです。	はい	いいえ	はい: XML	タスクのタイプがビジネス・ルールである場合は、関連付けられたビジネス・ルールになります。タスクのタイプがデータ・フォームの場合は、関連付けられたデータ・フォームになります。タスクのタイプがワークフローの場合は、プランニング・ユニットになります。

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
複合フォーム	複数のデータ・フォームのメンバーが同時に表示されるため、たとえば、任意のグリッドにデータを入力して結果を確認し(収益の合計など)、別のグリッドで集約できます。	はい	いいえ	はい: XML	関連付けられたデータ・フォームとビジネス・ルールです。
カスタム・メニュー	管理者が作成する企業に固有またはアプリケーションに固有のメニューです。ユーザーはメンバーを右クリックして、メニュー・アイテムを選択し、URL、データ・フォーム、ワークフロー、またはビジネス・ルールを開けます。	はい	いいえ	はい: XML	メニューのタイプがビジネス・ルールの場合は、関連付けられたビジネス・ルールになります。メニューのタイプがワークフローの場合は、プランニング・ユニットになります。

\*HBR がビジネス・ルール・エンジンとして設定されたクラシック・アプリケーションでのみ表示可能です。

† Calculation Manager が Calculation Manager エンジンとして設定されたクラシック・アプリケーションでのみ表示可能です。

‡クラシック・アプリケーションでのみ表示可能です。

## プランのタイプのアーチファクト

プラン・タイプは Planning アプリケーション情報を Essbase データベースに保管するために使用されます。別のデータベースには、アプリケーションの各プラン・タイプのデータが保管されます。また、このデータベースには、アプリケーションの設計、サイズおよびパフォーマンスを最適化するためにこのプラン・タイプに関係した情報が含まれています。デフォルトの Planning プラン・タイプには、プラン 1、プラン 2 およびプラン 3 があります。

プラン・タイプのディレクトリには、属性次元、標準次元、データ・フォーム、ルール・ファイル、計算スクリプト、代替変数および Calculation Manager ルールのアーチファクトが含まれています。

表 43 プランのタイプのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
属性次元*	次元のリスト。次元のメンバーの属性や特質に基づいて分析できます。	はい	いいえ	はい: XML	なし
標準次元*	1つのプラン・タイプに関連付けられている次元のリスト。	はい	いいえ	はい: XML	属性次元(存在する場合)
データ・フォーム	Web ブラウザなどのインタフェースからデータベースにデータを入力でき、データまたは関連テキストを表示して分析できるグリッド表示です。一部の次元メンバー値は固定され、データが特定の視点から表示されます。	はい	いいえ	はい: XML	関連付けられたメニュー、ユーザー変数、ビジネス・ルール、および次元です。
ルール・ファイル	必要な一連の結果値を生成するためにアプリケーション内に作成される論理式または式です。	はい	いいえ	いいえ(はい: Oracle Essbase Administration Services)	なし
計算スクリプト	データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。	はい	いいえ	はい	なし
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・	いいえ	いいえ	いいえ	なし

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	プレースホルダーです。				
Calculation Manager ルール†	コンポーネントでグループ化されたテンプレートと計算を含めることのできるオブジェクト。	はい	はい	はい: XML	なし

\*クラシック・アプリケーションでのみ表示可能です。

† Calculation Manager が Calculation Manager エンジンとして設定されたクラシック・アプリケーションでのみ表示可能です。

## セキュリティのアーチファクト

セキュリティ・ディレクトリには、ユーザーとグループのアクセス権のアーチファクトが含まれています。アクセス権は、リソースに対してユーザーが実行できる一連の操作です。

表 44 セキュリティのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アクセス権: ユーザー	有効なシステム・ユーザーとしてプロビジョニングされた企業の担当者です。	いいえ	いいえ	はい: XML	なし
アクセス権: グループ	複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナです。	はい	いいえ	はい: XML	なし

## 移行に関する考慮事項

Planning アーチファクトの移行に関する考慮事項は、次のとおりです。

- ライフサイクル管理では、Planning のデータ移行はサポートされていません。
- Planning アーチファクトには、フォームには次元の依存関係があるなど、依存関係があるものもあります。ライフサイクル管理では、フォームに必要な次元メンバーのみが移行されるのではなく、すべての次元が移行されます。36 ページの「[アーチファクトの移行](#)」を参照してください。
- ライフサイクル管理での Planning 間の移行操作は、時間がかかります。

- ライフサイクル管理を使用するには、Essbase が Shared Services モードになっている必要があります。
- Essbase アーチファクトおよびビジネス・ルールのアーチファクトは、Planning アプリケーション・ノードの下に表示されます。
- ソース・アプリケーションと宛先アプリケーションのプラン・タイプ、カレンダー、および単一通貨や複数通貨の設定はすべて同じである必要があります。
- 従来のリリースでは、Shared Services Console に Planning の「依存アーチファクトを含める」オプションが備わっていましたが、このオプションは使用できなくなりました。かわりに、必要な依存関係を手動で選択する必要があります。

## ベスト・プラクティス

Planning アプリケーション全体を一度に移行する場合は、ライフサイクル管理により移行のほとんどの依存関係が自動的に扱われますが、アーチファクトを個別に移行する場合は、Planning アーチファクトを次の順序で移行することをお勧めします:

1. Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)
2. 構成プロパティの下でのアプリケーション設定
3. グローバル・アーチファクト:
  - 拡散パターン
  - スマート・リスト
  - 共通次元
  - 為替レート
4. プラン・タイプの下でのすべての標準次元および属性次元
5. 構成:
  - ユーザー変数
  - ユーザー・プリファレンス
6. グローバル・アーチファクトの下での代替変数
7. プラン・タイプ:
  - 代替変数
  - 計算スクリプト
  - ルール・ファイル
  - Calculation Manager ルール
8. グローバル・アーチファクト:
  - ビジネス・ルール
  - カスタム・メニュー
  - Calculation Manager ルール・セット
9. プラン・タイプの下でのデータ・フォーム

10. グローバル・アーチファクト:
  - 複合フォーム
  - タスク・リスト
11. リレーショナル・データ
12. セキュリティの下のアクセス権
13. Reporting and Analysis(Financial Reporting と Web Analysis)

## Planning アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関係

Planning アプリケーションをある環境から別の環境(開発環境からテスト環境、またはテスト環境から本番環境)に移行する場合、ここには製品間アーチファクトの依存関係があります。Planning では、Planning 固有のアーチファクトと共に、他の製品からアーチファクトを移行する必要があります。

- Planning クラシックの製品間アーチファクトには、次があります。
  - Shared Services のネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)
  - Essbase

**注：** Planning アーチファクトと共に表示される Essbase アーチファクトは、ルール・ファイル、計算スクリプト、および代替変数です。

- オプション: Reporting and Analysis (Financial Reporting と Web Analysis)
- Planning Performance Management Architect には、次の製品間アーチファクトが必要です。
  - Performance Management Architect
  - Shared Services のネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)
  - Calculation Manager
  - Reporting and Analysis (Financial Reporting と Oracle Hyperion(R) Web Analysis)

**注：** Essbase アーチファクトは Planning アーチファクトと一緒に表示されます。

**注：** 複数の EPM System 製品のインポート順序は、20 ページの「複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート」を参照してください。



# 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

インポート時に、Planning アーチファクトは、宛先環境で既存のアーチファクトを置換します。インポート時にアーチファクトをマージまたは削除するオプションはありません。Oracle Hyperion(R) Business Rules インポートでは、アーチファクトの置換と更新は行われません。

Planning には、製品固有のエクスポート・オプションおよびインポート・オプションはありません。

**注：** 従来のリリースでは、Shared Services Console に Planning の「依存アーチファクトを含める」オプションが備わっていましたが、このオプションは使用できなくなりました。かわりに、必要な依存関係を手動で選択する必要があります。

## サンプルの移行定義ファイル

ここで提供されているサンプル移行定義ファイルは、Planning クラシック・アプリケーションの移行用です。Planning の移行定義ファイルで使用されている製品コードは HP で、サンプル・アプリケーションは SampApp です。すべてのサンプル移行定義ファイルは、LCM\_HOME/samples に格納されています。

### アプリケーション間の移行

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="HP"
description="Destination Application" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
project="Planning" application="SampTest"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="HP"
project="Planning" application="SampDev" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
description="Source Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection2">
        <Options>
          </Options>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Configuration" pattern="User
Variables"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Configuration" pattern="User
Preferences"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Configuration"
pattern="Properties"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Supporting Detail"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Text Values"/>
      </Source connection>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>
```

```

        <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Planning Units"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Account Annotations"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Cell Texts"/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Smart Lists"
pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Substitution
Variables" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Exchange
Rates" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Spread
Patterns" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Business
Rules" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Custom
Menus" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Common
Dimensions" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Composite
Forms" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Task Lists"
pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Standard
Dimensions" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Calc scripts"
pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Rule files"
pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Attribute
Dimensions" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Data Forms"
pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Substitution
Variables" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*/>
>
    </Source>
    <Target connection="AppConnection1">
    </Target>
    </Task>
</Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムへのエクスポート

---

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
    <Connections>
        <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
        <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="HP"
description="Destination Application" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
project="Planning" application="SampTest"/>
        <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="HP"
project="Planning" application="SampDev" HSSConnection="MyHSS-Connection1"

```

```

description="Source Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection2">
        <Options>
          </Options>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Configuration" pattern="User
Variables"/>
          <Artifact recursive="false" parentPath="/Configuration" pattern="User
Preferences"/>
            <Artifact recursive="false" parentPath="/Configuration"
pattern="Properties"/>
              <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Supporting Detail"/>
                <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Text Values"/>
                  <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Planning Units"/>
                    <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Account Annotations"/>
                      <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Cell Texts"/>
                        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Smart Lists"
pattern="*/>
                          <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Substitution
Variables" pattern="*/>
                            <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Exchange
Rates" pattern="*/>
                              <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Spread
Patterns" pattern="*/>
                                <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Business
Rules" pattern="*/>
                                  <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Custom
Menus" pattern="*/>
                                    <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Common
Dimensions" pattern="*/>
                                      <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Composite
Forms" pattern="*/>
                                        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Task Lists"
pattern="*/>
                                          <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Standard
Dimensions" pattern="*/>
                                            <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Calc scripts"
pattern="*/>
                                              <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Rule files"
pattern="*/>
                                                <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Attribute
Dimensions" pattern="*/>
                                                  <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Data Forms"
pattern="*/>
                                                    <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Substitution
Variables" pattern="*/>
                                                      <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*/>
                                                        </Source>
                                                      <Target connection="AppConnection1">
                                                        </Target>

```

```
</Task>
</Tasks>
</Package>
```

---

## ファイル・システムからのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
filePath="file:/C:\Hyperion\common\import_export\admin@Native Directory
\SampleApplication" HSSConnection="MyHSS-Connection1" description="Source
Application"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="HP"
description="Destination Application" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
project="Planning" application="SampApp"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="FileSystem-Connection1">
        <Options/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Configuration" pattern="User
Variables"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Configuration" pattern="User
Preferences"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Configuration"
pattern="Properties"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Supporting Detail"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Text Values"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Planning Units"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Account Annotations"/>
        <Artifact recursive="false" parentPath="/Relational Data"
pattern="Cell Texts"/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Smart Lists"
pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Substitution
Variables" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Exchange
Rates" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Spread
Patterns" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Business
Rules" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Custom
Menus" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Common
Dimensions" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Composite
Forms" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts/Task Lists"
```

```
pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Standard
Dimensions" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Calc scripts"
pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Rule files"
pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Attribute
Dimensions" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Data Forms"
pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type/Consol/Substitution
Variables" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
</Source>
<Target connection="AppConnection2">
</Target>
</Task>
</Tasks>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Planning のライフサイクル管理のログ・ファイルは、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。

**注：** 移行に失敗した場合、移行ステータス・レポートにライフサイクル管理エンジンのログ・ファイルへのリンクが示されます。製品のライフサイクル管理のログ・ファイルは、その製品とともに配置されます。





# Performance Management Architectとライフサイクル管理

## この付録の内容

Performance Management Architect のアーチファクトについて .....	159
Performance Management Architect の役割の要件 .....	159
Performance Management Architect の移行の必要条件 .....	160
Performance Management Architect のアーチファクト・リスト .....	160
Performance Management Architect の移行に関する考慮事項 .....	168
Performance Management Architect アプリケーションの移行および製品間のアーチファクトの依存関係 .....	169
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	170
サンプルの移行定義ファイル .....	173
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	179

## Performance Management Architect のアーチファクトについて

ライフサイクル管理は、次の Performance Management Architect アーチファクト・タイプのリポジトリのコンテンツを移行する場合に使用します:

- アプリケーション・メタデータ
- 共有次元
- 次元アクセス
- データの同期

Performance Management Architect のアーチファクトについては、[160 ページの「Performance Management Architect のアーチファクト・リスト」](#)を参照してください。

## Performance Management Architect の役割の要件

Performance Management Architect のライフサイクル管理操作を行うユーザーには、LCM 管理者の役割が割り当てられている必要があります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## Performance Management Architect の移行の必要条件

- Shared Services および Performance Management Architect をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに LCM 管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- 各自の要件に最適な移行のシナリオを判別します。14 ページの「[移行のシナリオ](#)」を参照してください。
- Performance Management Architect に固有のアーチファクトを移行する前に、Shared Services のネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)を移行する必要があります。44 ページの「[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)」を参照してください。Shared Services のネイティブ・ディレクトリについては、[付録 B 「Shared Services とライフサイクル管理」](#)を参照してください。

## Performance Management Architect のアーチファクト・リスト

Performance Management Architect アーチファクトは Shared Services Console の Foundation アプリケーション・グループにリストされます。

**注：** Shared Services Console に表示される実際のアーチファクトは、実装ごとに異なります。

ここには次のトピックがあります。

- 160 ページの「[アーチファクト・リストについて](#)」
- 161 ページの「[アプリケーション・メタデータのアーチファクト](#)」
- 166 ページの「[共有次元のアーチファクト](#)」
- 167 ページの「[次元アクセスのアーチファクト](#)」
- 167 ページの「[データ同期のアーチファクト](#)」

### アーチファクト・リストについて

アーチファクト・リストについて次のことに注意してください。

- アーチファクト: アーチファクト名
- 説明: アーチファクトの説明



- 最終更新時間: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトがインポートされた時間を反映します。アーチファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- 最終更新ユーザー: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーチファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- ファイル・システムで編集可能: 「はい」の場合、アーチファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーチファクトは製品内でのみ編集できます。
- 依存: アーチファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Financial Management のイベントを移行する場合は Financial Management カレンダーのアーチファクトも移行する必要があります。

## アプリケーション・メタデータのアーチファクト

「アプリケーション・メタデータ」ディレクトリには、集計アプリケーション、Planning アプリケーション、Essbase アプリケーション、収益性アプリケーションおよび汎用アプリケーションのアーチファクトが含まれています。

表 45 アプリケーション・メタデータのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
集計アプリケーション: 次元: Entity	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。	はい	はい	はい: XML	なし
集計アプリケーション: 次元: Account	高機能の会計を使用可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は1つのみです。	はい	はい	はい: XML	なし
集計アプリケーション: Calculation Manager ルール	コンポーネントでグループ化されたテンプレートと計算を含めることのできるオブジェクト。	はい	はい	はい: XML	なし
集計アプリケーション: Calculation Manager ルール・セット	同時または連続の計算が可能なルールおよびその他のルール・セット	はい	はい	はい: XML	なし

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	トを含むオブジェクト。				
集計アプリケーション: Calculation Manager テンプレート	特定のデータを一貫して取得するように設計された定義済みのフォーマットです。	はい	はい	はい: XML	なし
集計アプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、整数、ブールなどです。	はい	はい	はい: XML	なし
集計アプリケーション: インポート・プロファイル	新しい次元、既存の次元をマージまたは置換するかどうか、および次元のプロパティなどのインポート対象次元に関する重要情報が含まれます。	はい	はい	はい: XML	なし
Planning アプリケーション: 共通次元	選択された Planning アプリケーションのすべての次元を一覧表示します。	はい	はい	はい: XML	なし
Planning アプリケーション: プラン・タイプ: Calculation Manager ルール	コンポーネントでグループ化されたテンプレートと計算を含めることのできるオブジェクト。	はい	はい	はい: XML	なし
Planning アプリケーション: プラン・タイプ: 次元: Entity*	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。	はい	はい	はい: XML	なし

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Planning アプリケーション: プラン・タイプ: 次元: Account	高機能の会計を使用可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は1つのみです。	はい	はい	はい: XML	なし
Planning アプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、整数、ブールなどです。	はい	はい	はい: XML	なし
Planning アプリケーション: インポート・プロファイル	新しい次元、既存の次元をマージまたは置換するかどうか、および次元のプロパティなどのインポート対象次元に関する重要情報が含まれます。	はい	はい	はい: XML	なし
Planning アプリケーション: Calculation Manager ルール・セット	同時または連続の計算が可能なルールおよびその他のルール・セットを含むオブジェクト。	はい	はい	はい: XML	なし
Planning アプリケーション: Calculation Manager テンプレート	1回または複数の計算を実行する定義済みのコンポーネントのセット。	はい	はい	はい: XML	なし
Essbase アプリケーション: 次元: Entity	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。	はい	はい	はい: XML	なし
Essbase アプリケーション	高機能の会計を使用可能に	はい	はい	はい: XML	なし

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ン: 次元: Account	する次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は1つのみです。				
Essbase アプリケーション: Calculation Manager ルール	コンポーネントでグループ化されたテンプレートと計算を含めることのできるオブジェクト。	はい	はい	はい: XML	なし
Essbase アプリケーション: Calculation Manager ルール・セット	同時または連続の計算が可能なルールおよびその他のルール・セットを含むオブジェクト。	はい	はい	はい: XML	なし
Essbase アプリケーション: Calculation Manager テンプレート	1回または複数回の計算を実行する定義済みのコンポーネントのセット。	はい	はい	はい: XML	なし
Essbase アプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、整数、ブールなどです。	はい	はい	はい: XML	なし
Essbase アプリケーション: インポート・プロファイル	新しい次元、既存の次元をマージまたは置換するかどうか、および次元のプロパティなどのインポート対象次元に関する重要情報が含まれます。	はい	はい	はい: XML	なし
収益性アプリケーション: モデル	ドライバ定義、ステージ定義、POV 定義、ドライバ選択、割当て	はい	はい	はい: XML	なし

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	およびアプリケーション・プリファレンスなどの要素を含む XML ファイル。				
汎用アプリケーション: 次元: Entity	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。	はい	はい	はい: XML	なし
汎用アプリケーション: 次元: Account	高機能の会計を使用可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は1つのみです。	はい	はい	はい: XML	なし
汎用アプリケーション: Calculation Manager ルール	コンポーネントでグループ化されたテンプレートと計算を含めることのできるオブジェクト。	はい	はい	はい: XML	なし
汎用アプリケーション: Calculation Manager ルール・セット	同時または連続の計算が可能なルールおよびその他のルール・セットを含むオブジェクト。	はい	はい	はい: XML	なし
汎用アプリケーション: Calculation Manager テンプレート	1回または複数の計算を実行する定義済みのコンポーネントのセット。	はい	はい	はい: XML	なし
汎用アプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、	はい	はい	はい: XML	なし

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	整数、ブールなどです。				
汎用アプリケーション: インポート・プロファイル	新しい次元、既存の次元をマージまたは置換するかどうか、および次元のプロパティなどのインポート対象次元に関する重要情報が含まれます。	はい	はい	はい: XML	なし

\*1 つのプラン・タイプに適用される次元のみが表示されます。すべてのプラン・タイプに適用される次元は、Planning アプリケーションの「共通の次元」に表示されます。

## 共有次元のアーチファクト

「共有次元」ディレクトリには、Entity、Account および Product などの共有次元のアーチファクトが含まれます。

表 46 共有次元のアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
エンティティ	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。	はい	はい	はい: XML	なし
Account	高機能の会計を使用可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は 1 つのみです。	はい	はい	はい: XML	なし
Product	企業によって作られる製品またはサービスを表す次元。製品は、一般に「汎用」タイプの次元として表示されます。	はい	はい	はい: XML	なし

## 次元アクセスのアーチファクト

次元アクセス・ディレクトリには、インポート・ファイルのアーチファクトが含まれます。

表 47 次元アクセスのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
インポート・プロファイル	新しい次元、既存の次元をマージまたは置換するかどうかが、および次元のプロパティなどのインポート対象次元に関する重要情報が含まれます。	はい	はい	はい: XML	なし

## データ同期のアーチファクト

「データの同期」ディレクトリには、同期、マッピング・テーブル、外部のファイル定義およびインタフェース・テーブル定義のアーチファクトが含まれています。

表 48 データ同期のアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
同期	EPM System アプリケーション、インタフェース・テーブルおよび外部ファイル間でデータを同期およびマップできます。	はい	はい	はい: XML	なし
マッピング・テーブル	データ同期で再利用できるマッピング。マッピング・テーブルを作成してある場合は、それらのテーブルを同期に挿入できません。	はい	はい	はい: XML	なし
外部のファイル定義	データ同期でソースとして	はい	はい	はい: XML	なし

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	使用される外部ファイル。				
インタフェース・テーブル定義	外部のシステムから Performance Management Architect にデータおよびメタデータをインポートする際に使用されるデータベース・テーブル。	はい	はい	はい: XML	なし

## Performance Management Architect の移行に関する考慮事項

次元状態が共有またはローカルである宛先のインポート結果は、ソースで選択されたアーチファクトに依存します。考慮事項については、次の表を参照してください。

表 49 共有およびローカル次元の移行に関する考慮事項

ソースの選択	ソース・アプリケーションの次元の状態	宛先のアクション	アプリケーション・プロパティが選択されている場合
アプリケーションのメタデータのみ	ローカル	次元は宛先アプリケーション内に「ローカル」としてインポートされます。次元は作成、マージまたは置換されます。共有次元ライブラリは影響を受けません。	アプリケーション・レベルのプロパティのみが更新される
	共有*	次元は宛先アプリケーション内に「ローカル」としてインポートされます。次元は作成、マージまたは置換されます。共有次元ライブラリは影響を受けません。	アプリケーション・レベルのプロパティのみが更新される
共有次元ライブラリのみ	共有	次元は、宛先の共有次元ライブラリ内で作成、マージまたは置換されます。次元は宛先アプリケーションには含められません。	<ul style="list-style-type: none"> <li>アプリケーションレベルのプロパティが更新される</li> <li>次元は、選択されたアプリケーション内に「共有」として含められる</li> </ul>



ソースの選択	ソース・アプリケーションの次元の状態	宛先のアクション	アプリケーション・プロパティが選択されている場合
			<ul style="list-style-type: none"> <li>アプリケーションに関する次元およびメンバー・レベルの上書きはインポートされます。上書きの内容には、メンバー・フィルタやアプリケーションに固有のプロパティ値が含まれます。</li> </ul>
アプリケーション・メタデータおよび共有次元ライブラリ	ローカル	次元は、宛先の共有次元ライブラリ内で作成、マージまたは置換されます。ソース・アプリケーションの「ローカル」次元は宛先アプリケーションにインポートされます。ローカル次元は作成、マージまたは置換されます。	アプリケーション・レベルのプロパティのみが更新される
	共有*	共有次元ライブラリ内の共有次元は作成、マージまたは置換されます。共有次元の「ローカル」コピーが宛先アプリケーション内にインポートされます。ローカル次元は作成、マージまたは置換されます。	アプリケーション・レベルのプロパティのみが更新される

\*宛先で次元を SHARED として維持するには、共有次元ライブラリから次元をエクスポートする必要があります。アプリケーションの一部としてエクスポートした次元は、LOCAL としてインポートされます。次元を SHARED として保持するには、アプリケーションから共有次元を選択しないでください。ただし、アプリケーション・プロパティを維持または更新する場合は、アプリケーション・プロパティも選択する必要があります。

## Performance Management Architect アプリケーションの移行および製品間のアーチファクトの依存関係

Performance Management Architect アプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーチファクトの依存関係が存在します。Performance Management Architect では、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)のアーチファクトを Performance Management Architect に固有のアーチファクトとともに移行する必要があります。44 ページの「ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行」を参照してください。

**注：** 複数の EPM System 製品のインポート順序は、20 ページの「複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート」を参照してください。

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

ここには次のトピックがあります。

- 170 ページの「移行のエクスポート・オプション」
- 170 ページの「移行のインポート・オプション」

**注：** 以前のリリースでは、Shared Services Console において、Performance Management Architect 用に「依存アーチファクトを含む」オプションが提供されていました。このオプションは現在は使用不可です。かわりに、必要な依存関係を選択する必要があります。

### 移行のエクスポート・オプション

Performance Management Architect には、製品に固有のエクスポート・オプションはありません。

### 移行のインポート・オプション

インポート時に、Performance Management Architect アーチファクトはすべて、宛先環境で既存のアーチファクトを置換します。次元アーチファクトのみが例外で、マージまたは置換のオプションがあります。

Performance Management Architect のインポート・オプション:

- 集計アプリケーション(Financial Management)のプロパティ
  - インポート後に配置: ビューをアプリケーションに配置します。
  - インスタンス名: 移行後にアプリケーションを配置する製品インスタンスの名前。アプリケーションが宛先にすでに配置されている場合は、すでに配置されている現在のインスタンスを指定します。

**注：** 製品インスタンスの定義は製品によって異なります。集計アプリケーション・インスタンスは、Web サーバーと、1つのデータベースと通信する登録済のアプリケーション・サーバーまたはクラスタで構成されます。たとえば、集計インスタンスを、Web サーバーと、集計に使用されるアプリケーション・サーバーまたはクラスタで構成できます。これらはすべて1つのデータベースと通信します。

- アプリケーション・サーバー: インストールの一部として定義されたアプリケーション・サーバー。
- Shared Services プロジェクト: 移行しているアプリケーションの Shared Services プロジェクトを選択します。

- すべてのメタデータとデータを消去: アプリケーション・データベース内のすべての次元メンバー、および対応するデータ、仕訳、内部取引を削除します。
- 参照整合性をチェック: メタデータでデータをチェックして整合性を確認します。問題はログ・ファイルに記録されます。
- **Planning アプリケーション・プロパティ**
  - インポート後に配置: ビューをアプリケーションに配置します。
  - インスタンス名: 移行後にアプリケーションを配置する製品インスタンスの名前。アプリケーションが宛先にすでに配置されている場合は、すでに配置されている現在のインスタンスを指定します。

**注:** 製品インスタンスの定義は製品によって異なります。たとえば、Planning インスタンスは、Planning アプリケーションのグループで構成され、各アプリケーションは、作成時にインスタンスと関連付けられます。関連付けは、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータの「クラスタとアプリケーションの再関連付け」タスクを使用して変更できます。インスタンスは Shared Services で登録されます。

  - Shared Services プロジェクト: 移行しているアプリケーションの Shared Services プロジェクトを選択します。
  - データ・ソース: Essbase アプリケーションまたは Planning アプリケーションのデータソース。
  - アウトラインの作成: ターゲットの Essbase アプリケーションまたは Planning アプリケーションをはじめて作成している場合を選択します。
  - アウトラインのリフレッシュ: ターゲットの Essbase アプリケーションまたは Planning アプリケーションが存在し、アウトラインの更新が必要な場合を選択します。
  - セキュリティ・フィルタの作成: 暗号化されたデータ・ファイル (Essbase.sec) にアクセス権を保管する場合を選択します。アプリケーションのすべてのユーザーにセキュリティ・フィルタを生成するには、このオプションを選択し、「セキュリティ・フィルタの制限を検証」オプションは選択しないでください。
  - 共有メンバーのセキュリティ・フィルタ: 暗号化されたデータ・ファイル (Essbase.sec) にアクセス権を保管する場合を選択します。アプリケーションのすべてのユーザーにセキュリティ・フィルタを生成するには、このオプションを選択し、「セキュリティ・フィルタの制限を検証」オプションは選択しないでください。
  - セキュリティ・フィルタの制限を検証: Essbase セキュリティ・フィルタの行ごとの制限である 64KB を超えているセキュリティ・フィルタを識別します。Essbase セキュリティ・フィルタを作成する前にサイズ制限を越えていないことを確認する場合を選択します。
- **Essbase アプリケーション・プロパティ**
  - インポート後に配置: ビューをアプリケーションに配置します。

- インスタンス名: 移行後にアプリケーションを配置する製品インスタンスの名前。アプリケーションが宛先にすでに配置されている場合は、すでに配置されている現在のインスタンスを指定します。
- アプリケーション・サーバー: インストールの一部として定義されたアプリケーション・サーバー。
- Shared Services プロジェクト: 移行しているアプリケーションの Shared Services プロジェクトを選択します。
- データ・ソース: Essbase アプリケーションまたは Planning アプリケーションのデータソース。
- アウトラインの作成: ターゲットの Essbase アプリケーションまたは Planning アプリケーションをはじめて作成している場合を選択します。
- アウトラインのリフレッシュ: ターゲットの Essbase アプリケーションまたは Planning アプリケーションが存在し、アウトラインの更新が必要な場合を選択します。
- セキュリティ・フィルタの作成: 暗号化されたデータ・ファイル (Essbase.sec) にアクセス権を保管する場合を選択します。
- Profitability and Cost Management アプリケーション・プロパティ
  - インポート後に配置: ビューをアプリケーションに配置します。
  - インスタンス名: 移行後にアプリケーションを配置する製品インスタンスの名前。アプリケーションが宛先にすでに配置されている場合は、すでに配置されている現在のインスタンスを指定します。
  - アプリケーション・サーバー: インストールの一部として定義されたアプリケーション・サーバー。
  - Shared Services プロジェクト: 移行しているアプリケーションの Shared Services プロジェクトを選択します。
  - アウトラインの作成: ターゲットの Essbase アプリケーションまたは Planning アプリケーションをはじめて作成している場合を選択します。
  - アウトラインのリフレッシュ: ターゲットの Essbase アプリケーションまたは Planning アプリケーションが存在し、アウトラインの更新が必要な場合を選択します。
  - セキュリティ・フィルタの作成: 暗号化されたデータ・ファイル (Essbase.sec) にアクセス権を保管する場合を選択します。
- 次元
  - 次元の置換: 宛先の次元とプロパティをソース・インスタンスから抽出されたメタデータに置換します。デフォルト値は「マージ」です。
- Calculation Manager ルール
  - 計算ルールの配置: ターゲット・アプリケーションに計算ルールを配置する場合を選択します。

# サンプルの移行定義ファイル

Performance Management Architect の移行定義ファイルで使用される製品コードは BPMA です。すべてのサンプルの移行定義ファイルは LCM\_HOME/samples にあります。

## ファイル・システムへのエクスポート(Performance Management Architect の例)

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/EPMA"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection2">
        <Options/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Data Synchronization"
pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimensions (Shared)"
pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimension Access" pattern="*/>
      >
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Generic
Application Views" pattern="*/>
      </Source>
      <Target connection="FileSystem-Connection1">
      </Target>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>
```

---

## ファイル・システムからのインポート(Performance Management Architect の例)

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/EPMA"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection2">
        <Options/>

```

```

        <Artifact recursive="true" parentPath="/Data Synchronization"
pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimensions (Shared)"
pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimension Access" pattern="*" />
    >
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Generic
Application Views" pattern="*" />
        </Source>
        <Target connection="FileSystem-Connection1">
            <Options>
                <optionInfo name="replaceDimension" value="false" />
            </Options>
        </Target>
    </Task>
</Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムへのエクスポート(Essbase の例)

---

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
    <Connections>
        <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password="" />
        <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/Essbase" />
        <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application" />
    </Connections>
    <Tasks>
        <Task seqID="1">
            <Source connection="AppConnection2">
                <Options/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Essbase
(BSO) Applications/EssBSO/Essbase (BSO) Application Properties" pattern="*" />
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Essbase
(BSO) Applications/EssBSO/Dimensions" pattern="*" />
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Essbase
(BSO) Applications/EssBSO/Import Profile" pattern="*" />
            </Source>
            <Target connection="FileSystem-Connection1">
            </Target>
        </Task>
    </Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムからのインポート(Essbase の例)

---

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
    <Connections>
        <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password="" />
        <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"

```

```

description="File system connection" filePath="/Essbase"/>
  <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA "
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application"/>
</Connections>
<Tasks>
  <Task seqID="1">
    <Source connection="AppConnection2">
      <Options/>
      <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Essbase
(BSO) Applications/EssBSO/Essbase (BSO) Application Properties" pattern="*" />
      <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Essbase
(BSO) Applications/EssBSO/Dimensions" pattern="*" />
      <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Essbase
(BSO) Applications/EssBSO/Import Profile" pattern="*" />
    </Source>
    <Target connection="FileSystem-Connection1">
      <Options>
        <optionInfo name="replaceDimension" value="false" />
        <optionInfo name="deployAfterImport" value="false" />
        <optionInfo name="instanceName" value="String" />
        <optionInfo name="applicationServer" value="String" />
        <optionInfo name="hssProject" value="String" />
      </Options>
    </Target>
  </Task>
</Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムへのエクスポート(Financial Management の例)

---

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/EPMAComma"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA "
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection2">
        <Options/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Consolidation Application Properties"
pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Dimensions" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Import Profile" pattern="*" />
      </Source>
      <Target connection="FileSystem-Connection1">
    </Target>

```



```
</Task>
</Tasks>
</Package>
```

---

## ファイル・システムからのインポート(Financial Management の例)

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="BPMA"
description="Destination Application" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev"/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection2" type="FileSystem"
HSSConnection="MyHSS-Connection1" filePath="/EPMAComma" description="Source
Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="FileSystem-Connection2">
        <Options/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Consolidation Application Properties"
pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Dimensions" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Import Profile" pattern="*" />
      </Source>
      <Target connection="AppConnection1">
        <Options>
          <optionInfo name="replaceDimension" value="false"/>
          <optionInfo name="deployAfterImport" value="false"/>
          <optionInfo name="instanceName" value="String"/>
          <optionInfo name="applicationServer" value="String"/>
          <optionInfo name="hssProject" value="String"/>
          <optionInfo name="clearAllMetadata" value="false"/>
          <optionInfo name="checkReferentialIntegrity" value="false"/>
        </Options>
      </Target>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>
```

---

## ファイル・システムへのエクスポート(Planning の例)

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/EPMASamp"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" HSSConnection="MyHSS-
```



```

Connection1" description="Source Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection2">
        <Options/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Planning Application Properties" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Plan Types" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Common Dimensions" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Import Profile" pattern="*" />
      </Source>
      <Target connection="FileSystem-Connection1">
      </Target>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムからのインポート(Planning の例)

---

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password="" />
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
HSSConnection="MyHSS-Connection1" filePath="/EPMASamp" description="Source
Application" />
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA"
description="Destination Application" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" />
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="FileSystem-Connection1">
        <Options/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Planning Application Properties" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Plan Types" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Common Dimensions" pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Import Profile" pattern="*" />
      </Source>
      <Target connection="AppConnection2">
        <Options>
          <optionInfo name="replaceDimension" value="false" />
          <optionInfo name="deployAfterImport" value="false" />
          <optionInfo name="instanceName" value="String" />
          <optionInfo name="applicationServer" value="String" />
          <optionInfo name="hssProject" value="String" />
          <optionInfo name="dataSource" value="String" />
        </Options>
      </Target>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>

```

```

        <optionInfo name="createOutline" value="false"/>
        <optionInfo name="refreshOutline" value="false"/>
        <optionInfo name="createSecurityFilters" value="false"/>
        <optionInfo name="sharedMemberSecurityFilters" value="false"/>
        <optionInfo name="validateSecurityFilterLimit" value="false"/>
    </Options>
</Target>
</Task>
</Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムへのエクスポート(Profitability and Cost Management の例)

---

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
    <Connections>
        <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
        <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/HPCMapp"/>
        <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application"/>
    </Connections>
    <Tasks>
        <Task seqID="1">
            <Source connection="AppConnection2">
                <Options/>
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Profitability Applications/HPCM/Dimensions" pattern="*" />
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Profitability Applications/HPCM/Profitability Application Properties" pattern="*" />
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Profitability Applications/HPCM/Import Profile" pattern="*" />
            </Source>
            <Target connection="FileSystem-Connection1">
            </Target>
        </Task>
    </Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムからのインポート(Profitability and Cost Management の例)

---

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
    <Connections>
        <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
        <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="BPMA"
description="Destination Application" HSSConnection="MyHSS-Connection1"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev"/>
        <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection2" type="FileSystem"
HSSConnection="MyHSS-Connection1" filePath="/HPCMapp" description="Source
Application"/>
    </Connections>
    <Tasks>
        <Task seqID="1">

```

```
<Source connection="FileSystem-Connection2">
  <Options/>
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Profitability Applications/HPCM/Dimensions" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Profitability Applications/HPCM/Profitability Application Properties" pattern="*" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Profitability Applications/HPCM/Import Profile" pattern="*" />
</Source>
<Target connection="AppConnection1">
  <Options>
    <optionInfo name="replaceDimension" value="false" />
    <optionInfo name="deployAfterImport" value="false" />
    <optionInfo name="instanceName" value="String" />
    <optionInfo name="applicationServer" value="String" />
    <optionInfo name="hssProject" value="String" />
    <optionInfo name="dataSource" value="String" />
    <optionInfo name="createOutline" value="false" />
    <optionInfo name="refreshOutline" value="false" />
    <optionInfo name="createSecurityFilters" value="false" />
  </Options>
</Target>
</Task>
</Tasks>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Performance Management Architect のライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。

**注：** 移行に失敗した場合、移行ステータス・レポートにライフサイクル管理エンジンのログ・ファイルへのリンクが示されます。製品のライフサイクル管理のログ・ファイルは、その製品とともに配置されます。





# Calculation Managerとライフ サイクル管理

## この付録の内容

Calculation Manager のアーチファクトについて .....	181
Calculation Manager の役割の要件 .....	181
Calculation Manager の移行の必要条件 .....	181
Calculation Manager のアーチファクト・リスト .....	182
Calculation Manager アプリケーションの移行および製品間のアーチファクトの依存関係 .....	184
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	184
サンプルの移行定義ファイル .....	185
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	187

## Calculation Manager のアーチファクトについて

ライフサイクル管理は、次の Calculation Manager のアーチファクト・タイプを移行する場合に使用します:

- ルール
- ルール・セット
- テンプレート

Calculation Manager のアーチファクトについては、[182 ページの「Calculation Manager のアーチファクト・リスト」](#)を参照してください。

## Calculation Manager の役割の要件

Calculation Manager のライフサイクル管理操作を行うユーザーには、LCM 管理者の役割が割り当てられている必要があります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## Calculation Manager の移行の必要条件

- Shared Services および Calculation Manager をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに LCM 管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- Calculation Manager では、ライフサイクル管理を使用したアプリケーションからアプリケーションの直接的な移行はサポートしていません。Calculation Manager のアーチファクトは、ファイル・システム間で移行する必要があります。14 ページの「移行のシナリオ」を参照してください。
- 製品固有のアーチファクトを移行する前に、Shared Services のネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)を移行します。44 ページの「ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行」を参照してください。Shared Services のネイティブ・ディレクトリについては、付録 B「Shared Services とライフサイクル管理」を参照してください。
- Financial Management、Oracle Hyperion Planning, Fusion Edition、または Performance Management Architect アプリケーションのビュー(およびプラン・タイプ)を移行します。Performance Management Architect のアーチファクトの詳細は、付録 G「Performance Management Architect とライフサイクル管理」を参照してください。

## Calculation Manager のアーチファクト・リスト

Calculation Manager のアーチファクトは、Shared Services Console 内の EPMA アプリケーション・グループに一覧表示されます。

ここには次のトピックがあります。

- 182 ページの「アーチファクト・リストについて」
- 183 ページの「ルールのアーチファクト」
- 183 ページの「ルール・セットのアーチファクト」
- 183 ページの「テンプレートのアーチファクト」

## アーチファクト・リストについて

アーチファクト・リストについて次のことに注意してください。

- アーチファクト: アーチファクト名
- 説明: アーチファクトの説明
- 最終更新時間: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトがインポートされた時間を反映します。アーチファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- 最終更新ユーザー: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーチファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- ファイル・システムで編集可能: 「はい」の場合、アーチファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーチファクトは製品内でのみ編集できます。

- 依存: アーチファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Financial Management のイベントを移行する場合は Financial Management カレンダーのアーチファクトも移行する必要があります。

## ルールのアーチファクト

「ルール」ディレクトリにはルールのアーチファクトが含まれています。

表 50 ルールのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ルール	コンポーネントでグループ化されたテンプレートと計算を含めることのできるオブジェクト。	はい	はい	はい: XML	なし

## ルール・セットのアーチファクト

「ルール・セット」ディレクトリにはルールのアーチファクトが含まれています。

表 51 ルール・セットのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ルール・セット	同時または連続の計算が可能なルールおよびその他のルール・セットを含むオブジェクト。	はい	はい	はい: XML	なし

## テンプレートのアーチファクト

「テンプレート」ディレクトリには、テンプレートのアーチファクトが含まれています。

表 52 テンプレートのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
テンプレート	1 回または複数回の計算を実行する定義済みのコンポー	はい	はい	はい: XML	なし

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	ネットのセット。				

## Calculation Manager アプリケーションの移行および製品間のアーチファクトの依存関係

Calculation Manager アプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーチファクトの依存関係が存在します。Calculation Manager では、他の製品からのアーチファクトを Calculation Manager に固有のアーチファクトとともに移行する必要があります。

- Performance Management Architect
- Shared Services のネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)

**注：** 複数の EPM System 製品のインポート順序は、20 ページの「[複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート](#)」を参照してください。

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

ここには次のトピックがあります。

- [184 ページの「移行のエクスポート・オプション」](#)
- [184 ページの「移行のインポート・オプション」](#)

### 移行のエクスポート・オプション

Calculation Manager には、製品に固有のエクスポート・オプションはありません。

### 移行のインポート・オプション

インポート時に、Calculation Manager アーチファクトは、宛先環境で既存のアーチファクトを置換します。アーチファクトをマージするオプションはありません。

Calculation Manager のインポート・オプション:

- 計算ルールの配置: ターゲット・アプリケーションに計算ルールを配置する場  
合に選択します。



# サンプルの移行定義ファイル

Calculation Manager の移行定義ファイルで使用される製品コードは BPMA です。すべてのサンプルの移行定義ファイルは LCM\_HOME/samples にあります。

## ファイル・システムへのエクスポート(Financial Management の例)

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/Calculation Manager"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection2">
        <Options/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Calc Manager Rules" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Calc Manager Rule Sets" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Calc Manager Templates" pattern="*/>
      </Source>
      <Target connection="FileSystem-Connection1">
      </Target>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>
```

---

## ファイル・システムからのインポート(Financial Management の例)

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password=""/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/Calculation Manager"/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="FileSystem-Connection1">
        <Options/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Calc Manager Rules" pattern="*/>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Calc Manager Rule Sets" pattern="*/>
      </Source>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>
```

```

        <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/
Consolidation Applications/EPMAComma/Calc Manager Templates" pattern="*" />
    </Source>
    <Target connection="AppConnection2">
        <Options>
            <optionInfo name="" value="false" />
        </Options>
    </Target>
</Task>
</Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムへのエクスポート(Planning の例)

---

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
    <Connections>
        <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password="" />
        <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/Calculation Manager" />
        <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application" />
    </Connections>
    <Tasks>
        <Task seqID="1">
            <Source connection="AppConnection2">
                <Options />
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Plan Types/Plan1/Calc Manager Rules" pattern="*" />
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Calc Manager Rule Sets" pattern="*" />
                <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Calc Manager Templates" pattern="*" />
            </Source>
            <Target connection="FileSystem-Connection1">
            </Target>
        </Task>
    </Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムからのインポート(Planning の例)

---

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
    <Connections>
        <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://lcmdev:28080/interop" user="" password="" />
        <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection1" type="FileSystem"
description="File system connection" filePath="/Calculation Manager" />
        <ConnectionInfo name="AppConnection2" type="Application" product="BPMA"
project="Foundation" application="EPM Architect lcmdev" HSSConnection="MyHSS-
Connection1" description="Source Application" />
    </Connections>
    <Tasks>

```

```
<Task seqID="1">
  <Source connection="FileSystem-Connection1">
    <Options/>
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Plan Types/Plan1/Calc Manager Rules" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Calc Manager Rule Sets" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata/Planning
Applications/EPMASamp/Calc Manager Templates" pattern="*" />
  </Source>
  <Target connection="AppConnection2">
  </Target>
</Task>
</Tasks>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Calculation Manager のライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。

**注：** 移行に失敗した場合、移行ステータス・レポートにライフサイクル管理エンジンのログ・ファイルへのリンクが示されます。製品のライフサイクル管理のログ・ファイルは、その製品とともに配置されます。





# Performance Scorecardとライフサイクル管理

## この付録の内容

Performance Scorecard のアーチファクトについて.....	189
Performance Scorecard の役割の要件.....	189
Performance Scorecard の移行の前提条件.....	190
Performance Scorecard のアーチファクト・リスト.....	190
Performance Scorecard アプリケーションの移行と製品間のアーチファクトの依存関係.....	192
移行におけるエクスポートとインポートのオプション.....	192
サンプルの移行定義ファイル.....	193
ライフサイクル管理のログ・ファイル.....	194

## Performance Scorecard のアーチファクトについて

次のタイプの Performance Scorecard アーチファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します:

- 管理オプション
- オブジェクト

Performance Scorecard のアーチファクト・リストについては、[190 ページの「Performance Scorecard のアーチファクト・リスト」](#)を参照してください。

## Performance Scorecard の役割の要件

Performance Scorecard のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- HPS パワー・マネージャ
- 管理者

**注：** Performance Scorecard アプリケーション・グループには、管理者セキュリティの役割が割り当てられている必要があります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## Performance Scorecard の移行の前提条件

- Shared Services と Performance Scorecard をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM 管理者および HPS パワー・マネージャの役割が割り当てられていること、および Performance Scorecard アプリケーション・グループに管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- Shared Services に登録できる Performance Scorecard アプリケーション・インスタンスは 1 つのみのため、ライフサイクル管理を使用して Performance Scorecard アプリケーションからアプリケーションに直接移行できません。Performance Scorecard アーチファクトをファイル・システムに移行、またはファイル・システムから移行する必要があります。14 ページの「移行のシナリオ」を参照してください。

## Performance Scorecard のアーチファクト・リスト

Performance Scorecard のアーチファクトは、Oracle Hyperion(R) Shared Services Console の Scorecard アプリケーション・グループにリストされています。

ここには次のトピックがあります。

- [190 ページの「アーチファクト・リストについて」](#)
- [191 ページの「管理オプションのアーチファクト」](#)
- [191 ページの「オブジェクトのアーチファクト」](#)

### アーチファクト・リストについて

アーチファクト・リストについて次のことに注意してください。

- アーチファクト: アーチファクト名
- 説明: アーチファクトの説明
- 最終更新時間: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトがインポートされた時間を反映します。アーチファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- 最終更新ユーザー: このパラメータがサポートされている場合は、アーチファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーチファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- ファイル・システムで編集可能: 「はい」の場合、アーチファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーチファクトは製品内でのみ編集できます。
- 依存関係: アーチファクトの依存関係をすべてリストします。たとえば、Financial Management イベント・アーチファクトの場合、Oracle Hyperion Financial

Management, Fusion Edition のカレンダー・アーチファクトも移行する必要があります。

## 管理オプションのアーチファクト

管理オプション・ディレクトリには、モデル・セキュリティのアーチファクトが含まれています。

**注：** また、ユーザーが移行できる Performance Scorecard の勘定科目には、勘定科目に割り当てられたセキュリティ設定(CSV ファイルに表示され、SR=セキュリティの役割、AE=関係付けられた従業員、PD=プライマリ・ドメイン、Object Name=セキュリティの役割名などがある)が含まれている場合があります。

表 53 管理オプションのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
モデル・セキュリティ	ユーザーおよびグループの Performance Scorecard のメタデータとデータへのアクセスを制御する、関連付けられた従業員、ユーザーのプライマリ・ドメイン、カスタム・セキュリティの役割の割当てなどの情報を含む CSV ファイルです。	いいえ	いいえ	はい: CSV	なし

## オブジェクトのアーチファクト

オブジェクト・ディレクトリには、アプリケーション・モデルのアーチファクトが含まれています。

**注：** アプリケーション・モデル・モジュールを使用して移行できるのは、Performance Scorecard のアプリケーション・モジュール全体のみです。個々のアーチファクトは移行できません。

表 54 オブジェクトのアーチファクト

アーチファクト	説明	最終更新時間	最終更新ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アプリケーション・モデル	Performance Scorecard のメタデータを含む XML ファイルまたはコンテンツの文字列です。	いいえ	いいえ	いいえ	なし

## Performance Scorecard アプリケーションの移行と製品間のアーチファクトの依存関係

Performance Scorecard には、製品間のアーチファクトの依存関係はありません。

注： 複数の EPM System 製品のインポート順序は、20 ページの「複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート」を参照してください。

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

ここには次のトピックがあります。

- [192 ページの「移行のエクスポート・オプション」](#)
- [192 ページの「移行のインポート・オプション」](#)

### 移行のエクスポート・オプション

Performance Scorecard のエクスポート・オプションには、次があります。

- 増分オプション: 最後にエクスポート操作を行ってから変更されたアーチファクトのみエクスポートします。

### 移行のインポート・オプション

インポート時に、Performance Scorecard アーチファクトは、宛先環境で既存のアーチファクトとマージします。Performance Scorecard には、製品固有のインポート・オプションはありません。



# サンプルの移行定義ファイル

Performance Scorecard の移行定義ファイルに使用される製品コードは、HPS です。  
すべてのサンプル移行定義ファイルは、LCM\_HOME/samples に格納されています。

## ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Logging option="IgnoreError" logfile=""/>
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://tordev1.hyperion.com:28080/interop" user=""
password=""/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="HPS"
project="Scorecard" application="Hyperion Performance Scorecard"
HSSConnection="MyHSS-Connection1" description="Source Application"/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection2" type="FileSystem" filePath="/
HPS_Export"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="AppConnection1">
        <Options>
          <optionInfo name="incremental" value="false"/>
        </Options>
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Administrative Options"
pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Objects" pattern="*" />
      </Source>
      <Target connection="FileSystem-Connection2">
        <Options/>
      </Target>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>
```

---

## ファイル・システムからのインポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="web-migration" description="migrating product to product">
  <Logging option="IgnoreError" logfile=""/>
  <Connections>
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection1" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://tordev1.hyperion.com:28080/interop" user=""
password=""/>
    <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="HPS"
project="Scorecard" application="Hyperion Performance Scorecard"
HSSConnection="MyHSS-Connection1" description="Source Application"/>
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection2" type="FileSystem" filePath="/
HPS_Export"/>
  </Connections>
  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="FileSystem-Connection2">
        <Options/>
      </Source>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>
```

```
        <optionInfo name="incremental" value="false"/>
    </Options>
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Administrative Options"
pattern="*" />
        <Artifact recursive="true" parentPath="/Objects" pattern="*" />
    </Source>
    <Target connection="AppConnection1">
        <Options/>
    </Target>
</Task>
</Tasks>
</Package>
```

---

## ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Hyperion Performance Scorecard, Fusion Edition のライフサイクル管理のログ・ファイルは、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。

**注：** 移行に失敗した場合、移行ステータス・レポートにライフサイクル管理エンジンのログ・ファイルへのリンクが示されます。製品のライフサイクル管理のログ・ファイルは、その製品とともに配置されます。



# Profitability and Cost Managementとライフサイクル管理

## この付録の内容

Profitability and Cost Management アーチファクトについて .....	195
Profitability and Cost Management の役割の要件 .....	195
Profitability and Cost Management の移行の要件 .....	196
Profitability and Cost Management アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関係 .....	196
移行におけるエクスポートとインポートのオプション .....	197
サンプルの移行定義ファイル .....	197
ライフサイクル管理のログ・ファイル .....	199

## Profitability and Cost Management アーチファクトについて

Profitability and Cost Management では、モデルと呼ばれる 1 つのアーチファクトがサポートされています。モデル・アーチファクトは、次の要素を含む XML ファイルです。

- ドライバ定義
- ステージ定義
- POV 定義
- ドライバの選択
- 割当て
- アプリケーション・プリファレンス
- 割当てルール
- 割当てルールの選択

## Profitability and Cost Management の役割の要件

Profitability and Cost Management のライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM 管理者
- パワー・ユーザー

- 管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

## Profitability and Cost Management の移行の要件

- Shared Services と Profitability and Cost Management をインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに LCM 管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- Performance Management Architect から Profitability and Cost Management にアプリケーションを配置します(すべての次元が使用可能なことを確認してください)。
- モデル・アーチファクトを作成します。
- Profitability and Cost Management Performance Management Architect アプリケーションの場合は、非次元アーチファクトを移行する前に、最初に Performance Management Architect 次元を移行してインポートしてから配置する必要があります。Performance Management Architect アーチファクトのリストについては、[付録 G 「Performance Management Architect とライフサイクル管理」](#)を参照してください。

## Profitability and Cost Management アプリケーションの移行と製品間アーチファクトの依存関係

Profitability and Cost Management アプリケーションをある環境から別の環境(開発環境からテスト環境、またはテスト環境から本番環境)に移行する場合、ここには製品間アーチファクトの依存関係があります。Profitability and Cost Management では、Profitability and Cost Management 固有のアーチファクトと共に、他の製品からアーチファクトを移行する必要があります。

- Oracle Hyperion EPM Architect, Fusion Edition の次元
- Oracle Hyperion(R) Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)
- Essbase
- Oracle Hyperion Reporting and Analysis (Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition)
- Hyperion Calculation Manager のルール

**注：** 複数の Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 製品のインポート順序は、20 ページの「複数の EPM System 製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート」を参照してください。

## 移行におけるエクスポートとインポートのオプション

ここには次のトピックがあります。

- 197 ページの「移行のエクスポート・オプション」
- 197 ページの「移行のインポート・オプション」

### 移行のエクスポート・オプション

Profitability and Cost Management には、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

**注：** Essbase アーチファクト(アウトライン、データ、計算スクリプト)は、Oracle Essbase アプリケーションの下にエクスポートされます。

### 移行のインポート・オプション

インポートする際、宛先環境にモデル・アーチファクトがすでに存在する場合は、インポートが行われる前に既存のモデル・アーチファクトが自動的に削除されます。

## サンプルの移行定義ファイル

Profitability and Cost Management の移行定義ファイルに使用される製品コードは HPM です。すべてのサンプル移行定義ファイルは、LCM\_HOME/samples に格納されています。

### ファイル・システムへのエクスポート

---

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="" description="" xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-
instance">
  <Logging option="IgnoreError" logfile=""/>
  <!--Attributes to update: user and pasword, password will be ciphered on the
first run-->
  <Credentials user="" password=""/>
  <Connections>
    <!--Attributes to update: HSS url -->
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://localhost:28080/interop"/>
    <!--Attributes to update: filePath, link to local folder where artifacts will
be stored -->
    <!-- for Unix based machine filePath attribute could look like
```

```

filePath="file:/nfshome/hyperionstorage/lcmStorage" -->
  <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection" type="FileSystem"
description="File System Location" filePath="file:/c:/LCM/HPM"/>
  <!--Attributes to update: application, application name in HSS -->
  <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="HPM"
description="" HSSConnection="MyHSS-Connection" project="HPM" application="bikes"/>
</Connections>

<Tasks>
  <Task seqID="1">
    <Source connection="AppConnection1">
      <Artifact parentPath="/Applications" recursive="true" pattern="*" />
    </Source>
    <Target connection="FileSystem-Connection" />
  </Task>
</Tasks>
</Package>

```

---

## ファイル・システムからのインポート

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package name="" description="" xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-
instance">
  <Logging option="IgnoreError" logfile="" />
  <Credentials user="" password="" />
  <Connections>
    <!--Attributes to update: HSS url -->
    <ConnectionInfo name="MyHSS-Connection" type="HSS" description="Hyperion
Shared Service connection" url="http://localhost:28080/interop"/>
    <!--Attributes to update: filePath, link to local folder where artifacts will
be stored -->
    <!-- for Unix based machine filePath attribute could look like
filePath="file:/nfshome/hyperionstorage/lcmStorage" -->
    <ConnectionInfo name="FileSystem-Connection" type="FileSystem"
description="File System Location" filePath="file:/c:/LCM/HPM"/>
    <!--Attributes to update: application, application name in HSS -->
    <ConnectionInfo name="AppConnection1" type="Application" product="HPM"
description="" HSSConnection="MyHSS-Connection" project="HPM" application="bikes"/>
  </Connections>

  <Tasks>
    <Task seqID="1">
      <Source connection="FileSystem-Connection">
        <Artifact parentPath="/Applications" recursive="true" pattern="*" />
      </Source>
      <Target connection="AppConnection1">
        <Options />
        <Transforms />
      </Target>
    </Task>
  </Tasks>
</Package>

```

---

# ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Hyperion Profitability and Cost Management, Fusion Edition のライフサイクル管理のログ・ファイルは、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。

次のことに注意してください。

- 詳細は、S9 ログのログ・セクションで説明されています。
- 移行に失敗した場合、移行ステータス・レポートにライフサイクル管理エンジンのログ・ファイルへのリンクが示されます。製品 Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理のログ・ファイルは、その製品とともに配置されます。





---

# 用語集

---

**!** 感嘆符(!)(bang character(!))を参照してください。

**#MISSING** 欠落データ(#MISSING)(missing data(#MISSING))を参照してください。

**2 パス(two-pass)** 他のメンバーの計算済の値に依存するメンバーを再計算するために使用される、Essbaseのプロパティです。2パスのメンバーは、2番目のパスの間にアウトラインから計算されます。

**Calculation Manager Planning, Financial Management** および Essbase のユーザーがグラフィカルな環境でビジネス・ルールを設計、検証および管理するために使用する計算モジュールです。

**CDF** カスタム定義関数(CDF)(custom-defined function (CDF))を参照してください。

**CDM** カスタム定義マクロ(CDM)(custom-defined macro (CDM))を参照してください。

**Cookie** Web サイトによってコンピュータ上に配置されたデータのセグメントです。

**essbase.cfg** Essbase のオプションの構成ファイルです。管理者は、このファイルを編集して Essbase サーバー機能をカスタマイズできます。一部の構成は、Essbase クライアントで使用することにより、Essbase サーバーの設定を上書きできます。

**EssCell** 特定の Essbase データベース・メンバーの交差を示す値を取得するために、Essbase スプレッドシート・アドインのセルに入力する関数です。

**ESSCMD** Essbase の操作を対話的に実行したり、バッチ・スクリプト・ファイルから実行したりするための、コマンドライン・インタフェースです。

**ESSLANG** テキスト文字を解釈するために使用されるエンコード方式を定義する Essbase 環境変数です。**エンコード方式(encoding)**も参照してください。

**ESSMSH** MaxL シェル(MaxL Shell)を参照してください。

**Extensible Markup Language(XML)** データに属性を割り当てるタグのセットで構成される言語です。スキーマに基づいて、複数のアプリケーションの間で解釈可能です。

**Extract-Transform-Load(ETL)** データを抽出してアプリケーションに移行するための、データ・ソース固有のプログラムです。

**GUI** グラフィカル・ユーザー・インタフェースです。

**ID(identity)** 外部認証におけるユーザーまたはグループの一意の ID です。

**Install\_Home** EPM System 製品がインストールされるディレクトリを示す変数です。同じコンピュータに複数のアプリケーションがインストールされている場合は、EPM System 製品の1つのインスタンスを指します。

**Interactive Reporting 接続ファイル(.oce)(Interactive Reporting connection file(.oce))** データベース API(ODBC、SQL\*Net、など)、データベース・ソフトウェア、データベース・サーバーのネットワーク・アドレス、データベース・ユーザー名などのデータベース接続情報を含むファイルです。管理者は、Interactive Reporting 接続ファイル(.oce)を作成して発行します。

**Java データベース接続(JDBC)(Java Database Connectivity (JDBC))** Java クライアントとリレーショナル・データベースにより使用されるクライアントとサーバー間の通信プロトコルです。JDBC インタフェースにより、SQL データベースのアクセスのための呼出しレベル API が提供されます。

**JSP** Java Server Page です。

**KeyContacts ガジェット(KeyContacts gadget)** Smart Space ユーザーのグループを含み、Smart Space Collaborator へのアクセスを提供します。たとえば、マーケティング・チームおよび開発チーム向けに個別の KeyContacts ガジェットを使用できます。

**LRO リンク・レポート・オブジェクト(LRO)(linked reporting object (LRO))**を参照してください。

**MaxL** Essbase で使用される多次元データベース向けアクセス言語です。データ定義の言語(MaxL DDL)とデータ操作の言語(MaxL DML)から構成されます。[MaxL DDL](#)、[MaxL DML](#)、および [MaxL シェル\(MaxL Shell\)](#)も参照してください。

**MaxL DDL** Essbase で、バッチまたは対話的なシステム管理のタスクに使用されるデータ定義の言語です。

**MaxL DML** Essbase で、データのクエリーと抽出に使用されるデータ操作の言語です。

**MaxL DML の計算済メンバー(calculated member in MaxL DML)**  
分析を目的として設計されたメンバーです。MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションで定義されます。

**MaxL DML の計算済メンバー(calculated member in MaxL DML)**  
分析を目的として設計されたメンバーです。MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションで定義されます。

**MaxL Perl モジュール(MaxL Perl Module)** Essbase MaxL DDL の一部である Perl モジュール(essbase.pm)です。このモジュールを Perl パッケージに追加すると、Perl プログラムから Essbase データベースにアクセスできます。

**MaxL シェル(MaxL Shell)** MaxL ステートメントを Essbase サーバーに渡すためのインタフェースです。MaxL シェルの実行可能ファイル(UNIX は essmsh、Windows は essmsh.exe)は、Essbase の bin ディレクトリに格納されています。

**MaxL スクリプト・エディタ(MaxL Script Editor)** 管理サービス・コンソールのスクリプト開発環境です。MaxL スクリプトで Essbase を管理するとき、テキスト・エディタと MaxL シェルの代替として MaxL スクリプト・エディタを使用できます。

**MDX(多次元式)(MDX (multidimensional expression))** リレーショナル・データベースで SQL を使用する際に、OLAP 準拠のデータベース向けに OLE DB に命令する言語です。「OLAPQuery」セクションのアウトライナを構築するとき、Interactive Reporting クライアントは要求を MDX の命令に変換します。ユーザーがクエリーを処理するとき、MDX がデータベース・サーバーに送信され、サーバーはクエリーの結果となるレコードを戻します。[SQL スプレッドシート\(SQL spreadsheet\)](#)も参照してください。

**MIME タイプ(MIME Type)** 多目的インターネットメール拡張仕様(Multipurpose Internet Mail Extension)です。アイテムのデータ・フォーマットを示す属性により、システムはオブジェクトを開くアプリケーションを判断します。ファイルの MIME タイプはファイル拡張子または HTTP ヘッダーにより判別されません。プラグインはブラウザに対して、サポートされる MIME タイプ、および各 MIME タイプに対応するファイル拡張子を通知します。

**NULL 値(null value)** データのない値です。NULL 値はゼロに等しくありません。

**ODBC** Open Database Connectivity の略です。データベース管理システム(database management system (DBMS))の情報処理方法に関係なく、あらゆるアプリケーションにより使用されるデータベース・アクセスのメソッドです。

**「OK」ステータス(OK status)** 集計ステータスの1つです。エンティティが集計済であり、組織階層の下にあるデータが変更されていないことを示します。

**OLAP メタデータ・カタログ(OLAP Metadata Catalog)** 統合サービスで、リレーショナル・データ・ソースから取り出されるデータの特性、ソース、場所およびタイプを記述したメタデータが含まれているリレーショナル・データベースです。

**OLAP モデル(OLAP model)** 統合サービスで、リレーショナル・データベースのテーブルおよび列から作成される論理モデル(スター・スキーマ)です。OLAP モデルは多次元データベースの構造を生成するために使用されます。

**Open Database Connectivity (ODBC)** 標準のアプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)です。これにより、アプリケーションから複数のサードパーティ・データベースにアクセスできます。

**PL 勘定(P&L)(P&L accounts (P&L))** 損益勘定です。通常、会社の損益計算書を構成する費用勘定と収益勘定の集合を指します。

**POV(視点)(POV (point of view))** 行、列、またはページ軸に割り当てられていないメンバーを選択することにより、データ・フォーカスを設定する機能です。たとえば、FDM での POV の選択項目には、場所、期間、カテゴリ、およびターゲット・カテゴリが含まれる可能性があります。また、Smart View で POV をフィルタとして使用すると、Currency 次元を POV に割り当て、Euro メンバーを選択できます。データ・フォームで POV を選択すると、ユーロ建でデータが表示されます。

**Production Reporting** [SQR Production Reporting](#) を参照してください。

**PVA 期別価額メソッド(PVA)(periodic value method (PVA))**を参照してください。

**root メンバー(root member)** 次元分岐における最上位のメンバーです。

**RSC サービス(RSC services)** リモート・サービス・コンフィグレータで構成されるサービスです。リポジトリ・サービス、サービス・ブローカ、名前サービス、イベント・サービス、およびジョブ・サービスを含みます。

**Shared Services レジストリ(Shared Services Registry)** Shared Services データベースの一部です。Shared Services レジストリでは、インストールされたほとんどの EPM System 製品の情報(インストール・ディレクトリ、データベース設定、配置設定、コンピュータ名、ポート、サーバー、URL、依存サービス・データなど)を保管および再利用します。

**Smart Space Collaborator** ユーザーまたはシステムがメッセージを送信したり、Reporting and Analysis リポジトリのコンテンツを共有したりするためのサービスです。メッセージには、インスタント・メッセージのスタイル、ディスカッション、ミーティング、トースト・メッセージなどの様々な形態を使用できます。

**Smart Space クライアント・ソフトウェア(Smart Space client software)** クライアントのコンピュータ上で実行し、ガジェット、即時コラボレーション、および Reporting and Analysis リポジトリへのアクセスを提供します。Smart Space のワークフレームとガジェットから構成されます。

**SmartBook ガジェット(SmartBook gadget)** Reporting and Analysis リポジトリまたは URL からのドキュメントを含みます。SmartBook が開くとすべてのドキュメントがロードされるので、あらゆるコンテンツへのアクセスを即座に実行できます。

**SPF ファイル(SPF files)** SQR Production Reporting サーバーで作成される、プリンタに依存しないファイルです。フォント、間隔、ヘッダー、フッターなど、フォーマットされた実際のレポート出力を表します。

**SQL スプレッドシート(SQL spreadsheet)** SQL クエリーの結果セットを表示するデータ・オブジェクトです。

**SQR Production Reporting** データ・アクセス、データ操作、および SQR Production Reporting ドキュメント作成のための専用プログラミング言語です。

**Structured Query Language(SQL)** リレーショナル・データベースに対する指示を処理するために使用される言語です。

**TCP/IP Transmission Control Protocol/Internet Protocol(TCP/IP)**を参照してください。

**Transmission Control Protocol/Internet Protocol(TCP/IP)** 異なるオペレーティング・システムおよび内部アーキテクチャを持つコンピュータをリンクする標準的な通信プロトコルのセットです。TCP/IP を使用すると、LAN および WAN に接続する多様なコンピュータとの間でのファイルの交換、メールの送信、およびデータの保管が可能です。

**Unicode モードのアプリケーション(Unicode-mode application)** 文字テキストが UTF-8 でエンコードされている Essbase アプリケーションです。様々な言語に設定されているコンピュータを使用するユーザーが、アプリケーション・データを共有できます。

**Uniform Resource Locator(URL)** インターネットまたはイントラネット上のリソースのアドレスです。

**Web サーバー(Web server)** イントラネットまたはインターネットの Web ページや Web アプリケーションをホストするソフトウェアやハードウェアです。

**WITH セクション(WITH section)** MaxL DML で、オプションで使用できるクエリーのセクションです。メンバーのセットを定義する再利用可能な論理を作成するために使用されます。WITH セクションでセット(カスタムのメンバー)を一度定義すると、クエリー中に複数回参照できます。

**Workspace ページ(Workspace Page)** 複数のソース(ドキュメント、URL、その他のコンテンツ・タイプ)からのコンテンツを使用して作成されるページです。Oracle およびその他のソースからのコンテンツを集約するために使用可能です。

**ws.conf** Windows プラットフォーム用の構成ファイルです。

**wsconf\_platform** UNIX プラットフォーム用の構成ファイルです。

**XML Extensible Markup Language(XML)**を参照してください。

**XOLAP** アウトラインのメタデータのみを保管し、クエリー時にリレーショナル・データベースからすべてデータを取得する、Essbase の多次元データベースです。XOLAP は、集約ストレージ・データベースおよび重複メンバー名を含むアプリケーションをサポートします。

**Y 軸スケール(Y axis scale)** 「調査」セクションに表示される、チャートの Y 軸上の値の範囲です。たとえば、各チャートについて一意の Y 軸スケールを使用したり、すべての詳細チャートに同一の Y 軸スケールを使用したり、または列内のすべてのチャートに同一の Y 軸スケールを使用することが可能です。多くの場合、共通の Y 軸スケールを使用すると、一目でチャートを比較できるようになります。

**Zero Administration** サーバー上のプラグインの最新バージョン番号を識別するソフトウェア・ツールです。

**アウトライン(outline)** 多次元データベースのデータベース構造です。すべての次元、メンバー、タグ、タイプ、集計、および算術的關係を含みます。データは、アウトラインに定義された構造に応じてデータベースに保管されます。

**アウトライン同期(outline synchronization)** パーティション・データベースで、データベースのアウトラインの変更を他のデータベースに伝播するプロセスです。

**アクセサ(accessor)** データ・マイニング・アルゴリズムに関する入出力データ仕様です。

**アクセス権(access permissions)** リソースに対してユーザーが実行できる一連の操作です。

**アクティビティ・レベルの承認(activity-level authorization)** 操作対象のデータに依存せず、アプリケーションへのユーザー・アクセス、およびアプリケーションで実行できるアクティビティのタイプを定義します。

**アクティブ・サービス(active service)** 実行タイプが保留ではなく開始に設定されているサービスです。

**アセンブリ(assemblies)** EPM System 製品またはコンポーネントのインストール・ファイルです。

**値次元(value dimension)** 入力値、換算値、および集計の詳細を定義するために使用されます。

**アダプタ(adapter)** ターゲットおよびソース・システムのデータやメタデータにプログラムを統合するためのソフトウェアです。

**アップグレード(upgrade)** 以前のソフトウェア・リリースを現在のリリースに置換するプロセス、またはある製品を別の製品に置換するプロセスです。

**宛先(destination)** (1) Business Rules と Calculation Manager の場合、割り当てられた値が保管されるデータベース内の交差です。(2) Profitability and Cost Management 割り当てでは、割り当てられる値を受け取るポイントです。

**アドホック・レポート(ad hoc report)** エンド・ユーザーがその場で作成するオンライン分析クエリーです。

**アプリケーション(application)** (1)特定のタスクまたはタスクのグループを実行するために設計されたソフトウェア・プログラムです(スプレッドシート・プログラム、データベース管理システムなど)。(2)必要とされる特定の分析およびレポートに対応するために使用される、次元および次元メンバーの関連するセットです。

**アプリケーションの通貨(application currency)** アプリケーションのデフォルトのレポート用通貨です。

**アペンダ(appender)** 宛先を意味する Log4j の用語です。

**安全率(Risk Free Rate)** より安全な投資から期待される利回りです(米国の長期国債など)。

**暗黙の共有(implied share)** メンバーが1つ以上の子を持ち、集計されている子は1つのみである場合、親と子が値を共有します。

**アーチファクト(artifact)** 個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテムです(スクリプト、フォーム、ルール・ファイル、Interactive Reporting ドキュメント、財務レポートなど)。オブジェクトとも呼ばれます。



**移行(migration)** アプリケーション、アーチファクト、またはユーザーを、別の環境またはコンピュータにコピーするプロセスです。たとえば、テスト環境から実稼働環境にコピーします。

**移行監査レポート(migration audit report)** 移行ログから生成されるレポートです。アプリケーションの移行に関する追跡情報を提供します。

**移行スナップショット(migration snapshot)** アプリケーションの移行のスナップショットです。移行ログに取込まれます。

**移行定義ファイル(.mdf)(migration definition file(.mdf))** アプリケーションの移行に使用される移行パラメータを含むファイルです。これによりバッチ・スクリプトを処理できます。

**移行ログ(migration log)** アプリケーションの移行のすべてのアクションとメッセージを取込むログ・ファイルです。

**依存エンティティ(dependent entity)** 組織内の他のエンティティに属するエンティティです。

**一意でないメンバー名(non-unique member name)** [重複メンバー名\(duplicate member name\)](#)を参照してください。

**一意のメンバー名(unique member name)** データベース・アウトライン内に一度のみ存在する、共有されないメンバーの名前です。

**一意メンバーのアウトライン(unique member outline)** 重複メンバー名を使用できないデータベース・アウトラインです。

**イメージ・ブックマーク(image bookmarks)** Web ページやリポジトリ・アイテムへのグラフィック・リンクです。

**因果関係マップ(cause and effect map)** 企業戦略を形成する要素の関連、およびこれらの要素が組織の戦略目標を達成するためにどのように連動するかを示します。因果関係マップのタブは、各戦略マップについて自動的に作成されます。

**インデックス(index)** (1)疎データの組合せによりブロック・ストレージ・データベースでデータを取得するメソッドです。(2)インデックス・ファイルを指します。

**インデックス・キャッシュ(index cache)** インデックス・ページを含むバッファです。

**インデックス項目(index entry)** 疎次元の交差へのポインタです。インデックス項目はディスク上のデータ・ブロックをポイントし、オフセットを使用してセルを検索します。

**インデックス・ファイル(index file)** ブロック・ストレージのデータ取得情報を保管する Essbase ファイルです。ディスクに常駐し、インデックス・ページを含みます。

**インデックス・ページ(index page)** インデックス・ファイルの下位区分です。データ・ブロックを指すポインタを含みます。

**イントロスペクション(introspection)** データベース固有の関係に基づいて階層を判断するために、データ・ソースを詳細に検査することを指します。[スクレーピング\(scraping\)](#)と対比してください。

**インポート・フォーマット(import format)** FDM で、ソース・ファイルの構造を定義します。これにより、ソース・データ・ファイルを FDM データのロード位置にロードできます。

**「影響」ステータス(IMPACTED status)** 親エンティティに集計する子エンティティの変更を示します。

**円グラフ(pie chart)** 1つのデータ・セットを扇形に分割された円形で示すグラフです。

**エンコード方式(encoding)** テキストの作成、保管、表示のためにビット組合せを文字にマッピングするメソッドの1つです。各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。[コード・ページ\(code page\)](#)および[ロケール\(locale\)](#)も参照してください。

**エンタープライズ・ビュー(Enterprise View)**

Administration Services の機能の1つです。グラフィカルなツリー・ビューを使用して Essbase 環境を管理できます。エンタープライズ・ビューを使用すると、Essbase アーチファクトを直接操作できます。

**エンティティ(entity)** 部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。

**エージェント(agent)** アプリケーションやデータベースの開始と停止、ユーザー接続の管理、ユーザー・アクセスのセキュリティ対策を行う Essbase サーバー・プロセスです。このエージェントは、ESSBASE.EXE と呼ばれます。

**お気に入りガジェット(Favorites gadget)** Reporting and Analysis ドキュメントへのリンクと URL を含みません。

**親(parents)** 直接レポートする依存エンティティを1つ以上含むエンティティです。親はエンティティであると同時に少なくとも1つのノードに関連しているため、エンティティ、ノード、および親の情報が関連付けられています。

**親の調整(parent adjustments)** 親に関連して子に転記される仕訳エントリです。

**折れ線グラフ(line chart)** データ・セットを最大 50 個表示できるグラフです。各データ・セットは線で示されます。折れ線グラフで絶対値やパーセントを表す際に、前の線の上に次の線を重ねていく形で表示することも可能です。

**オンライン分析プロセス(OLAP)(online analytical processing (OLAP))** 複数ユーザーによりクライアントとサーバー間の計算を行うことができる多次元の環境です。集計された企業データをリアル・タイムで分析するユーザーが使用します。OLAP システムの機能には、ドリルダウン、データのピボット、複素数計算、トレンド分析、およびモデリングが含まれます。

**会社間消去(intercompany elimination)** **消去(elimination)** を参照してください。

**会社間照合(intercompany matching)** アプリケーション内の会社間勘定科目の対の残高を比較するプロセスです。会社間の受取勘定科目は、対応する会社間の支払い勘定科目と比較されます。一致する勘定科目は、組織の集計合計から会社間のトランザクションを消去するために使用されます。

**会社間照合レポート(intercompany matching report)** 会社間勘定科目の残高を比較して、勘定の収支が合っているかどうかを示すレポートです。

**拡張リレーショナル・アクセス(Advanced Relational Access)** リレーショナル・データベースと Essbase 多次元データベースの統合を指します。これにより、すべてのデータがリレーショナル・データベースに保持され、Essbase データベースに存在する要約レベルのデータにマッピングされます。

**確認レベル(review level)** プロセス管理の確認ステータス・インディケータの1つです。「開始していません」、「第1パス」、「送信済」、「承認済」、「発行済」など、プロセス単位のレベルを示します。

**加重(weight)** スコアカードのアイテムに割り当てられた値です。スコアボード全体のスコアの計算において、そのアイテムの相対的な重要性を示します。スコアカードのすべてのアイテムの加重を総計すると 100% になります。たとえば、ある製品について新機能を開発する重要性を認めるため、開発者のスコアカード上の New Features Coded のメジャーに Number of Minor Defect Fixes のメジャーよりも大きな加重が割り当てられる可能性があります。

**カスケード(cascade)** メンバー値のサブセットに対して複数のレポートを作成するプロセスです。

**カスタム・カレンダー(custom calendar)** システム管理者が作成したカレンダーです。

**カスタム次元(custom dimension)** ユーザーが作成および定義する次元です。チャンネル、製品、部署、プロジェクト、または地域がカスタム次元になることがあります。

**カスタム定義関数(CDF)(custom-defined function (CDF))** Java で開発され、MaxL により Essbase の標準計算スクリプト言語に追加された、Essbase 計算関数です。**カスタム定義マクロ(CDM)(custom-defined macro (CDM))** も参照してください。

**カスタム定義マクロ(CDM)(custom-defined macro (CDM))** Essbase のマクロです。Essbase 計算機の関数および専用マクロ関数を使用して記述されます。カスタム定義マクロが使用する Essbase の内部マクロ言語により、計算関数を組み合わせることが可能となり、複数の入力パラメータが処理されます。**カスタム定義関数(CDF)(custom-defined function (CDF))** も参照してください。

**カスタム・プロパティ(custom property)** ユーザーが作成した次元または次元メンバーのプロパティです。

**カスタム・レポート(custom report)** 設計レポート・モジュールで作成する複雑なレポートです。コンポーネントの様々な組合せによって構成されます。

**型付きメジャー(typed measure)** Essbase で、メジャーが示されている次元で Text または Date というタグが付けられたメンバーです。セルの値は事前定義されたテキストまたは日付として表示されます。

**カタログ・ペイン(Catalog pane)** アクティブ・セクションで使用可能な要素のリストを表示します。クエリーがアクティブ・セクションの場合はデータベース・テーブルのリストが表示されます。ピボットがアクティブ・セクションの場合は結果列のリストが表示されます。ダッシュボードがアクティブ・セクションの場合は埋込み可能セクションのリスト、グラフィック・ツール、およびコントロール・ツールが表示されます。

**カテゴリ(categories)** データ編成に使用するグループです(月など)。

**株式ベータ(Equity Beta)** 株のリスクを指します。その株の収益と市場利益率の差異により測定され、ベータと呼ばれるインデックスで示されます。たとえば、市場利益率が1%変動するのに伴って株の収益が通常1.2%変動するのであれば、その株のベータ値は1.2です。

**可変属性(varying attribute)** 1つ以上の次元で変化する属性の関連付けです。これらの次元との関連で値を追跡するために使用できます。たとえば、Product次元に関連付けられているSales Representativeという可変属性を使用すると、複数の販売員によるCustomer Salesの値を時間次元との関連で追跡できます。また、5月に特定の販売員が担当した製品を検索するといった場合にも、可変属性をメンバー選択で使用できます。

**カレンダー(calendar)** ユーザー定義の期間、およびその関係です。暦年または会計年度は、Q1、Q2、Q3、およびQ4から構成されます。

**為替レート(exchange rate)** ある通貨から別の通貨に変換する際に使用する数値です。たとえば、1米ドルをユーロに変換する場合、為替レートの0.8936に米ドルを乗じます。これにより、1米ドルに相当するユーロは0.8936と算出されます。

**為替レート・タイプ(exchange rate type)** 為替レートの識別子です。異なるレートのタイプが使用されるのは、一定期間および年間について複数のレートが存在することがあるためです。従来より、期末時点でのレートを当期の平均レートおよび期末レートとして定義します。その他、ヒストリカル・レート、予算レート、予測レートなどのレート・タイプがあります。レート・タイプは特定の時点に適用されません。

**換算(translation)** **通貨換算(currency conversion)**を参照してください。

**換算レート(conversion rate)** **為替レート(exchange rate)**を参照してください。

**勘定科目次元(accounts dimension)** 高機能の会計を可能にする次元タイプです。勘定科目として定義可能な次元は1つのみです。

**勘定科目の種別(account type)** 時間の経過に伴う勘定科目の値のフロー、およびその符号の振る舞いを示します。勘定科目の種別のオプションには、支出、収益、資産、負債、および資本が含まれます。

**勘定科目の消去(account eliminations)** 集計時に集計ファイル内で値がゼロに設定された勘定科目です。

**勘定科目のブロック(account blocking)** 集計ファイルで勘定科目が入力データを受け入れるプロセスです。ブロックされた勘定科目は加算集計プロセスで値を受け取りません。

**関数(function)** 値またはデータベース・メンバーを戻すルーチンです。

**感嘆符(!)(bang character(!))** 一連のレポート・コマンドを終了して、データベースからの情報を要求する文字です。レポート・スクリプトは感嘆符を使用して終了する必要があります。レポート・スクリプト内では複数の感嘆符を使用できます。

**管理対象サーバー(managed server)** 内蔵されたJava仮想マシン(Java Virtual Machine (JVM))で実行されるアプリケーション・サーバー・プロセスです。

**関連勘定科目(Related Accounts)** 勘定科目の構造体では、すべてのメイン勘定科目および関連勘定科目は同一のメイン勘定科目番号にグループ化されます。メイン勘定科目と関連勘定科目は、勘定科目番号の最初の接尾辞により区別されます。

**外部でトリガーされるイベント(externally triggered events)** ジョブの実行をスケジュールするための、時間ベースでないイベントです。

**外部認証(external authentication)** OracleのHyperionアプリケーションの外部に保管されたユーザー情報を使用して、アプリケーションにログオンすることを指します。ユーザー情報の保管場所は、通常はMSADやNTLMなどの企業ディレクトリとなります。

**ガジェット(gadget)** EPMのコンテンツを容易に表示し、Reporting and Analysisのコア機能にアクセスできる、軽量で単純な専用アプリケーションです。

**期別価額メソッド(PVA)(periodic value method (PVA))** 通貨換算方法の1つです。一定期間における期別の為替レート値を適用して通貨を算出します。

**基本エンティティ(base entity)** 組織の構造の一番下に位置し、他のエンティティを持たないエンティティです。

**基本次元(base dimension)** 1つ以上の属性次元に関連付けられている標準次元です。たとえば、製品に香りがあるとすると、Product次元がFlavors属性次元の基本次元となります。

**基本通貨(base currency)** 日常の業務トランザクションが行われる通貨です。

**期末(ending period)** チャートの日付範囲を調整できる期間です。たとえば、月の期末の場合、当月末までの情報がチャートに表示されます。

**キャッシュ(cache)** データを一時的に保持する、メモリー内のバッファです。

**キューブ(cube)** 3つ以上の次元を含むデータのブロックです。Essbase データベースはキューブです。

**キューブ・スキーマ(cube schema)** Essbase Studio におけるメジャーおよび階層などのメタデータ要素です。キューブの論理モデルを指します。

**キューブ配置(cube deployment)** Essbase Studio で、アウトラインを構築してデータを Essbase アプリケーションおよびデータベースにロードするために、モデルのロード・オプションを設定するプロセスです。

**兄弟(sibling)** 他の子メンバーと同じ世代で、すぐ上に同じ親を持つ子メンバーです。たとえば、メンバー Florida とメンバー New York はメンバー East の子であり、互いの兄弟です。

**共有 Workspace ページ(Shared Workspace Page)** 専用のシステム・フォルダに保管され、組織全体で共有する Workspace ページです。権限を持つユーザーは、共有 Workspace ページの「ナビゲート」メニューからアクセスできます。

**共有メンバー(shared member)** ストレージ・スペースを別の同名メンバーとの間で共有するメンバーです。Essbase アウトラインに複数回現れるメンバーが重複して計算されることを防ぎます。

**行の抑制(suppress rows)** 欠落値を含む行を除外し、スプレッドシート・レポートからの文字にアンダースコアを付けます。

**クエリー(query)** データ・プロバイダからの情報の要求です。リレーショナル・データ・ソースにアクセスする場合などに使用されます。

**クエリー・ガバナー(query governor)** Essbase Integration Server のパラメータ、または Essbase サーバーの構成設定です。データ・ソースに対して実行されるクエリーの時間とサイズをコントロールします。

**クラスタ(cluster)** 単一リソースとして動作して、タスクの負荷を共有し、フェイルオーバーのサポートを提供する一連のサーバーまたはデータベースです。システムにおける単一障害点となるサーバーやデータベースを排除します。

**クラスタ棒グラフ(clustered bar charts)** カテゴリを横に並べたグラフです。並列カテゴリの分析に便利です。垂直棒グラフでのみ使用されます。

**繰返し(iteration)** 同じバージョンのデータを修正して移行する予算またはプランニング・サイクルのパスです。

**クリーン・ブロック(clean block)** 計算スクリプトによってすべての次元が一度に計算された場合、または計算スクリプトで SET CLEARUPDATESTATUS コマンドが使用された場合の、データベース全体の計算が完了しているデータ・ブロックを指します。

**クロス集計レポート(crosstab reporting)** テーブル・フォーマットでデータの分類および集計を行うことです。テーブルのセルには、交差する分類に合致するデータの集計結果が保管されています。たとえば、製品販売情報のクロス集計レポートに、列見出しとして Small や Large などのサイズ属性、行見出しとして Blue や Yellow などの色属性を表示できます。テーブルの中で Large と Blue が交差するセルには、サイズが Large のすべての Blue 製品の総売上げが表示されます。

**グリッドの POV(grid POV)** 行、列、またはページの交差に次元を配置せずに、グリッド上で次元メンバーを指定する手段です。レポート・デザインはグリッド・レベルで POV の値を設定し、ユーザーの POV がグリッドに影響を与えないように防ぐことができます。次元に含まれるグリッドの値が1つのとき、その次元は行、列、またはページではなくグリッドの POV に配置します。

**グループ(group)** 複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナです。



**グローバル・レポート・コマンド(global report command)** 別のグローバル・コマンドに置き換えられるか、またはファイルが終了するまで実行し続けるレポート・スクリプトのコマンドです。

**計算(calculation)** データを集約したり、データベースで計算スクリプトを実行したりするプロセスです。

**計算結果アイテム(computed item)** データベースやキューブに物理的に保管される列に対して、仮想の列を指します。クエリー実行時にデータベースにより、または Interactive Reporting Studio の「結果」セクションで計算されます。計算結果アイテムは、関数、データ・アイテム、およびダイアログ・ボックスで提供される演算子に基づくデータ計算であり、レポートに含まれたり他のデータの計算に再利用されることがあります。

**計算スクリプト(calc script)** データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。

**系統データ(genealogy data)** 割当ての計算後にオプションで生成される追加データです。このデータにより、すべての割当てでステップにわたるコストまたは収益のフローについてレポートを作成できます。

**系列(lineage)** 異なるメタデータ要素間の関係です。1 つメタデータ要素が他の 1 つ以上のメタデータ要素からどのように導き出されるかを示し、メタデータ要素を物理ソースまでトレースします。Essbase Studio では、この関係を系列ビューでグラフィカルに表示できます。 [トレーサビリティ\(traceability\)](#) も参照してください。

**結合(join)** 特定の列または行の共通のコンテンツに基づく 2 つのリレーショナル・データベース・テーブルまたはトピックの間のリンクです。通常、異なるテーブルまたはトピック内の同一または類似するアイテムの間で結合が起きます。たとえば、Customer テーブルと Orders テーブルで Customer ID の値が同一である場合、Customer テーブル内のレコードが Orders 内のレコードに結合します。

**欠落データ(#MISSING)(missing data(#MISSING))** ラベル付けされた場所のデータが存在しないか、値が含まれていないか、データが入力されていないかまたはロードされていないことを示すマーカーです。たとえば、勘定科目に当期ではなく過去または将来の期間のデータが含まれている場合は、欠落データが存在します。

**権限(permission)** データまたは他のユーザーとグループを管理するために、ユーザーおよびグループに付与されるアクセス・レベルです。

**検索ガジェット(Search gadget)** Reporting and Analysis のリポジトリを検索します。検索ガジェットは、ドキュメントをインポートしたときに設定されたドキュメントのキーワードや説明で一致を探します。

**検証(validation)** アウトラインに対してビジネス・ルール、レポート・スクリプト、またはパーティション定義をチェックして、チェック対象のオブジェクトが有効であることを確認するプロセスです。たとえば、FDM の検証ルールにより、FDM からターゲット・アプリケーションにデータがロードされた後で特定の条件が満たされているかどうかを確認されます。

**限界税率(Marginal Tax Rate)** 税引き後の負債コストを計算するために使用されます。最近計上された所得に適用される税率(所得額に適用される最高の税率区分の税率)を示し、連邦税、州税、および地方税を含みます。課税対象所得と税率区分の現在のレベルに基づいて、限界税率を予測できます。

**現地通貨(local currency)** 入力通貨タイプです。入力通貨タイプが指定されていない場合は、現地通貨がエンティティの基本通貨に一致します。

**原点(origin)** 2 つの軸の交差です。

**子(child)** データベース・アウトライン内で親を持つメンバーです。

**高機能計算(intelligent calculation)** 最後に実行された計算以降に更新されたデータ・ブロックを追跡する計算メソッドです。

**交差(intersection)** 多次元データベース内の次元の交差を表すデータの単位です。ワークシートのセルです。

**構成ファイル(configuration file)** セキュリティ・プラットフォームでは、XML ドキュメントの構成を製品の管理者やインストール・プログラムに依存しています。XML ドキュメントは有意義なプロパティの値を示し、企業の認証シナリオに関連する場所と属性を指定するように変更する必要があります。

**構造ビュー(structure view)** トピックをコンポーネントのデータ・アイテムの単純なリストとして表示します。

**構築メソッド(build method)** データベース・アウトラインを変更するために使用するメソッドの一種です。データ・ソース・ファイルのデータ・フォーマットに基づいて構築メソッドを選択します。

**個人の反復タイム・イベント(personal recurring time events)** 再利用可能なタイム・イベントです。作成したユーザーのみがアクセスできます。

**個人用変数(personal variable)** 複雑なメンバー選択の特定の選択ステートメントです。

**個人用ページ(personal pages)** リポジトリ情報を参照するための個人用ウィンドウです。表示する情報、およびレイアウトと色を選択します。

**コミット・アクセス(committed access)** Essbase のトランザクションの処理方法に影響する Essbase カーネルの分離レベルです。コミット・アクセスでは、同時トランザクションは書き込みロックを長期間保持し、予測可能な結果を生成します。

**コンテキスト変数(context variable)** タスクフロー・インスタンスのコンテキストを特定するために、特定のタスクフローに定義される変数です。

**コンテンツ(content)** リポジトリに保管されたあらゆるタイプのファイルの情報です。

**コンテンツ・ブラウザ(content browser)** コンテンツを参照して選択し、Workspace ページに配置するために使用できるコンポーネントです。

**コントリビューション(contribution)** 子エンティティから親に追加される値です。それぞれの子は親に対するコントリビューションを持ちます。

**コントロール・グループ(controls group)** 証明書および評価の情報を維持および整理するために FDM で使用されます。サーベンス・オクスリ(Sarbanes-Oxley)法の規定に準拠する上で特に役立ちます。

**コード・ページ(code page)** 一連のテキスト文字へのビット組合せのマッピングです。コード・ページは、それぞれ異なる文字セットをサポートします。各コンピュータには、ユーザーが必要とする言語の文字セットについてのコード・ページ設定が含まれます。このドキュメントでは、コード・ページは非 Unicode のエンコードのビット組合せに文字をマッピングします。[エンコード方式\(encoding\)](#)も参照してください。

**差異(variance)** プラン値と実績値などの 2 つの値の差です。

**サイクル・スルー(cycle through)** データベース内で複数パスを実行し、同時に計算することを指します。

**再構成 URL(reconfigure URL)** ユーザーが Workspace にログオンしているときに、サブレット構成設定を動的に再ロードするための URL です。

**再構築(restructure)** データベース・インデックス、また場合によってはデータ・ファイルの再生成もしくは再構築を行う操作です。

**最新(latest)** 最新の期間として定義されたメンバーからデータ値を取得するために使用される、スプレッドシートのキー・ワードです。

**最上位メンバー(top-level member)** 次元のアウトラインで、階層ツリーの一番上に位置する次元メンバーです。次元メンバー間に階層の関係がない場合は、ソート順で最初のメンバーを指します。階層の関係がある場合、最上位メンバーの名前が次元名と同一となるのが一般的です。

**サブ勘定科目のナンバリング(Subaccount Numbering)** 不連続の整数を使用してサブ勘定科目のナンバリングを行うためのシステムです。

**サブスクライブ(subscribe)** アイテムまたはフォルダが更新されるときに自動的に通知を受け取るように、アイテムまたはフォルダにフラグを付けることを指します。

**サポート詳細(supporting detail)** セルの値を算出した計算および仮定です。

**三角換算法(triangulation)** 第 3 の共通通貨を介して、ある通貨から別の通貨に残高を変換する手段です。欧州の場合はユーロが共通通貨として使用されます。たとえば、フランス・フランからイタリア・リラに変換する場合、ユーロが共通通貨として定義されます。したがって、フランの残高をリラに変換するには、フランからユーロに変換してから、ユーロからリラに変換します。

**算出ステータス(calculation status)** 一部の値または式の計算が変更されたことを示す集計ステータスです。影響を受けるエンティティについて正しい値を取得するには、再集計する必要があります。

**算術演算子(mathematical operator)** 式およびアウトラインでのデータの計算方法を定義する記号です。標準的な算術演算子またはブール演算子が使用されます(+、-、\*、/、%など)。

**算術データ・ロード(arithmetic data load)** データベース内の値に対して演算(たとえば各値に 10 を加算するなど)を実行するデータ・ロードです。

**サンプリング(sampling)** エンティティの特性を判別するためにエンティティの代表的な部分を選択するプロセスです。[メタデータのサンプリング\(metadata sampling\)](#)も参照してください。

**サービス(services)** ビジネス・アイテムを取得、変更、追加、および削除するためのリソースです(権限付与、認可など)。

**サーブレット(servlet)** Web サーバーが実行可能なコンパイルされたコードです。

**残高勘定科目(balance account)** 特定の時点の符号なしの値を保管する勘定科目の種別です。

**式(formula)** データベース・メンバーを計算する演算子、関数、次元およびメンバー名、および定数の組合せです。

**式の保存(preserve formulas)** データ取得中にワークシート内に保持される、ユーザーが作成した式です。

**資産勘定科目(asset account)** 勘定科目の種別の 1 つです。会社の資産の値を保管します。

**支出勘定科目(expense account)** 期別の値と年次累計値を保管する勘定科目です。値が正の場合は、純利益が減ります。

**市場リスク割増額(Market Risk Premium)** 国債よりもリスクの高い投資を投資家に呼びかけるための、安全率に追加して支払われる利回りです。予測される市場利回りから安全率を差し引いて計算されます。この数字が示すモデルは将来の市況に近いものとなる必要があります。

**システム抽出(system extract)** データをアプリケーションのメタデータから ASCII ファイルに転送します。

**子孫(descendant)** データベース・アウトラインで親の下に位置するメンバーです。たとえば、年、四半期および月を含む次元では、メンバー Qtr2 およびメンバー April がメンバー Year の子孫となります。

**シナリオ(scenario)** データを分類するための次元です(Actuals、Budget、Forecast1、Forecast2 など)。

**支配比率(percent control)** 所属するグループ内でエンティティが受ける支配の程度です。

**収益勘定科目(income account)** 期別の値と年次累計値を保管する勘定科目です。値が正の場合は純利益が増えます。

**集計(consolidation)** 従属するエンティティからのデータを親エンティティに集約するプロセスです。たとえば、次元 Year に Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 というメンバーが含まれている場合、この集計は Year になります。

**集計比率(percent consolidation)** 親に集計された子の値の割合です。

**集計ファイル(\*.cns)(consolidation file(\*.cns))** 集計ファイルは、集計のプロセスでチャートまたはツリー・ビューを使用して Strategic Finance ファイルを追加、削除、移動するためのグラフィカル・インタフェースです。集計ファイルを使用して、集計を定義したり変更したりすることも可能です。

**集計ファイル(親)(consolidated file(Parent))** 事業部門のすべてのファイルが集計されたファイルです。集計の定義を含みます。

**集計ルール(consolidation rule)** 階層のノードを集計する際に実行されるルールを特定します。親の残高が正しく集計されるように、顧客固有の適切な式を含めることができます。消去プロセスは、集計ルール内でコントロールできます。

**修飾名(qualified name)** 定まったフォーマットのメンバー名です。重複メンバーのアウトラインにおいて、重複メンバー名を区別します([Market].[East].[State].[New York]、[Market].[East].[City].[New York] など)。

**集約(aggregation)** 集約ストレージ・データベースの値をロール・アップおよび保管するプロセスです。または集約プロセスによって保管された結果を指します。

**集約関数(aggregate function)** 関数の一種です。合計、平均の計算など、データの要約や分析を実行します。

**集約スクリプト(aggregation script)** 集約を構築するための集約ビューの選択を定義するファイルです。集約ストレージ・データベースのみで使用されます。

**集約ストレージ・データベース(aggregate storage database)**

潜在的に大きな多数の次元に分類される疎に分散した大規模なデータをサポートするように設計されたデータベースのストレージ・モデルです。上位のメンバーと式は動的に計算され、選択されたデータ値は集約、保管されます。通常、集約の合計所要時間が改善されます。

**集約制約(aggregate limit)** 集約要求ライン・アイテムや集約メタトピック・アイテムに設定する制約です。

**集約セル(aggregate cell)** 複数のセルから構成されるセルです。たとえば、Children(Year)を使用するデータ・セルは、Quarter 1、Quarter 2、Quarter 3、および Quarter 4 のデータを含む 4 つのセルに展開されます。

**集約ビュー(aggregate view)** 各次元内のメンバーのレベルに基づく集約セルの集合です。計算時間を短縮するため、値は事前に集約されて集約ビューとして保管されています。取得は集約ビューの合計から開始され、合計に追加されます。

**出資比率(percent ownership)** エンティティが親によって所有される程度です。

**手動ステージ(manual stage)** 完了するためにユーザーが操作する必要があるステージです。

**消去(elimination)** 組織内のエンティティ間でのトランザクションをゼロに設定(消去)するプロセスです。

**消去済勘定科目(Eliminated Account)** 集計ファイルに表示されない勘定科目です。

**詳細チャート(detail chart)** 要約チャートで、詳細な情報を提供するチャートです。詳細チャートは要約チャートの下にある「調査」セクションに列で表示されます。要約チャートに円グラフが表示される場合、その下の詳細チャートには円の各区分が示されます。

**使用済ブロック(dirty block)** 最後に計算された後に変更されたセルを含むデータ・ブロックです。子ブロックが使用済である(つまり更新されている)場合、上位のブロックにも使用済のマークが付けられます。

**シリアル計算(serial calculation)** デフォルト計算設定です。1 つの計算を複数のタスクに分割して、一度に 1 つのタスクを計算します。

**仕訳(JE)(journal entry(JE))** シナリオと期間の残高勘定科目の借方または貸方に計上する調整の集合です。

**シングル・サインオン(single sign-on)** 外部のログイン情報を使用するシングル・ログインにより、複数の EPM System 製品にアクセスできる機能です。

**信頼できるパスワード(trusted password)** ある製品について認証されたユーザーが、パスワードを再入力せずに他の製品にもアクセスできるようにするパスワードです。

**信頼できるユーザー(trusted user)** 認証されたユーザーです。

**時間次元(time dimension)** データが示す期間を定義します(会計期間、暦時間など)。

**軸(axis)** (1)測定と分類に使用されるグラフィックを貫通する直線です。(2)多次元のデータを整理および関連付けるために使用されるレポートのアスペクトです(フィルタ、ページ、行、列など)。たとえば、Simple Basic でデータ・クエリーを実行する場合、軸では Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 の値の列を定義できます。Market と Product の階層による合計が行データとして取得されます。

**時系列レポート作成(time series reporting)** カレンダーの日付(年、四半期、月、週など)に基づくデータのレポート作成プロセスです。

**次元(dimension)** ビジネス・データを整理して値の抽出や保持のために使用されるデータ・カテゴリです。通常、次元には関連するメンバーをグループ化した階層が含まれます。たとえば、Year 次元は多くの場合四半期、月などの期間の各単位ごとのメンバーが含まれます。

**次元間の無関係性(interdimensional irrelevance)** 次元が他の次元と交差しない状況を指します。次元に含まれるデータは、交差しない次元はアクセスできないため、交差しない次元は無関係となります。

**次元構築(dimension build)** Essbase アウトラインに次元およびメンバーを追加するプロセスです。

**次元構築のルール(dimension build rules)** データ・ロードのルールに似た仕様です。Essbase でアウトラインを変更するために使用されます。変更は外部データ・ソース・ファイルのデータに基づきます。

**次元性(dimensionality)** MaxL DML において、セットで示された次元およびその順序です。たとえば、{(West, Feb), (East, Mar)} というセットの場合は、含まれている 2 つのタプルはいずれも次元(Region, Year)を反映しているため、同一の次元性であることとなります。



**次元タイプ(dimension type)** 定義済の機能を使用可能にする次元のプロパティです。時間のタグが付けられた次元は、定義済のカレンダー機能を持ちます。

**次元タブ(dimension tab)** 「ピボット」セクションで、行と列の間でデータのピボットを実行するためのタブです。

**次元テーブル(dimension table)** (1)特定のビジネス・プロセスに関する多数の属性を含むテーブルです。(2)Essbase 統合サービスでは、Essbase の潜在的な次元を定義する 1 つ以上のリレーショナル・テーブルのための、OLAP モデルのコンテナを指します。

**事前計算(precaculation)** ユーザーが取得する前にデータベースで計算を実行することです。

**持続性(persistence)** Essbase の操作や設定に対する継続的または長期的な影響です。たとえば、ユーザー名やパスワードの有効性について、Essbase 管理者がその持続性を制限することがあります。

**実行時プロンプト(runtime prompt)** ビジネス・ルールが実行される前にユーザーが入力または選択する変数です。

**実績の頻度(result frequency)** 日付のセットを作成して結果を収集および表示するために使用されるアルゴリズムです。

**自動逆仕訳(auto-reversing journal)** 次期に逆仕訳する調整を入力するための仕訳です。

**自動ステージ(automated stage)** ユーザーの操作を必要としないステージです(データ・ロードなど)。

**従業員(employee)** 特定のビジネス・オブジェクトに対して責任を負う(または関与する)ユーザーです。従業員は組織に勤めている必要はありません(コンサルタントなど)。従業員は、認可のためにユーザー・アカウントに関連付けられている必要があります。

**重要事業領域(CBA)(critical business area(CBA))** 部門、地域、工場、コスト・センター、プロフィット・センター、プロジェクト・チーム、またはプロセスに編成された個人またはグループです。責任チームまたはビジネス領域とも呼ばれます。

**重要成功要因(CSF)(critical success factor (CSF))** 戦略目標を達成するために確立および維持する必要のある能力です。戦略目標または重要プロセスにより所有され、1 つ以上のアクションに対する親となります。

**上位レベル・ブロック(upper-level block)** 少なくとも 1 つの疎メンバーが親レベルのメンバーになっているデータ・ブロックです。

**冗長データ(redundant data)** 重複データ・ブロックです。Essbase で更新されたブロックがコミットされるまで、トランザクションの間保持されます。

**ジョブ(jobs)** 出力生成のために起動できる特殊なプロパティを持つドキュメントです。ジョブには Interactive Reporting、SQR Production Reporting、または汎用ドキュメントを含めることができます。

**ジョブの出力(job output)** ジョブの実行によって生成されたファイルやレポートです。

**数値属性範囲(numeric attribute range)** 基本次元メンバーを関連付けるために使用される機能です。メンバーは個別の数値を含み、値の範囲を示す属性を持ちます。たとえば、顧客を年齢別に分類する場合、Age Group 属性次元に 0-20、21-40、41-60、および 61-80 という年齢範囲に該当するメンバーを含めることができます。各 Customer 次元メンバーは Age Group 範囲に関連付けられます。データを取得する際は、個別の年齢の値ではなく年齢範囲に基づいて処理されます。

**スクレーピング(scraping)** データ・ソースを検査して、最も基本的なメタデータ要素を得ることを指します。[イントロスペクション\(introspection\)](#) と対比してください。

**スケーリング(scaling)** スケーリングによって値の表示方法を判別します(整数、十単位、百単位、千単位、百万単位など)。

**スコア(score)** ターゲットを達成するレベルです。通常はターゲットのパーセンテージとして表されます。

**スコアカード(scorecard)** 目標を達成する上での、従業員、戦略要素、または責任要素の進行状況を示すビジネス・オブジェクトです。スコアカードに追加された各メジャーおよび子スコアカードについて収集されるデータに基づいて、進行状況が確認されます。

**スコープ(scope)** Essbase の操作または設定により包含されるデータ領域です(セキュリティ設定により影響を受けるデータ領域など)。通常、スコープには粒度が 3 レベルあり、上位レベルが下位レベルを包含します。これらのレベルは上位から下位の順で、システム全体(Essbase サーバー)、Essbase サーバー上のアプリケーション、Essbase サーバー・アプリケーション内のデータベースとなります。**持続性(persistence)**も参照してください。

**ステージ(stage)** 通常は個別のユーザーにより実行される、タスクフロー内の 1 つの論理ステップを形成するタスクの説明です。ステージには手動と自動の 2 つのタイプがあります。

**ステージ・アクション(stage action)** 自動ステージで、ステージを実行するために呼び出されたアクションです。

**ステージ後割当て(post stage assignment)** 割当てモデルにおける割当てです。後に続くモデル・ステージの場所に割り当てられます。

**ステージ内割当て(intrastage assignment)** 財務フローの割当てです。同じステージ内のオブジェクトに対して割り当てられます。

**ステージング領域(staging area)** 特定のアプリケーションの必要性に対応するために作成するデータベースです。ステージング領域は、1 つ以上の RDBMS のスナップショット(再構築されたバージョン)です。

**ステータス・バー(Status bar)** 画面下部のステータス・バーには、コマンド、勘定科目、およびデータ・ファイルの現在のステータスに関する有用な情報が表示されます。

**スナップショット(snapshot)** 特定の時点の読取り専用データです。

**スポットライト(Spotlighter)** 選択された条件に基づくカラー・コーディングを使用可能にするツールです。

**スマート・カット(SmartCut)** URL フォームのリポジット・アイテムへのリンクです。

**スマート・スライス(smart slice)** Smart View で、データ・ソースの再利用可能なパースペクティブです。次元または次元メンバーの限定的なセットを含みません。

**スマート・タグ(smart tags)** Microsoft Office アプリケーションでのキーワードです。スマート・タグのメニューから使用可能な定義済アクションに関連付けられています。EPM System 製品でも、スマート・タグを使用して Reporting and Analysis のコンテンツのインポートや Financial Management および Essbase の機能へのアクセスが可能です。

**スーパー・サービス(super service)** RSC サービスを開始するために startCommonServices スクリプトによって使用される専用のサービスです。

**スーパーバイザ(supervisor)** サーバーのすべてのアプリケーション、データベース、関連ファイル、セキュリティ機構にフル・アクセスできるユーザーです。

**ズーム(zoom)** レポートの倍率を設定します。たとえば、ページ全体またはページ幅に合わせて倍率を変更したり、100%を基準としてパーセントで倍率を指定したりできます。

**ズームチャート(ZoomChart)** チャートを拡大することにより詳細情報を表示するために使用されます。チャートに表示されるメトリックについて数値情報を詳細に表示できます。

**精度(precision)** 数値に表示される小数点以下の桁数です。

**製品(product)** Shared Services における、Planning や Performance Scorecard などのアプリケーション・タイプです。

**セカンダリ・メジャー(secondary measure)** プライマリ・メジャーよりも優先度の低いメジャーです。セカンダリ・メジャーにはパフォーマンス・レポートがありませんが、スコアカードで使用したり、次元メジャーのテンプレートを作成するために使用できます。

**責任マップ(accountability map)** 組織内の責任チーム(重要事業領域とも呼ばれます)の責任、報告、および依存関係の構造を視覚的、階層的に示します。

**セキュリティ・エージェント(security agent)** Web アクセス管理プロバイダ(Netegrity SiteMinder など)です。企業の Web リソースを保護します。

**セキュリティ・プラットフォーム(security platform)** EPM System 製品で外部認証とシングル・サインオン機能を使用するためのフレームワークです。

**世代(generation)** データベースでのメンバー関係を定義する階層ツリー内のレイヤーです。世代は、次元の最上位のメンバー(世代 1)から子メンバーへと 1 世代ずつ下に配置されていきます。一意の世代名を使用すると、階層ツリー内のレイヤーを特定できます。

**設計レポート(Design Report)** コンポーネント・ライブラリを使ってカスタム・レポートを作成するための Web Analysis Studio のインタフェースです。

**接続ファイル(connection file)** [Interactive Reporting 接続ファイル\(.oce\)](#)([Interactive Reporting connection file\(.oce\)](#))を参照してください。

**セル(cell)** (1)多次元データベースの次元の交差を表すデータ値です。ワークシート上の行および列の交差を指します。(2)管理ドメインに属するノードの論理グループです。

**セル・ノート(cell note)** Essbase データベースでセルに付けられるテキスト注釈です。セル・ノートは LRO の一種です。

**選択リスト(choice list)** レポート・デザイナーがレポートの視点(POV)を定義する際に各次元に指定するメンバーのリストです。定義されたメンバー・リストに指定されたメンバーを選択するか、または動的リストの関数に定義された条件に一致するメンバーを選択するのみで、選択リストを使用して次元の POV を変更できます。

**戦略マップ(Strategy map)** 上位レベルのミッションおよびビジョンのステートメントを、組織が、構成要素である下位レベルの戦略的達成目標に組入れる方法を示します。

**戦略目標(SO)(strategic objective (SO))** 測定可能な結果によって定義された長期目標です。各戦略目標は、アプリケーション内の 1 つのパーспекティブに関連付けられ、1 つの親(エンティティ)を持ち、重要成功要因または他の戦略目標の親になります。

**税金の初期残高(Taxes - Initial Balances)** Strategic Finance では、損失の初期残高、収益の初期残高、および納税の初期残高のエントリーは、Strategic Finance の最初の期間に先立つ期間に発生していることを前提とします。

**相関サブクエリー(correlated subqueries)** 親クエリーの各行で一度評価されるサブクエリーです。サブクエリーのトピック・アイテムを親クエリーのトピックに結合することにより作成されます。

**相互割当て(reciprocal assignment)** 財務フローの割当ての一種です。宛先の 1 つとしてソースが含まれます。

**組織(organization)** 各エンティティ、およびその関係を定義するエンティティの階層です。

**疎次元(sparse dimension)** ブロック・ストレージ・データベースで、他の次元と比較した際に、すべてのメンバーの組合せについてのデータを含んでいる可能性が低い次元です。たとえば、すべての製品についてのデータがすべての顧客に含まれているわけではありません。**密次元(dense dimension)** と対比してください。

**祖先(ancestor)** その下にメンバーを含む分岐メンバーです。たとえば、メンバー Qtr2 とメンバー 2006 はメンバー April の祖先です。

**属性(attribute)** 次元メンバーの特性です。たとえば、Employee 次元のメンバーは名前、年齢、住所といった属性を持ち、Product 次元のメンバーはサイズ、味などの複数の属性を持つ可能性があります。

**属性計算次元(Attribute Calculations dimension)** メンバーのグループに対して、合計、カウント、平均、最小、および最大を計算するシステム定義の次元です。この次元は動的に計算され、データベース・アウトラインでは表示されません。たとえば、メンバー Avg を使用すると、製品 Red についてニューヨークでの 1 月の平均売上値を計算できます。

**属性次元(attribute dimension)** 次元の一種です。次元のメンバーの属性や特質に基づいて分析できます。

**属性タイプ(attribute type)** 様々な関数(データのグループ化、選択、または計算)を使用可能にするためのテキスト、数値、ブール値、日付、またはリンク属性タイプです。たとえば、Ounces 属性次元は数値タイプを持つので、各製品の属性として指定されるオンス数を使用して当該製品のオンス当たりの収益を計算できます。

**属性の関連付け(attribute association)** データベース・アウトラインでの関係です。これにより、属性次元のメンバーが基本次元のメンバーの特性を表します。たとえば、製品 100-10 がグレープ味である場合、製品 100-10 は Flavor 属性の関連付けがグレープになります。したがって、Product 次元のメンバー 100-10 は Flavor 属性次元のメンバー Grape に関連付けられることになります。

**属性レポート(attribute reporting)** 基本次元メンバーの属性に基づくレポート作成プロセスです。**基本次元(base dimension)**も参照してください。

**貸借一致の仕訳(balanced journal)** 借方の合計と貸方の合計が等しい仕訳です。

**対称型マルチプロセッシング(SMP)(symmetric multiprocessing (SMP))** マルチプロセッシングとマルチスレッディングを使用可能にするサーバーのアーキテクチャです。多数のユーザーが単一のインスタンスに同時に接続した場合でも、パフォーマンスが大きく低下することはありません。

**タイトル・バー(Title bar)** Strategic Finance 名、ファイル名、およびシナリオ名のバージョン・ボックスを表示します。

**タイム・イベント(time events)** ジョブを実行するトリガーです。

**タイム・スケール(time scale)** 指定された期間別(毎月、四半期ごとなど)にメトリックを表示します。

**タイム・ライン・ビューア(time line viewer)** 特定の場所について、完了したプロセス・フロー・ステップの日時を表示するための FDM の機能です。

**多次元データベース(multidimensional database)** 3つ以上の次元でデータを整理、保管、および参照するメソッドです。次元のセットが交差するポイントが個別の値となります。**リレーショナル・データベース(relational database)**と対比してください。

**タスクフロー(taskflow)** ビジネス・プロセスの自動化を指します。手続きのルールに従って、あるタスクフロー参加者から別の参加者にタスクが渡されます。

**タスクフロー・インスタンス(taskflow instance)** タスクフローの単一のインスタンスを示します。タスクフローの状態と関連データが含まれます。

**タスクフロー管理システム(taskflow management system)** タスクフローの定義および作成し、その実行を管理します。定義付け、ユーザーまたはアプリケーションのやりとり、およびアプリケーションの実行可能ファイルが含まれます。

**タスクフロー参加者(taskflow participant)** 手動ステージおよび自動ステージの両方について、タスクフローのステージのインスタンスに関連付けられているタスクを実行するリソースです。

**タスクフロー定義(taskflow definition)** タスクフロー管理システムのビジネス・プロセスを示します。ステージとステージ間の関係のネットワークから構成され、タスクフローの開始と終了を示す基準、および個別のステージに関する情報(参加者、関連アプリケーション、関連アクティビティなど)が含まれます。

**タスク・リスト(task list)** 特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリストです。

**タブ(tabs)** Strategic Finance で、勘定科目とレポートのナビゲーションを行うことができるビューです。

**タプル(tuple)** MDX 構文の要素です。セルは、各次元からのメンバーの交差として参照されます。次元が削除されている場合、最上位のメンバーが示されます。たとえば、(Jan)、(Jan, Sales)、([Jan], [Sales], [Cola], [Texas], [Actual])といったタプルがあります。

**単項演算子(unary operator)** アウトラインのメンバーに関連付けられている算術インディケータ(+、-、\*、/、%)です。単項演算子では、データベースのロールアップ中のメンバーの計算方法が指定されます。

**代替階層(alternate hierarchy)** 共有メンバーの階層です。代替階層はデータベース・アウトラインの既存の階層に基づきますが、次元に代替レベルを持ちます。代替階層により、異なる視点(POV)から同一データを表示できます。

**ダッシュボード(dashboard)** 業務の要約を対話的に示すメトリックと指標の集まりです。ダッシュボードにより分析アプリケーションを構築して配置できます。

**置換(replace)** データ・ロードのオプションの1つです。データ・ロード・ファイルに指定された期間のすべての勘定科目からの既存の値を消去し、データ・ロード・ファイルからの値をロードします。ロード・ファイルに勘定科目が指定されていない場合、指定された期間に該当する値が消去されます。

**チャート(chart)** スプレッドシート・データをグラフィカルに表したものです。視覚的な表示により、分析、カラー・コーディング、および比較の手助けとなるビジュアル・キューの効率が上がります。

**チャート・テンプレート(chart template)** ワークスペース・チャートに表示するメトリックを定義するテンプレートです。



**抽出コマンド(extraction command)** Essbase レポート作成コマンドの 1 つです。データベースから抽出される RAW データの選択、向き、グループ分け、および配列を処理します。小なり記号(<)から始まるコマンドです。

**調査(Investigation) ドリルスルー(drill-through)**を参照してください。

**調整(adjustment) 仕訳(JE)(journal entry(JE))**を参照してください。

**調整勘定科目(plug account)** 会社間勘定科目の消去プロセスで均衡しない差額が保管される勘定科目です。

**重複する別名(duplicate alias name)** 別名テーブルに複数存在し、データベース・アウトラインの複数メンバーに関連付けられている可能性のある名前です。重複する別名は、重複メンバーのアウトラインでのみ使用できます。

**重複メンバーのアウトライン(duplicate member outline)** 重複メンバー名を格納しているデータベース・アウトラインです。

**重複メンバー名(duplicate member name)** データベース内に異なるメンバーを表して重複して存在する同一のメンバー名です。たとえば、ニューヨーク州を示すメンバーとニューヨーク市を示すメンバーが存在する場合、データベースに New York という名前のメンバーが 2 つ含まれることがあります。

**直接レート(direct rate)** 為替レート・テーブルに入力する通貨レートです。直接レートは通貨換算に使用されます。たとえば、残高を日本円から米ドルに変換する場合、変換元通貨を日本円、変換先通貨を米ドルとして、為替レート・テーブルに期間またはシナリオのレートを入力します。

**通貨(monetary)** 金銭的な値です。

**通貨換算(currency conversion)** データベースの通貨の値を別の通貨に変換するプロセスです。たとえば、1 米ドルをユーロに変換するには、ドルに為替レート(たとえば、0.923702)を乗じます( $1 \times 0.923702$ )。変換後のユーロの額は 0.92 になります。

**通貨の上書き(Currency Overrides)** 入力期間で、選択した入力メソッドを上書きして、デフォルト通貨/アイテムとして該当期間の値を入力できます。入力メソッドを上書きするには、数値の前または後にシャープ(#)を入力します。

**通貨パーティション(currency partition)** アプリケーションでの定義に従って、基本通貨から現地通貨メンバーを隔離する次元タイプです。通貨タイプ(実績、予算、予測など)を特定します。

**通常仕訳(regular journal)** 特定の期間に一度かぎりの調整を入力するための機能です。貸借一致、エンティティごとに貸借一致、貸借不一致のいずれかになります。

**通知ガジェット(Notifications gadget)** 他のユーザーやシステムから受け取った通知メッセージの履歴を表示します。

**定義済ドリル・パス(predefined drill paths)** データ・モデルでの定義に従って次の詳細レベルにドリルするために使用されるパスです。

**適応状態(adaptive states)** Interactive Reporting Web Client の権限レベルです。

**テキスト・メジャー(text measure)** メジャーの値をテキストとして表現できるデータ型です。Essbase では、メジャーが示されている次元で Text としてタグ付けされたメンバーを指します。セルの値は定義済テキストとして表示されます。たとえば、Satisfaction Index というテキスト・メジャーについては、Low、Medium、および High という値を含めることがあります。**型付きメジャー(typed measure)**、**テキスト・リスト(text list)**、および**導出テキスト・メジャー(derived text measure)**も参照してください。

**テキスト・リスト(text list)** Essbase で、数値の識別子にマッピングされたテキストの値を保管するオブジェクトです。テキスト・リストではテキスト・メジャーを使用可能にします。

**テンプレート(template)** 特定のデータを一貫して取得するように設計された定義済のフォーマットです。

**デフォルト通貨単位(Default Currency Units)** データの単位スケールを定義します。たとえば、千単位で分析を定義するように選択して 10 を入力すると、10,000 と解釈されます。

**データ関数(data function)** データを集約する関数です。データの平均、最大値、カウントを求めたり、他の統計値によりデータのグループを集約します。

**データ・キャッシュ(data cache)** 非圧縮データ・ブロックを保持するメモリー内のバッファです。

**データ・セル(data cell)** **セル(cell)**を参照してください。

**データ値(data value)** [セル\(cell\)](#)を参照してください。

**「データなし」ステータス(NO DATA status)** 集計ステータスの1つです。特定の期間と勘定科目のデータがこのエンティティに含まれていないことを示します。

**データ・ファイル・キャッシュ(data file cache)** 圧縮データ(PAG)ファイルを保持する、メモリー内のバッファです。

**データ・フォーム(data form)** Web ブラウザなどのインタフェースからデータベースにデータを入力でき、データまたは関連テキストを表示して分析できるグリッド表示です。一部の次元メンバー値は固定され、データが特定の視点から表示されます。

**データベース接続(database connection)** データ・ソースへの接続に使用する定義とプロパティを保管し、データベース参照を移動可能にして広く使用できるようにするファイルです。

**データ・マイニング(data mining)** Essbase データベースを検索して、大量のデータの中から隠れた関係やパターンを見つけるプロセスです。

**データ・モデル(data model)** データベース・テーブルのサブセットを示します。

**データ・ロック(data lock)** 指定された基準(期間、シナリオなど)に従ってデータの変更を防ぎます。

**データ・ロード位置(data load location)** FDM で、ソース・データをターゲット・システムに送信する報告単位です。通常、ターゲット・システムにロードされる各ソース・ファイルに対して FDM のデータ・ロード位置が1つあります。

**データ・ロードのルール(data load rules)** テキストベース・ファイル、スプレッドシート、またはリレーショナル・データ・セットからのデータをデータベースにロードする方法を判別する一連の基準です。

**透過パーティション(transparent partition)** ローカルのデータベースの一部であるかのように、リモート・データベースのデータにアクセスして変更できるようにする共有パーティションです。

**透過ログイン(transparent login)** ログイン画面を起動せずに認証されたユーザーをログインさせます。

**統合(integration)** Shared Services を使用して EPM System 製品間でデータを移動するために実行されるプロセスです。データ統合の定義によりソース・アプリケーションと宛先アプリケーションの間でのデータの移動が指定され、データの動きのグループ化、順序付け、およびスケジュールが決定されます。

**トップ・ラベルとサイド・ラベル(top and side labels)** 列と行の見出しです。ピボット・レポートの上部とサイドにそれぞれ表示されます。

**トラフィック・ライト(traffic lighting)** 2つの次元メンバーの比較、または一定の制限値に基づいて、レポートのセルまたはピンを色分けする機能です。

**トリガー(triggers)** ユーザーが指定した基準に従ってデータを監視するための、Essbase の機能の1つです。基準に一致すると、Essbase はユーザーまたはシステム管理者にアラートを送信します。

**トレーサビリティ(traceability)** メタデータ要素を物理ソースまで追跡する機能です。たとえば Essbase Studio の場合、キューブ・スキーマをそれ自体の階層およびメジャー階層から次元要素、日付/時間要素、メジャー、そして最終的には物理ソースまで追跡できます。

**トレース・レベル(trace level)** ログ・ファイルで捕捉された詳細のレベルを定義します。

**トレース割当て(trace allocations)** Profitability and Cost Management の機能の1つです。財務データのフローに対する視覚的な追跡を可能にします。この追跡は単一の交差から、モデル内の前方または後方に実行できます。

**トークン(token)** 外部認証システム上の1つの有効なユーザーまたはグループの暗号化された ID です。

**トースト・メッセージ(toast message)** 画面右下の隅に表示され、現れたり消えたりするメッセージです。

**同期(sync)** Shared Services とアプリケーション・モデルの同期です。

**同期済(synchronized)** モデルの最新バージョンがアプリケーションと Shared Services の両方に存在する状態を指します。[モデル\(model\)](#)も参照してください。

**導出テキスト・メジャー(derived text measure)** Essbase Studio で、範囲として表現された定義済ルールによって管理される値を持つテキスト・メジャーです。たとえば、Sales メジャーに基づき、High、Medium、および Low という値を含む Sales Performance Index という導出テキスト・メジャーの場合、対応する売上が該当する範囲に応じて High、Medium、および Low が表示されるように定義されます。テキスト・メジャー(text measure)も参照してください。

**動的階層(dynamic hierarchy)** 集約ストレージ・データベースのアウトラインに限定して、取得時に値が計算されるメンバーの階層です。

**動的計算(dynamic calculation)** Essbase で、動的計算メンバー、または動的計算および保管メンバーとしてタグ付けされているメンバーについてデータを取得する場合にのみ実行される計算です。メンバーの値は、バッチ計算で事前に計算されるのではなく、取得時に計算されます。

**動的計算および保管メンバー(Dynamic Calc and Store members)** ブロック・ストレージ・アウトラインで、値を最初に取得したときにのみ計算が行われるメンバーです。計算された値はデータベースに保管され、2 回目以降の取得では計算を実行する必要がありません。

**動的計算メンバー(Dynamic Calc members)** ブロック・ストレージ・アウトラインで、取得時にのみ計算が行われるメンバーです。取得要求の処理が完了すると、計算された値は破棄されます。

**動的参照(dynamic reference)** データ・ソース内のヘッダー・レコードを指すルール・ファイル内のポインタです。

**動的時系列(Dynamic Time Series)** ブロック・ストレージ・データベースで、期間累計のレポート作成を実行するプロセスです。

**動的ビュー勘定科目(dynamic view account)** 勘定科目の種別の 1 つです。勘定科目の値は、表示されているデータから動的に計算されます。

**動的メンバー・リスト(dynamic member list)** システムにより作成される名前付きメンバー・セットです。ユーザーが定義した基準が使用されます。アプリケーションでリストが参照されるとき、リストは自動的にリフレッシュされます。次元メンバーの増減に応じて基準が自動的にリストに適用され、変更内容が反映されます。

**動的レポート(dynamic report)** レポートを実行するときに更新されるデータを含むレポートです。

**ドメイン(domain)** データ・マイニングにおいて、データ内での移動の範囲を表す変数です。

**ドライバ(driver)** ドライバは割当てメソッドの一種です。ドライバを使用する複数ソース間の数学的關係、およびこれらのソースがコストや収益を割り当てる宛先を示します。

**ドリルスルー(drill-through)** あるデータ・ソースの値から別のソースの対応するデータに移動することです。

**ドリルダウン(drill-down)** 次元の階層を使用してクエリ結果セット内をナビゲートすることです。ドリルダウンにより、ユーザーのパースペクティブが集約データから詳細に移ります。たとえば、ドリルダウンにより年と四半期の階層関係、または四半期と月の階層関係が明らかになります。

**名前付きセット(named set)** MaxL DML で、MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションに定義された論理を使用するセットです。名前付きセットはクエリー内で複数回参照することが可能です。

**入力データ(input data)** 計算されるのではなくソースからロードされるデータです。

**認証(authentication)** 安全対策としての ID の確認です。一般に、認証はユーザー名およびパスワードに基づきます。パスワードおよびデジタル・シグネチャは認証のフォームです。

**認証サービス(authentication service)** 単一の認証システムを管理するコア・サービスです。

**ネイティブ認証(native authentication)** サーバーまたはアプリケーション内で、ユーザー名とパスワードを認証するプロセスです。

**ネスト列ヘッダー(nested column headings)** 複数の次元からのデータを表示するレポート列の列ヘッダーのフォーマットです。たとえば、Year と Scenario のメンバーが含まれる列ヘッダーはネスト列です。ネスト列ヘッダーでは、ヘッダーの一番上の行の Q1(Year 次元)が、ヘッダーの一番下の行の Actual および Budget(Scenario 次元)で修飾されます。

**ノート(note)** ボックス、メジャー、スコアカード、またはマップ要素に関連する補足情報です。

**ハイパーテキスト・マークアップ言語(HTML)(Hypertext Markup Language (HTML))** Web ブラウザでのデータ表示を指定するプログラミング言語です。

**ハイパーリンク(hyperlink)** ファイル、Web ページ、またはイントラネット HTML ページへのリンクです。

**ハイブリッド分析(Hybrid Analysis)** リレーショナル・データベースに保管された下位のデータを、Essbase に保管された要約レベルのデータにマッピングする分析です。リレーショナル・システムの大規模スクラビリティと多次元データを組み合わせます。

**ハイライト(highlighting)** 構成に応じて、チャートのセルまたはズームチャートの詳細がハイライトされ、値のステータス(赤色は不正、黄色は警告、緑色は良好)が示されます。

**範囲(range)** 上限と下限、およびその間に含まれる値のセットです。数字、金額、または日付を含むことが可能です。

**反復タイム・イベント(recurring time event)** ジョブの実行開始点と実行頻度を指定するイベントです。

**反復テンプレート(recurring template)** 各期間に対して同一の調整を行うための仕訳テンプレートです。

**汎用ジョブ(generic jobs)** SQR Production Reporting または Interactive Reporting 以外のジョブを指します。

**凡例ボックス(legend box)** 次元のデータ・カテゴリを特定するためのラベルを含むボックスです。

**バックアップ(backup)** アプリケーション・インスタンスの重複コピーです。

**バッチ POV(batch POV)** ユーザーの POV において、バッチに含まれる各レポートおよびブックのすべての次元の集合です。バッチのスケジュールを立てる際は、バッチ POV で選択されたメンバーを設定できます。

**バッチ計算(batch calculation)** データベースにおいてバッチで実行される計算です(計算スクリプト、すべてのデータベース計算など)。動的計算はバッチ計算とはみなされません。

**バッチ処理モード(batch processing mode)** サーバー管理や診断のルーチン・タスクを自動化するために使用できるバッチやスクリプト・ファイルを記述するために、ESSCMD を使用するメソッドです。ESSCMD スクリプト・ファイルは複数のコマンドを実行でき、オペレーティング・システムのコマンド・ラインから実行したり、オペレーティング・システムのバッチ・ファイルから実行したりすることが可能です。バッチ・ファイルを使用すると、複数の ESSCMD スクリプトを呼び出したり、ESSCMD の複数インスタンスを実行したりできます。

**バッチ・ファイル(batch file)** 複数の ESSCMD スクリプトを呼び出して複数の ESSCMD セッションを実行できるオペレーティング・システム・ファイルです。Windows システムの場合、バッチ・ファイルには BAT というファイル拡張子が付けられます。UNIX の場合、バッチ・ファイルはシェル・スクリプトとして記述されます。

**バッチ・ローダー(batch loader)** 複数ファイルの処理を可能にする FDM コンポーネントです。

**バージョン(version)** データのシナリオのコンテキスト内で使用される、起こりうる結果です。たとえば、Budget - Best Case と Budget - Worst Case では、Budget がシナリオであり、Best Case と Worst Case がバージョンです。

**パターン照合(pattern matching)** 条件として入力されるアイテムの一部またはすべての文字と値を照合する機能です。欠落文字は、疑問符(?)またはアスタリスク(\*)などのワイルド・カード値で表すことができます。たとえば、「Find all instances of apple」では apple が戻されるのに対して、「Find all instances of apple\*」では apple、applesauce、applecranberry などが戻されます。

**パフォーマンス・インディケータ(performance indicator)** ユーザーが指定した範囲に基づくメジャーおよびスコアカード・パフォーマンスを示すために使用されるイメージ・ファイルです。ステータス記号とも呼ばれます。デフォルト・パフォーマンス・インディケータを使用することもできますが、無制限に独自のパフォーマンス・インディケータを作成することも可能です。

**パブリック・ジョブ・パラメータ(public job parameters)** 管理者が作成する再利用可能な名前付きジョブ・パラメータです。必要なアクセス権を持つユーザーがアクセスできます。



**パブリック反復タイム・イベント(public recurring time events)** 管理者が作成する再利用可能なタイム・イベントです。アクセス制御システムからアクセスできます。

**パレット(palette)** JASCに準拠し、.PAL 拡張子を持つファイルです。各パレットには相互に補完し合う16色が含まれ、ダッシュボードの色要素の設定に使用することが可能です。

**パースペクティブ(perspective)** スコアカードのメジャーやアプリケーションにおける戦略目標をグループ化するために使用されるカテゴリです。パースペクティブにより、主要な利害関係者(顧客、従業員、株主、金融関係者など)またはキー・コンピテンシ領域(時間、コスト、品質など)を示すことができます。

**パーティション化(partitioning)** データ・モデルの間で共有またはリンクされるデータの領域を定義するプロセスです。パーティション化は Essbase アプリケーションのパフォーマンスとスケーラビリティに影響することがあります。

**パーティション領域(partition area)** データベース内のサブ・キューブです。パーティションは、データベースの一部からの1つ以上のセル領域から構成されます。複製パーティションおよび透過パーティションの場合、2つのパーティションが同じ形状となるために、領域内のセルの数がデータ・ソースとターゲットで同一となる必要があります。データ・ソース領域に18個のセルが含まれる場合、データ・ターゲット領域にも対応する18個のセルが含まれていなければいけません。

**「非アクティブ」ステータス(INACTIVE status)** エンティティの当期の集計が非アクティブにされていることを示します。

**非アクティブ・グループ(inactive group)** 管理者によりシステムへのアクセスが非アクティブにされているグループです。

**非アクティブ・サービス(inactive service)** 稼動が一時停止しているサービスです。

**非アクティブ・ユーザー(inactive user)** 管理者によりアカウントが非アクティブにされているユーザーです。

**非次元モデル(non-dimensional model)** Shared Services のモデル・タイプの1つです。セキュリティ・ファイル、メンバー・リスト、計算スクリプト、Web フォームなどのアプリケーション・オブジェクトが含まれます。

**日付メジャー(date measure)** Essbase で、メジャーが示されている次元で「日付」のタグが付けられているメンバーです。セルの値はフォーマット済の日付として表示されます。メジャーとしての日付は時間次元を使用して示すことが困難なタイプの分析に役立つことがあります。たとえば、一連の固定資産の取得日をアプリケーションで追跡する必要がある場合、取得日の範囲が実現可能な時間次元モデリングの範囲を超えて長期にわたってしまうことがあります。**型付きメジャー(typed measure)**も参照してください。

**表示タイプ(display type)** リポジトリに保存された3種類の Web Analysis フォーマット(スプレッドシート、チャート、ピンボード)のいずれかを指します。

**標準仕訳テンプレート(standard journal template)** 各期間に共通する調整を転記するために使用する仕訳の機能です。たとえば、共通する勘定科目 ID、エンティティ ID、または金額を含む標準テンプレートを作成すると、これを多数の通常仕訳の基準として使用できます。

**標準次元(standard dimension)** 属性次元以外の次元です。

**ビジネス・プロセス(business process)** 集合的にビジネス上の目標を達成するための一連のアクティビティです。

**ビジネス・ルール(business rules)** 必要な一連の結果値を生成するためにアプリケーション内に作成される論理式または式です。

**ビジュアル・キュー(visual cue)** 特定のタイプのデータ値をハイライトする、フォントや色などのフォーマットが設定されたスタイルです。データ値は、次元メンバー、親メンバー、子メンバー、共有メンバー、動的計算、式を含むメンバー、読取り専用データ・セル、読取りおよび書込みデータ・セル、またはリンク・オブジェクトのいずれかになります。

**ビュー(view)** 年次累計または期別のデータを示すものです。

**ピボット(pivot)** 取得したデータのパーспекティブを変更する機能です。Essbase では、まず次元が取得され、データが行に展開されます。その後、データのピボット(並べ替え)を行うことにより、異なる視点を得ることができます。

**ピン(pins)** ピンボードと呼ばれるグラフィック・レポート上に配置される対話型アイコンです。ピンは、基盤となるデータ値や分析ツールの基準に基づいて、イメージやグラフィック・ライトの色を変更できます。

**ピンボード(pinboard)** 3種類のデータ・オブジェクトの表示タイプの1つです。ピンボードは、背景およびピンと呼ばれる対話型アイコンから成るグラフィックです。ピンボードを使用するにはグラフィック・ライトを定義する必要があります。

**ファイルの区切り文字(file delimiter)** データ・ソース内のフィールドを区切る文字です(カンマ、タブなど)。

**ファクト・テーブル(fact table)** スター結合スキーマの中心のテーブルです。外部キー、および次元テーブルから取得した要素により特徴付けられます。通常、このテーブルにはスキーマの他のすべてのテーブルに関連する数値データが含まれます。

**フィルタ(filter)** データ・セットで、特定の基準に従って値を制限する制約です。たとえば、特定のテーブル、メタデータ、または値を除外したり、アクセスをコントロールしたりする場合に使用されます。

**フィールド(field)** データ・ソース・ファイル内のアイテムです。Essbase データベースにロードされません。

**フォルダ(folder)** 他のファイルを含んで階層を形成するファイルです。

**フォーマット(format)** ドキュメントやレポート・オブジェクトの視覚的な特性です。

**フォーマット文字列(format string)** Essbase で、セルの値の表示を変換するメソッドです。

**復元(restore)** データベースが破損または破壊された場合にデータおよび構造の情報を再ロードする操作です。通常、データベースをシャット・ダウンおよび再起動した後で実行されます。

**複製パーティション(replicated partition)** パーティション・マネージャにより定義されるデータベースの一部です。あるサイトで管理されるデータの更新を別のサイトで保管されているデータのコピーに伝播するために使用されます。ユーザーは、ローカルのデータベースと同じようにデータにアクセスできます。

**負債勘定科目(liability account)** 一定時点における会社の負債残高を保管する勘定科目の種別です。未払費用、買掛金勘定、長期借入金などが負債勘定科目に含まれます。

**フッター(footer)** レポート・ページ下部に表示されるテキストまたはイメージです。ページ番号、日付、ロゴ、タイトル、ファイル名、作成者名など、動的な関数や静的なテキストが含まれます。

**フリーフォーム・グリッド(free-form grid)** 動的計算のために、複数のソースからのデータを提示、入力、および統合するためのオブジェクトです。

**フリーフォーム・レポート作成(free-form reporting)** ワークシートに次元メンバーまたはレポート・スクリプト・コマンドを入力することにより、レポートを作成することを指します。

**フレーム(frame)** デスクトップ上の領域です。ナビゲーション・フレームと Workspace フレームが2つの主要な領域となります。

**フロー勘定科目(flow account)** 期別と年次累計の符号なしの値を保管する勘定科目です。

**ブック(book)** 類似する Financial Reporting ドキュメントのグループを含むコンテナです。ブックには、次元セクションまたは次元の変更が指定されていることがあります。

**ブックの POV(book POV)** ブックが実行される次元のメンバーです。

**ブックマーク(bookmark)** ユーザー個人のページに表示されるレポート・ドキュメントまたは Web サイトへのリンクです。ブックマークには、マイ・ブックマークとイメージ・ブックマークの2つのタイプがあります。

**ブロック(block)** プライマリ・ストレージ・ユニットです。多次元配列であり、すべての密次元のセルを表します。

**ブロックされた勘定科目(Blocked Account)** 手動で入力する必要があるために集計ファイルの計算に含めない勘定科目です。

**ブロック・ストレージ・データベース(block storage database)** 疎次元に定義されたデータ値の密度に基づいてデータを分類および保管する、Essbase のデータベース・ストレージ・モデルです。データ値はブロック単位で保管され、ブロックは値を含む疎次元メンバーについてのみ存在します。

**ブロードキャスト・メッセージ(broadcast message)**

Planning アプリケーションにログオンしているユーザーに対して管理者が送信する単純なテキスト・メッセージです。メッセージには、システムの可用性、アプリケーション・リフレッシュの通知、アプリケーションのバックアップなどのユーザー向けの情報が表示されます。

**分離レベル(isolation level)** データベース操作のロックとコミットの動作(コミット・アクセスまたはアンコミット・アクセス)を判別する Essbase カーネルの設定です。

**プライマリ・メジャー(primary measure)** 企業および事業のニーズにとって重要な、優先度の高いメジャーです。コンテンツ・フレームに表示されます。

**プランナ(planner)** プランナは、大多数のユーザーから構成されます。データの入力と送信、他のプランナが作成したレポートの使用、ビジネス・ルールの実行、タスク・リストの使用、電子メール通知の使用可能化、および Smart View の使用が可能です。

**プランニング・ユニット(planning unit)** シナリオ、バージョン、およびエンティティの交差におけるデータ・スライスです。プラン・データの準備、確認、注釈付け、および承認のための基本単位です。

**プレゼンテーション(presentation)** Web Analysis ドキュメントのプレイリストです。レポートの分類、整理、並べ替え、配布、および確認を行うことができます。リポジトリ内のレポートを参照するポインタを含みます。

**プロキシ・サーバー(proxy server)** セキュリティを保証するために、ワークステーション・ユーザーとインターネットの間で仲介を行うサーバーです。

**プロジェクト(project)** 実装でグループ化された EPM System 製品のインスタンスです。たとえば、Planning プロジェクトには Planning アプリケーション、Essbase キューブ、Financial Reporting サーバー・インスタンスが含まれることがあります。

**プロセス監視レポート(process monitor report)** FDM データ変換プロセスにおける、場所のリストとその位置を表示します。プロセス監視レポートを使用して、決算手続のステータスを監視できます。レポートにはタイム・スタンプが付けられるので、時間データがロードされた場所を判別するために使用できます。

**プロット領域(plot area)** X 軸、Y 軸、および Z 軸で囲まれている領域です。円グラフの場合は、その周りに表示される長方形の領域です。

**プロパティ(property)** アーチファクトの特性です(サイズ、タイプ、処理手順など)。

**プロビジョニング(provisioning)** ユーザーおよびグループに対して、リソースへのアクセス権を付与するプロセスです。

**並列エクスポート(parallel export)** Essbase データを複数のファイルにエクスポートする機能です。並列エクスポートは、1つのファイルにエクスポートした場合に比べて時間を短縮できます。また、1つのデータ・ファイルでサイズが大きくなりすぎた場合の、オペレーティング・システムでの操作上の問題を解決できます。

**並列計算(parallel calculation)** 計算オプションの1つです。Essbase では計算がタスクに分割され、一部のタスクは同時に計算されます。

**並列データ・ロード(parallel data load)** Essbase で、複数プロセスのスレッドによりデータ・ロードのステージを同時に実行することを指します。

**ヘッド・アップ・ディスプレイ(head up display)** Windows デスクトップの上に、背景イメージを含むロード済 Smart Space デスクトップを表示するモードです。

**変換(transformation)** (1)アプリケーションの移行後も宛先環境で正しく機能するように、アーチファクトを変換します。(2)データ・マイニングで、キューブおよびアルゴリズムのセルの間で(双方向に)流れるデータを変更します。

**変換先通貨(destination currency)** 残高の変換後の通貨です。為替レートを入力して、変換元通貨から変換先通貨に変換します。たとえばユーロから米ドルに変換する場合、変換先の通貨は米ドルです。

**変換元通貨(source currency)** 為替レートを使用して変換先通貨に変換される前の、値の元の通貨です。

**「変更済」ステータス(CHANGED status)** 集計ステータスの1つです。エンティティのデータが変更されたことを示します。

**別名(alias)** 代替名です。たとえば、列をより簡単に特定する記述子として、メンバー名のかわりに別名を表示できます。

**別名テーブル(alias table)** メンバーの代替名を含むテーブルです。

**ページ(page)** グリッドまたはテーブルでの情報表示の一種です。しばしばZ軸により示されます。ページには、1つのフィールドからのデータ、計算により得られるデータ、またはテキストを含めることができます。

**ページ・ファイル(page file)** Essbase のデータ・ファイルです。

**ページ見出し(page heading)** レポートの現在のページで表示されているメンバーをリストした、レポート見出しの一種です。ページ上のすべてのデータ値には、ページ見出し内のメンバーが共通属性として適用されています。

**ページ・メンバー(page member)** ページ軸を判別するメンバーです。

**保管階層(stored hierarchy)** 集約ストレージ・データベースのアウトラインのみで使用される用語です。アウトラインの構造に従ってメンバーが集約される階層を指します。保管階層のメンバーには、式を含むことができないなどの一定の制限があります。

**ホスト(host)** アプリケーションとサービスがインストールされているサーバーです。

**ホスト・プロパティ(host properties)** ホストに関するプロパティです。ホストに複数の Install\_Home が含まれる場合は、いずれかの Install\_Home に関するプロパティとなります。ホスト・プロパティは CMC から構成されます。

**保存された仮定(saved assumptions)** ビジネス上の主要な計算を推進するための、Planning でのユーザー定義の仮定です(事業所の床面積 1 平方フィート当たりのコストなど)。

**棒グラフ(bar chart)** 1 から 50 のデータ・セットを含むことができるグラフです。各データ・セットには任意の数の値を割り当てることができます。データ・セットは、対応する棒のグループ、上下に積み上げた棒、または別々の行に個別の棒として表示されます。

**マイ Workspace ページ(My Workspace Page)** 複数のソース(ドキュメント、URL、その他のコンテンツ・タイプ)からのコンテンツを使用して作成されるページです。Oracle およびその他のソースからのコンテンツを集約するために使用可能です。

**マイニング属性(mining attribute)** データ・マイニングにおいて、一連のデータを分析する際の係数として使用する値のクラスです。

**マスター・データ・モデル(master data model)** 複数のクエリーによりソースとして参照される独立するデータ・モデルです。このモデルが使用される場合は、「クエリー」セクションのコンテンツ・ペインに「ロック済データ・モデル」と表示されます。データ・モデルは「データ・モデル」セクションに表示されるマスター・データ・モデルにリンクされています(管理者によって非表示になっていることがあります)。

**マップ・ナビゲータ(Map Navigator)** 戦略、責任、および因果関係の各マップに現在の位置を示す機能です。赤色のアウトラインで示されます。

**マップ・ファイル(Map File)** 外部データベースとの間のデータの送信や取得のための定義を保管するために使用されます。マップ・ファイルの拡張子は、データ送信用が.mps、データ取得用が.mpr となります。

**マルチロード(multiload)** 複数の期間、カテゴリ、および場所を同時にロードすることを可能にする FDM の機能です。

**マージ(merge)** データ・ロード・オプションの1つです。データ・ロード・ファイルで指定された勘定科目の値のみを消去し、データ・ロード・ファイルの値で置換します。

**密次元(dense dimension)** ブロック・ストレージ・データベースで、次元メンバーのすべての組合せのデータを含んでいる可能性のある次元です。たとえば、時間次元はすべてのメンバーのあらゆる組合せを含んでいる可能性があるために、しばしば密な次元となっています。疎次元(sparse dimension)と対比してください。

**ミニスキーマ(minischema)** データ・ソースからのテーブルのサブセットをグラフィカルに示したものです。データ・モデリングのコンテキストを表します。



**ミニレポート(minireport)** レポートのコンポーネントの1つです。レイアウト、コンテンツ、ハイパーリンク、およびレポートのロード用の1つ以上のクエリーを含みます。各レポートには、1つ以上のミニレポートを含めることができます。

**耳折れ(dog-ear)** 折り曲げられたページの角です。チャートのヘッダー領域の右上の隅に表示されます。

**メジャー(measures)** OLAP データベースのキューブに含まれる数値で、分析に使用されます。メジャーには、利益幅、売上原価、売上数量、予算などがあります。**ファクト・テーブル(fact table)**も参照してください。

**メタアウトライン(metaoutline)** 統合サービスで、OLAP モデルから Essbase のアウトラインを作成するための規則と構造を含んだテンプレートです。

**メタデータ(metadata)** データベースに保管された、またはアプリケーションにより使用されるデータのプロパティと属性を定義および説明するデータ・セットです。メタデータには、次元名、メンバー名、プロパティ、期間、およびセキュリティなどが含まれます。

**メタデータ・セキュリティ(metadata security)** ユーザーにより特定のアウトライン・メンバーへのアクセスを制限するための、メンバー・レベルのセキュリティ・セットです。

**メタデータのサンプリング(metadata sampling)** ドリルダウン操作で次元に含まれるメンバーのサンプルを取得するプロセスです。

**メタデータ要素(metadata elements)** データ・ソースから算出されるメタデータ、および Essbase Studio で使用するために保管され、カタログが作成されるおよびその他のメタデータです。

**メトリック(metric)** ビジネス・データから計算される数値測定単位です。ビジネス・パフォーマンス評価や企業トレンド分析に役立ちます。

**メンバー(member)** 次元内の個別のコンポーネントです。メンバーにより、類似する単位の集まりが個別に特定および区別されます。たとえば、時間次元には Jan、Feb、および Qtr1 などのメンバーが含まれることがあります。

**メンバー選択レポート・コマンド(member selection report command)** 兄弟、世代、レベルなどのアウトラインの関係に基づいて、メンバーの範囲を選択するレポート・ライター・コマンドの一種です。

**メンバー専用レポート・コマンド(member-specific report command)** レポート・ライターのフォーマット・コマンドの1つです。レポート・スクリプトで現れると実行されます。このコマンドは関連するメンバーにのみ影響し、メンバーを処理する前にフォーマット・コマンドを実行します。

**メンバー・リスト(member list)** 次元のメンバー、関数、他のメンバー・リストを示す名前付きのグループです。システムまたはユーザーにより定義されます。

**メンバー・ロード(member load)** 統合サービスで、次元およびメンバー(データを含まない)を Essbase のアウトラインに追加するプロセスです。

**目標(target)** 指定された期間(日、四半期など)についてメジャーに期待される結果です。

**持株会社(holding company)** 法的エンティティ・グループの一部であるエンティティです。グループ内のすべてのエンティティに対して直接的または間接的に投資しています。

**モデル(model)** (1)データ・マイニングで、アルゴリズムにより検査されたデータに関する情報の集合です。より広範なデータ・セットにモデルを適用することにより、データに関する有用な情報を生成できます。(2)アプリケーション固有の方法で示したデータが含まれるファイルまたはコンテンツの文字列です。モデルは Shared Services により管理される基本データであり、次元と非次元のアプリケーション・オブジェクトという2つの主要なタイプがあります。(3)Business Modeling で、検査対象の領域からの業務および財務上のフローを示し、また計算するために接続されたボックス・ネットワークです。

**役割(role)** リソースへのアクセス権をユーザーおよびグループに付与する際に使用される手段です。

**ユーザー定義属性(UDA)(user-defined attribute (UDA))** アウトラインのメンバーに関連付けられ、メンバーの特性を説明します。UDA を使用すると、指定された UDA が関連付けられているメンバーのリストが戻されます。

**ユーザー定義メンバー・リスト(user-defined member list)** ユーザー定義による、特定の次元に含まれるメンバーの静的なセットです。

**ユーザー・ディレクトリ(user directory)** ユーザーおよびグループの情報を集中管理する場所です。リポジトリまたはプロバイダとも呼ばれます。

**ユーザー変数(user variable)** ユーザーのメンバー選択に基づいて、データ・フォームを動的に配置し、指定されたエンティティのみを表示します。たとえば、Department というユーザー変数を使用すると、特定の部署および従業員を表示できます。

**要約チャート(Summary chart)** 「調査」セクションで、同じ列内で下に表示される詳細チャートをロール・アップし、各チャート列最上位の要約レベルにメトリックを描画します。

**予算管理者(budget administrator)** アプリケーションの設定、構成、維持、および制御の担当者です。アプリケーションのすべての権限およびデータ・アクセス権を持ちます。

**ライトバック(write-back)** 取得を行うスプレッドシートなどのクライアントが、データベースの値を更新する機能です。

**ライフ・サイクル管理(life cycle management)** アプリケーション情報をライフサイクルの最初から最後まで通して管理するプロセスです。

**ライフサイクル管理ユーティリティ(Lifecycle Management Utility)** アプリケーションとアーチファクトの移行に使用されるコマンドラインユーティリティです。

**ライン・アイテムの詳細(line item detail)** 勘定科目で最も下位の詳細レベルです。

**リソース(resources)** システムにより管理されるオブジェクトまたはサービスです(役割、ユーザー、グループ、ファイル、ジョブなど)。

**リポジトリ(repository)** ビューおよびクエリーに使用するためのメタデータ、フォーマット、および注釈の情報を保管します。

**領域(area)** メンバーおよび値の定義済みのセットであり、パーティションを構成します。

**履歴平均(Historical Average)** 多数の履歴期間にわたる勘定科目の平均です。

**リレーショナル・データベース(relational database)** 関連する2次元テーブルにデータを保管するデータベースです。[多次元データベース\(multidimensional database\)](#)と対比してください。

**リンク(link)** (1)リポジトリ・オブジェクトへの参照です。リンクはフォルダ、ファイル、ショートカットなどの参照に使用できます。(2)タスクフローで、あるステージのアクティビティが終了して次のアクティビティが開始するポイントです。

**リンク条件(link condition)** タスクフローのステージを順序付けるためにタスクフロー・エンジンにより評価される論理式です。

**リンク・データ・モデル(linked data model)** リポジトリのマスター・コピーにリンクされたドキュメントです。

**リンク・パーティション(linked partition)** データ・セルを使用して2つのデータベースをリンクするための共有パーティションです。ワークシートのリンク・セルをクリックすると、リンク・データベースの次元を示す新規シートが開きます。これにより、表示される次元をドリルダウンできます。

**リンク・レポート・オブジェクト(LRO)(linked reporting object (LRO))** セル・ノート、URL、テキスト、オーディオ、映像、画像を含むファイルなどの外部ファイルへのセルベースのリンクです。Financial Reporting では、Essbase LRO 向けにサポートされるのはセル・ノートのみです。[ローカル・レポート・オブジェクト\(local report object\)](#)と対比してください。

**隣接する四角形(bounding rectangle)** Interactive Reporting ドキュメントのセクションを個人用ページに埋め込む場合に、Interactive Reporting ドキュメントのコンテンツをカプセル化する必須のパラメータです。高さと幅を表すピクセル、または1ページ当たりの行数により指定されます。

**レイアウト領域(layout area)** Workspace ページで、コンテンツを配置可能な領域を指定するために使用されます。

**例外(exceptions)** 事前定義済みの条件を満たす値です。フォーマット・インディケータを定義したり、例外が生成されたときに登録ユーザーに通知したりできます。

**レイヤー(layer)** (1)階層構造内で横並びにメンバーを含む場所です。世代(上から下へ)またはレベル(下から上へ)により指定されます。(2)他のオブジェクトに対して相対的なオブジェクトの場所です。たとえば、Sample Basic データベースでは Qtr1 と Qtr4 は同じ年に含まれるので、世代が同一であることとなります。しかし、不均衡階層を含むデータベースの場合、Qtr1 と Qtr4 は同一世代であっても同じレイヤーに位置しないことがあります。

**レコード(record)** データベースで、1つの完全な入力項目を形成するフィールドのグループです。たとえば、顧客レコードには、名前、住所、電話番号、および販売データのフィールドが含まれることがあります。

**列(column)** グリッドまたはテーブルで縦方向に表示される情報です。列には、特定のフィールドからのデータ、計算により得られたデータ、またはテキストの情報が含まれます。

**レベル(level)** 階層ツリー構造において、データベース・メンバーの関係を定義するレイヤーです。レベルは一番下の次元メンバー(レベル 0)から上位の親メンバーへと並べられます。

**レベル 0 のブロック(level 0 block)** 疎のレベル 0 メンバーの組合せに使用されるデータ・ブロックです。

**レベル 0 のメンバー(level 0 member)** 子の存在しないメンバーです。

**レポート・エクストラクタ(Report Extractor)** スクリプトの実行時に、Essbase データベースからのレポート・データを取得する Essbase コンポーネントです。

**レポート・オブジェクト(report object)** レポートの設計において、テキスト・ボックス、グリッド、イメージ、チャートなどの動作や外観を定義するプロパティを持つ基本要素です。

**レポート・スクリプト(report script)** 1つ以上の運用レポートを生成する、Essbase レポート・ライター・コマンドを格納したテキスト・ファイルです。

**レポートの通貨(reporting currency)** 財務諸表を準備するために使用される通貨です。現地通貨からレポートの通貨に変換されます。

**レポート・ビューア(Report Viewer)** レポート・スクリプトの実行後に完全なレポートを表示する Essbase コンポーネントです。

**ログ・アナライザ(Log Analyzer)** Essbase ログのフィルタ、検索、および分析を行うための Administration Services の機能です。

**ロケーション別名(location alias)** データ・ソースを特定する記述子です。ロケーション別名により、サーバー、アプリケーション、データベース、ユーザー名、およびパスワードが指定されます。ロケーション別名は、DBA のデータベース・レベルで管理サービス・コンソール、ESSCMD、または API を使用して設定されます。

**ロケール(locale)** コンピュータで使用される言語、通貨、および日付フォーマット、データのソート順、文字セットのエンコード方式を指定するコンピュータ設定です。Essbase ではエンコード方式のみが使用されます。[エンコード方式\(encoding\)](#)および [ESSLANG](#) も参照してください。

**ロケール・ヘッダー・レコード(locale header record)** スクリプトなど、一部の非 Unicode でエンコードされたテキスト・ファイルの先頭で、エンコード・ロケールを特定するテキスト・レコードです。

**ロック済(locked)** ユーザーやプロセスがデータを変更するのを防ぐために、ユーザーが呼び出すプロセスです。

**「ロック済」ステータス(LOCKED status)** 集計ステータスの 1 つです。変更できないデータがエンティティに含まれていることを示します。

**ロック済データ・モデル(locked data model)** ユーザーが変更できないデータ・モデルです。

**論理グループ(logic group)** FDM で、ソース・ファイルが FDM にロードされた後に生成される 1 つ以上の論理勘定を含みます。論理勘定はソース・データから導き出される計算済勘定です。

**ローカル結果(local results)** データ・モデルのクエリー結果です。ローカルの結合で結果を使用する場合は、結果をデータ・モデルにドラッグして挿入できます。ローカル結果を要求すると、カタログに表示されます。

**ローカル・レポート・オブジェクト(local report object)** Explorer で Financial Reporting レポート・オブジェクトにリンクされていないレポート・オブジェクトです。[リンク・レポート・オブジェクト\(LRO\)](#) ([linked reporting object \(LRO\)](#)) と対比してください。

**ロールアップ(roll-up)** [集計\(consolidation\)](#) を参照してください。

**ワイルド・カード(wild card)** 検索文字列で、任意の 1 文字または文字グループを示す文字(\*)です。

**割当て(assignment)** 割当てモデルでのソースと宛先の関連付けです。Profitability and Cost Management で、割り当てられたコストや収益のフローの方向を制御します。

**ワーク・フロー(work flow)** FDM でデータを最初から最後まで処理するために必要なステップです。ワークフローは、インポート(GL ファイルからのデータ・ロード)、検証(すべてのメンバーが有効なアカウントにマッピングされていることの確認)、エクスポート(マッピングされたメンバーのターゲット・アプリケーションへのロード)、およびチェック(ユーザー定義の検証ルールを使用してデータを処理することにより、データの精度を確認)から構成されます。

**ワークブック(workbook)** 多数のワークシートを含むスプレッドシート・ファイル全体です。

# 索引

## A - Z

### Calculation Manager

- LCM ログ・ファイル, 187
- アプリケーションの移行, 184
- アーチファクト・リスト, 182
- 移行オプション, 184
- 移行の必要条件, 181
- インポート・オプション, 184
- エクスポート・オプション, 184
- サンプルの移行定義ファイル, 185
- 情報, 181
- 製品間のアーチファクトの依存関係, 184
- 製品の役割, 181
- テンプレートのアーチファクト, 183
- ルール・セットのアーチファクト, 183
- ルールのアーチファクト, 183

CSV ファイル、Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)用, 82

EPM System レジストリ。「Shared Services レジストリ」を参照

### Essbase

- Essbase Server アーチファクト, 95
- LCM ログ・ファイル, 102
- アプリケーション・アーチファクト, 96
- アプリケーションの移行, 99
- アーチファクト・リスト, 94
- 移行オプション, 99
- 移行に関する考慮事項, 98
- 移行の必要条件, 94
- インポート・オプション, 99
- エクスポート・オプション, 99
- サンプルの移行定義ファイル, 100
- 情報, 93
- 製品間のアーチファクトの依存関係, 99
- 製品の役割, 93
- データベース・アーチファクト, 96

Essbase Server アーチファクト, 95

Essbase アプリケーション・アーチファクト, 96

Essbase データベース・アーチファクト, 96

Essbase の役割

- 計算, 94
- サーバー・アクセス, 94
- データベース・マネージャ, 94

### Financial Management

Performance Management Architect アプリケーションの移行, 123

アーチファクト・リスト, 123

移行オプション, 131

移行に関する考慮事項, 130

移行の必要条件, 122

インポート・オプション, 131

エクスポート・オプション, 131

会社間アーチファクト, 128

クラシック・アプリケーションの移行, 122

サンプルの移行定義ファイル, 131

仕訳アーチファクト, 129

次元アーチファクト, 124

情報, 121

製品の役割, 121

セキュリティのアーチファクト, 124

トラブルシューティング, 133

ドキュメント・アーチファクト, 127

フェーズ送信アーチファクト, 126

フォーム・アーチファクト, 128

メンバー・リストのアーチファクト, 130

ルールのアーチファクト, 127

Financial Management の役割、アプリケーション管理者, 122

JVM エラー, 24

LCM 管理者の役割, 12, 20, 55

LCM コマンドライン・ユーティリティ。「ライフサイクル管理ユーティリティ」を参照

LCM ホーム, 20, 56

LCM ログ・ファイル



- Calculation Manager, 187
- Essbase の場合, 102
- Performance Management Architect, 179
- Performance Scorecard 用, 194
- Planning 用, 157
- Profitability and Cost Management 用, 199
- Reporting and Analysis, 119
- Shared Services 用, 91
- 配置メタデータ, 76
- OID
  - OpenLDAP へのデータの移行, 44
- OpenLDAP
  - OID へのデータの移行, 44
- Performance Management Architect
  - Financial Management のアプリケーションの移行, 123
  - LCM ログ・ファイル, 179
  - アプリケーションの移行, 169
  - アプリケーション・メタデータのアーチファクト, 161
  - アーチファクト・リスト, 160
  - 移行オプション, 170
  - 移行に関する考慮事項, 168
  - 移行の必要条件, 160
  - インポート・オプション, 170
  - エクスポート・オプション, 170
  - 共有次元のアーチファクト, 166
  - サンプルの移行定義ファイル, 173
  - 次元アクセスのアーチファクト, 167
  - 情報, 159
  - 製品間のアーチファクトの依存関係, 169
  - 製品の役割, 159
  - データ同期のアーチファクト, 167
- Performance Management Architect アプリケーションの移行
  - Planning 用, 140
- Performance Scorecard
  - LCM ログ・ファイル, 194
  - アプリケーションの移行, 192
  - アーチファクト・リスト, 190
  - 移行オプション, 192
  - 移行の必要条件, 190
  - インポート・オプション, 192
  - エクスポート・オプション, 192
  - オブジェクトのアーチファクト, 191
  - 管理オプションのアーチファクト, 191
  - サンプルの移行定義ファイル, 193
- 情報, 189
- 製品間のアーチファクトの依存関係, 192
- 製品の役割, 189
- Planning
  - LCM ログ・ファイル, 157
  - Performance Management Architect アプリケーションの移行, 140
  - アプリケーションの移行, 152
  - アーチファクト・リスト, 141
  - 移行オプション, 153
  - 移行に関する考慮事項, 150
  - 移行の必要条件, 140
  - インポート・オプション, 153
  - エクスポート・オプション, 153
  - クラシック・アプリケーションの移行, 140
  - グローバル・アーチファクト, 144
  - 構成アーチファクト, 142
  - サンプルの移行定義ファイル, 153
  - 情報, 139
  - 製品間のアーチファクトの依存関係, 152
  - 製品の役割, 139
  - セキュリティのアーチファクト, 150
  - プランのタイプのアーチファクト, 148
  - リレーショナル・データのアーチファクト, 143
- Planning 管理者の役割, 140
- Planning の役割
  - Planning 管理者, 140
  - アプリケーション作成者, 140
- Profitability and Cost Management
  - LCM ログ・ファイル, 199
  - アプリケーションの移行, 196
  - アーチファクト・リスト, 195
  - 移行オプション, 197
  - 移行の必要条件, 196
  - インポート・オプション, 197
  - エクスポート・オプション, 197
  - サンプルの移行定義ファイル, 197
  - 情報, 195
  - 製品間のアーチファクトの依存関係, 196
  - 製品の役割, 195
  - モデル・アーチファクト, 195
- Reporting and Analysis
  - LCM ログ・ファイル, 119
  - アプリケーションの移行, 115
  - アーチファクト・タイプ, 114
  - アーチファクト・リスト, 106

- 移行オプション, 115
  - 移行後のタスク, 116
  - 移行の必要条件, 104
  - インポート・オプション, 115
  - エクスポート・オプション, 115
  - 管理オプションのアーチファクト, 112
  - サンプルの移行定義ファイル, 116
  - 情報, 103
  - ジョブ・サービス・プロパティ構成, 105
  - スケジュール・オブジェクトのアーチファクト, 108
  - 製品間のアーチファクトの依存関係, 115
  - 製品の役割, 103
  - 製品プリファレンスのアーチファクト, 109
  - セキュリティのアーチファクト, 108
  - データ・アクセス・サービスのデータ・ソース作成, 105
  - データ・ソースの作成, 105
  - データ・ソースの接続変更, 116
  - トラブルシューティング, 118
  - 物理リソースのアーチファクト, 107
  - リポジトリ・オブジェクトのアーチファクト, 109
- Shared Services**
- LCM ログ・ファイル, 91
  - アプリケーションの移行, 81
  - アーチファクト・リスト, 78
  - 移行の必要条件, 78
  - サンプルの移行定義ファイル, 89
  - 情報, 77
  - 製品の役割, 77
  - セキュリティのアーチファクト, 79
  - タスク・フローのアーチファクト, 80
  - タスク・フローの移行オプション, 88
  - ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の CSV ファイル, 82
  - ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行オプション, 81
  - ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のインポート・オプション, 81
  - ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のエクスポート・オプション, 81
  - ネイティブ・ディレクトリのアーチファクト, 79
- Shared Services Console**
- アプリケーションから他のアプリケーションへの直接的な移行, 39
- アーチファクトの移行, 36
  - アーチファクトの検索, 35
  - アーチファクトの表示, 34
  - アーチファクト・レポートの生成, 50
  - 移行処理, 33
  - 移行ステータスの表示, 48
  - 移行定義の保存, 41
  - 移行データの削除, 49
  - 移行の実行, 41
  - 移行の必要条件, 18
  - 移行の編集, 41
  - 概要, 24
  - 起動, 23
  - 個々のアーチファクトのインポート, 43
  - 情報, 23
  - ツールバー・ボタン, 25
  - デフォルト・ログイン情報, 24
  - ネイティブ・ディレクトリ・アーチファクトの移行, 44
  - ファイル・システムからの移行, 38
  - ファイル・システムへの移行, 36
  - 編集のための Shared Services レジストリ・データの移行, 45
  - 編集のための個々のアーチファクトのエクスポート, 42
  - メニュー, 24
- Shared Services URL, 67**
- Shared Services サーバー、移行先, 36**
- Shared Services レジストリ**
- データのインポート, 47
  - データのエクスポート, 47
  - データの表示, 46
  - データの編集, 47
  - 編集用のデータの移行, 45
- Shared Services レジストリのアーチファクト, 75**
- あ行**
- アップグレード、定義, 11
  - 宛先オプション, 36
  - アプリケーション
    - 宛先オプションの定義, 36
    - 宛先の定義, 36
    - アプリケーション・グループからの除去, 28
  - アーチファクトの検索, 34
  - 移行, 36
  - 移動, 30

- 監査, 50
- 既存のアプリケーション・グループへの追加, 28
- 削除, 30, 31
- 新規アプリケーション・グループへの追加, 28
- すべて表示, 34
- 選択済のみ表示, 34
- ソース・オプションの定義, 36
- 定義, 27
- アプリケーション管理者の役割, 122
- アプリケーション・グループ
  - アプリケーションを新規に追加, 28
  - 削除, 29
  - 作成, 28
  - 定義, 27
  - 名前変更, 28
- アプリケーション作成者の役割, 140
- アプリケーションの移行
  - Calculation Manager, 184
  - Essbase の場合, 99
  - Performance Management Architect, 169
  - Performance Scorecard 用, 192
  - Planning 用, 152
  - Profitability and Cost Management 用, 196
  - Reporting and Analysis, 115
  - Shared Services 用, 81
- アプリケーションの移行ウィザード
  - 宛先および宛先オプションの定義に使用, 36
  - 移行を定義するために使用, 36
  - 起動, 36
  - ソースおよびソース・オプションの定義に使用, 36
- アプリケーションの移動, 30
- アプリケーションの監査, 50
- アプリケーション・メタデータのアーチファクト, 161
- アーチファクト
  - Calculation Manager について, 181
  - Essbase について, 93
  - Performance Scorecard について, 189
  - Profitability and Cost Management について, 195
  - Shared Services Console での検索, 35
  - Shared Services について, 77
  - 宛先オプションの定義, 36
  - 宛先の定義, 36
  - 移行, 36
  - 検索対象, 34
  - 個々の編集, 43
  - 個々をインポート, 43
  - すべて表示, 34
  - 選択済のみ表示, 34
  - ソース・オプションの定義, 36
  - 定義, 11
  - 配置メタデータについて, 73
  - 表示, 34
  - ファイル・システム上での個別の Reporting and Analysis の編集, 113
  - 複数の製品からのインポートとエクスポート, 20
  - 編集後に Reporting and Analysis をインポート, 113
  - 編集目的での個別の Reporting and Analysis アーチファクトのエクスポート, 113
  - 編集用に個々をエクスポート, 42
  - アーチファクト・タイプ、Reporting and Analysis, 114
  - アーチファクトの検索, 35
  - アーチファクトの検索オプション, 34
  - アーチファクトの参照, 34
  - アーチファクトの調査, 34
  - アーチファクトの表示, 34
  - アーチファクト・リスト
    - Calculation Manager, 182
    - Essbase の場合, 94
    - Financial Management について, 123
    - Performance Management Architect, 160
    - Performance Scorecard 用, 190
    - Planning 用, 141
    - Profitability and Cost Management 用, 195
    - Reporting and Analysis, 106
    - Shared Services 用, 78
    - 配置メタデータ, 74
  - アーチファクト・リスト・オプション, 34
  - アーチファクト・レポート, 50
- 移行
  - OID への OpenLDAP データの移行, 44
  - Shared Services サーバーに, 36
  - アプリケーションとアーチファクト, 36
  - 委任リスト, 44
  - グループ, 44
  - 実行, 41
  - スケジューリング, 55



- ステータスの表示, 48
- ステータス・レポートの削除, 48
- セキュリティ, 44
- ネイティブ・ディレクトリ, 44
- 編集, 41
- 役割, 44
- ユーザー, 44
- 移行、定義, 11
- 移行オプション
  - Calculation Manager, 184
  - Essbase の場合, 99
  - Financial Management について, 131
  - Performance Management Architect, 170
  - Performance Scorecard 用, 192
  - Planning 用, 153
  - Profitability and Cost Management 用, 197
  - Reporting and Analysis, 115
  - Shared Services タスク・フロー用, 88
  - Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)用, 81
  - 配置メタデータ, 75
- 移行後のタスク、Reporting and Analysis, 116
- 移行ステータス・レポート
  - 削除, 48
  - 表示, 48
- 移行定義
  - Calculation Manager のサンプル・ファイル, 185
  - Essbase のサンプル・ファイル, 100
  - Financial Management のサンプル・ファイル, 131
  - Performance Management Architect のサンプル・ファイル, 173
  - Performance Scorecard のサンプル・ファイル, 193
  - Planning のサンプル・ファイル, 153
  - Profitability and Cost Management のサンプル・ファイル, 197
  - Reporting and Analysis のサンプル・ファイル, 116
  - Shared Services のサンプル・ファイル, 89
  - XML スキーマ, 57
  - 作成, 41
  - ファイルの要素, 57
  - 保存, 41
- 移行定義の保存, 41
- 移行データ
  - 削除, 49
- 移行に関する考慮事項
  - Essbase の場合, 98
  - Financial Management について, 130
  - Performance Management Architect, 168
  - Planning 用, 150
- 移行のシナリオ、ライフサイクル管理用, 14
- 移行の実行, 41
- 移行の定義, 36
- 移行の必要条件
  - Calculation Manager, 181
  - Essbase の場合, 94
  - Financial Management について, 122
  - Performance Management Architect, 160
  - Performance Scorecard 用, 190
  - Planning 用, 140
  - Profitability and Cost Management 用, 196
  - Reporting and Analysis, 104
  - Shared Services Console, 18
  - Shared Services 用, 78
  - 配置メタデータ, 74
  - ライフサイクル管理ユーティリティ, 18
- 移行プロパティ・ファイル
  - Shared Services Console のサンプル, 51
  - Shared Services Console の変更, 51
  - ライフサイクル管理ユーティリティのサンプル, 63
  - ライフサイクル管理ユーティリティの変更, 63
- 委任リスト、移行, 44
- インストール
  - ライフサイクル管理, 20
  - ライフサイクル管理ユーティリティ, 56
- インポート
  - OpenLDAP, 44
  - Shared Services レジストリ・データ, 47
  - 個別アーチファクト, 43
  - セキュリティ, 44
  - ファイル・システムから, 38
  - 複数の製品, 20
  - 編集後の個別 Reporting and Analysis アーチファクト, 113
- インポート・オプション
  - Calculation Manager, 184
  - Essbase の場合, 99
  - Financial Management について, 131
  - Performance Management Architect, 170

Performance Scorecard 用, 192  
 Planning 用, 153  
 Profitability and Cost Management 用, 197  
 Reporting and Analysis, 115  
 Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)用, 81

エクスポート  
 OpenLDAP, 44  
 Shared Services レジストリ・データ, 47  
 セキュリティ, 44  
 ネイティブ・ディレクトリ, 44  
 ファイル・システムへ, 36  
 複数の製品, 20  
 編集目的での個別の Reporting and Analysis  
   アーチファクト, 113  
 編集用の個別アーチファクト, 42

エクスポート・オプション  
 Calculation Manager, 184  
 Essbase の場合, 99  
 Financial Management について, 131  
 Performance Management Architect, 170  
 Performance Scorecard 用, 192  
 Planning 用, 153  
 Profitability and Cost Management 用, 197  
 Reporting and Analysis, 115  
 Shared Services ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)用, 81

オブジェクトのアーチファクト, 191

## か行

会社間アーチファクト, 128  
 監査レポート, 50  
 管理オプションのアーチファクト, 112, 191

起動  
   Shared Services Console, 23  
   アプリケーションの移行ウィザード, 36

共有次元のアーチファクト, 166  
 クイック・スタート, 17  
 クラシック・アプリケーションの移行  
   Financial Management について, 122  
   Planning 用, 140

グループ、移行, 44  
 グローバル・アーチファクト, 144  
 計算の役割, 94  
 構成アーチファクト, 142  
 コマンドライン・ユーティリティ。「ライフサイクル管理ユーティリティ」を参照

## さ行

削除  
   アプリケーション, 30, 31  
   アプリケーション・グループ, 29  
   アプリケーション・グループのアプリケーション, 28

作成  
   アプリケーション・グループ, 28  
   移行定義, 41

「参照」タブ, 24  
 サンプルの移行プロパティ・ファイル  
   Shared Services Console の場合, 51  
   ライフサイクル管理ユーティリティ, 63

サーバー・アクセスの役割, 94  
 使用開始, 17  
 仕訳アーチファクト, 129  
 次元アクセスのアーチファクト, 167  
 次元アーチファクト  
   Financial Management について, 124

ジョブ・サービス・プロパティ構成、Reporting and Analysis, 105  
 スケジュール・オブジェクトのアーチファクト, 108  
 スケジュール済の移行, 55

製品の役割  
   Calculation Manager, 181  
   Essbase の場合, 93  
   Financial Management について, 121  
   Performance Management Architect, 159  
   Performance Scorecard 用, 189  
   Planning 用, 139  
   Profitability and Cost Management 用, 195  
   Reporting and Analysis, 103  
   Shared Services 用, 77

製品プリファレンスのアーチファクト, 109

セキュリティ  
   移行, 44  
   ライフサイクル管理ユーティリティ, 20

セキュリティのアーチファクト  
   Financial Management について, 124  
   Planning 用, 150  
   Reporting and Analysis, 108  
   Shared Services 用, 79

接続、検証, 68  
 選択済アーチファクト・オプション, 34  
 前提条件, 18

ソース・アーチファクトまたはアプリケーション、定義, 36  
 ソース・オプション、定義, 36

## た行

タスク・タブ, 24  
 タスクの実行, 68  
 タスク・フローのアーチファクト, 80  
 ターゲット・オプション、定義, 36  
 テンプレートのアーチファクト, 183  
 デフォルト・ログイン情報、Shared Services Console 用, 24  
 データ  
 移行の削除, 49  
 データ・アクセス・サービスのデータ・ソース作成、Reporting and Analysis, 105  
 データ・ソースの作成、Reporting and Analysis, 105  
 データ・ソースの接続変更、Reporting and Analysis, 116  
 データ同期のアーチファクト, 167  
 データベース・マネージャの役割, 94  
 登録アーチファクト, 75  
 トラブルシューティング  
 Financial Management について, 133  
 Reporting and Analysis, 118  
 ドキュメント・アーチファクト, 127

## な行

名前変更、アプリケーション・グループ  
 アプリケーション・グループ, 28  
 ネイティブ・ディレクター、移行, 44  
 ネイティブ・ディレクターのアーチファクト, 79

## は行

配置メタデータ  
 LCM ログ・ファイル, 76  
 Shared Services レジストリのアーチファクト, 75  
 アーチファクト・リスト, 74  
 移行オプション, 75  
 移行の必要条件, 74  
 情報, 73  
 登録アーチファクト, 75  
 役割, 73

表示

Shared Services レジストリ・データ, 46  
 ビュー・ペイン, 24  
 ファイル・システム  
 移行先, 36  
 インポート元, 38  
 エクスポート先, 36  
 ライフサイクル管理ユーティリティによるローカルの場所への移行, 67  
 ファイル・システム・アプリケーション・グループ  
 インポート元, 38  
 エクスポート先, 36  
 フェーズ送信アーチファクト, 126  
 フォーム・アーチファクト  
 Financial Management について, 128  
 物理リソースのアーチファクト, 107  
 ブラウザの問題  
 JVM エラー, 24  
 ポップアップ・ブロック, 24  
 プランのタイプのアーチファクト  
 Planning 用, 148  
 プロジェクト。「アプリケーション・グループ」を参照  
 プロパティ・ファイル  
 Shared Services Console のサンプル, 51  
 ライフサイクル管理ユーティリティのサンプル, 63  
 変更、アプリケーション・グループ, 28  
 編集  
 Shared Services レジストリ・データ, 47  
 移行, 41  
 個別アーチファクト, 43  
 ファイル・システム上の個別 Reporting and Analysis アーチファクト, 113  
 ベース・パス、ライフサイクル管理ユーティリティを使用して指定する, 68  
 ポップアップ・ブロック, 24

## ま行

メンバー・リストのアーチファクト, 130  
 モデル・アーチファクト, 195

## や行

役割  
 Calculation Manager, 181  
 Essbase の場合, 93

Financial Management について, 121  
 LCM 管理者, 12  
 Performance Management Architect, 159  
 Performance Scorecard 用, 189  
 Planning 管理者, 140  
 Planning 用, 139  
 Profitability and Cost Management 用, 195  
 Reporting and Analysis, 103  
 Shared Services 用, 77  
 アプリケーション管理者, 122  
 アプリケーション作成者, 140  
 移行, 44  
 計算, 94  
 サーバー・アクセス, 94  
 データベース・マネージャ, 94  
 配置メタデータ, 73  
 例外, 12  
 ユーザー、移行, 44  
 ユーザー管理コンソール。「Shared Services Console」を参照  
 要件, 18  
 要素、移行定義, 57  
 用途, 16

## ら行

ライフサイクル管理  
 Shared Services Console を使用した移行処理, 33  
 移行のシナリオ, 14  
 インストール, 20  
 機能, 12  
 クイック・スタート, 17  
 コンポーネント, 12  
 サポートする製品, 13  
 使用開始, 17  
 診断ログ, 71  
 情報, 11  
 製品コード・リスト, 13  
 セキュリティ, 20  
 前提条件, 18  
 トラブルシューティング, 69  
 複数の製品からのアーチファクトのインポートとエクスポート, 20  
 用途, 16  
 ライフサイクル管理ユーティリティ  
 HSS の接続属性, 58  
 LCM ホーム, 56

Shared Services URL の使用, 67  
 アプリケーションの接続属性, 58  
 アーチファクトの選択作成, 62  
 移行定義の作成, 57  
 移行におけるアーチファクト総数の概算, 66  
 移行の必要条件, 18, 56  
 インストール, 56  
 機能, 55  
 サンプルの移行プロパティ・ファイル, 63  
 サーバー・コンポーネントのインストールの場所, 56  
 システムの要件, 56  
 使用, 55  
 実行, 65  
 接続の検証, 68  
 ソース要素, 60  
 タスク要素, 60  
 タスクを完全に実行する, 68  
 ターゲット要素, 62  
 ファイル・システムの接続属性, 58  
 ベース・パスの指定, 68  
 役割, 55  
 ローカル・ファイル・システム場所への移行, 67  
 リポジトリ・オブジェクトのアーチファクト, 109  
 リレーショナル・データのアーチファクト, 143  
 ルール・セットのアーチファクト, 183  
 ルールのアーチファクト, 183  
 Financial Management について, 127  
 レポート  
 アーチファクト, 50  
 移行ステータス, 48  
 監査, 50  
 ログ・ファイル  
 Calculation Manager, 187  
 Essbase の場合, 102  
 Performance Management Architect, 179  
 Performance Scorecard 用, 194  
 Planning 用, 157  
 Profitability and Cost Management 用, 199  
 Reporting and Analysis, 119  
 Shared Services 用, 91  
 配置メタデータ, 76  
 ローカル・ファイル・システム、ライフサイクル管理ユーティリティによる移行, 67

## わ行

割り当てられた役割、移行, 44

A-Z あ行 か行 さ行 た行 な行 は行 ま行 や行 ら行 わ行